



Episode 1 新千歳空港から釧路へ

新千歳空港国内線ターミナルビルの向こう側、ここからは見えない滑走路の方から地鳴りのような爆音が響いて、僕の耳に届いた。

車のドアに手をかけようとしていた僕は、思わず振り返り空を見上げる。

どんよりとした曇り空に、その機影を見つけることはできなかった。

しかし、次第に遠くなりつつあるエンジン音は、その音の距離とは反比例するように僕の体を、心を揺さぶる。

気づけば、僕は泣いていた。

1

その日がやってくるにつれて、僕は何度も天気予報を気にして見るようになった。普段であれば、その日の天気はその日の朝に空を見上げて判断する程度であったにもかかわらず、だ。

「新千歳空港、雪で着陸できないなんてことあるのかな」携帯電話の向こうで、か細い声が響く。「不安だよ...」

「大丈夫だよ」僕は努めて明るく答えた。「今の所、降水確率は50%みたいだから。それくらいなら新千歳じゃしっかり滑走路の除雪して、がんばってくれるから。北海道の空港でちょっとやそっとの雪くらいで閉鎖したら、商売あがったりだよ」

「...そうだよ、大丈夫だよ」

「ああ、何の心配もいらないから安心しておいで」

「うん、わかった」

「楽しみにしてるよ、会えるの」

「夢みたい...明日の今ごろには、隣にいるんだね」

「そうだよ、やっと手の届く所にいれるんだ」

「...うん。そうだね。やっとだね」そう言って、一拍タイミングを置いてアヤは続ける。「そろそろ帰らなくて奥さん大丈夫？」

「そうだな...」僕は腕時計に目を落とした。「もう11時だからな...そろそろうるさいかも」

「じゃあ電話切るね。今無理しなくても、明日には会えるんだから」

「わかった、気をつけてな。おやすみ」

「おやすみなさい」

夜の挨拶をすませると、僕は携帯をぱたんと閉じた。そして車のサイドブレーキを落とし、家路へとハンドルを切る。

釧路の冬の夜空に、オリオン座が輝いていた。

次の日、釧路は朝から晴れていた。冷たい冬の空気に、街全体が澄み渡っているようだった。

僕は使いもしないスーツと、5日間分の着替えを車に積み込み終わると、もう一度アパートの

部屋に戻る。

「じゃあ、出張行ってくるから」

「...ん」

寝床にしている和室から、妻の濁いた返事だけが返ってきた。

僕は少々乱暴にドアを閉め、改めて靴を履きなおす。そして再び車に戻ると、エンジンをかけた。

釧路から新千歳空港まで。

この距離を車で走ったことは今までにも何度かある。いや、それよりも少し先の札幌までも。それは仕事であったり、自分の用事のためでもあった。

一方、「誰か」のために走ったことはないし、走ろうと思ったことも無い。何しろ、広大な北海道をほぼ横断するようなものだから。ましてや、寒さと雪の厳しい真冬に差し掛かろうとするこの時期などもっての外だった。

しかも、いまだに釧路のある道東方面から、札幌や千歳を結ぶ高速道路は全面開通しておらず、途中で途切れている。一度高速道路から降りて、山の中をかける一般道を走らなければならないのだ。

しかし今日の気分は違った。

早く新千歳空港に着きたいというはやる気持ちと、緊張感とが混ざった複雑な気持ち。

悪くはなかった。

もうすぐ、キミに会えるんだ。

2

その飛行機は到着予定時刻に10分遅れて新千歳空港に着陸した。

管理区域から到着ロビーへと次々に吐き出されてくる乗客の中にキミはいた。どこか気恥かしそうに緊張した笑顔を見せるキミは以前もらった写真のままで、また、口元をもごもごさせた表情が僕の背中をちりちりとしびれさせ、僕はドキドキしたんだ。

「お疲れ様」きっと僕の声は震えていただろう。「遠かったでしょ」

「うん」電話で聞いてきた、あの愛しい声でアヤは答える。「疲れたー」

そう言ってふんわり笑うキミは写真のままで、いやそれ以上に魅力的で、途端に胸がぎゅうっと締め付けられる。

大きく真っ黒の瞳、やわらかな質感の髪、ぷっくりとした下唇、僕よりもほんのちょっと小さな背...その全てが僕の心を揺さぶった。

すぐにでも抱きしめたい衝動にかられたが、思うように身動きができない。

冗談めかして、いや半分以上本気で「到着ロビーから出てきた瞬間に抱きしめてやる」なんて言っていたもの、この僕がそんなことをしていいものかと思うくらい、キミは魅力的だったんだ。

「ねえねえ、さっそくで悪いんだけど、靴の滑り止め買いたいんだ」

そんな僕の葛藤を知ってか知らずか、アヤはまるで昨日も遊んだ友達であるかのように振舞う。

僕は心の中でふきだした。

「それならそこの売店で売ってたよ、ちゃんとチェック済み」

「ありがと」

そう言ってアヤは僕にトランクを預け、そそくさと売店へと走って行った。

その後ろ姿をぼんやりと眺め、僕はひそかに自嘲する。

...気に入ってもらえなかったかな。

現代の携帯電話には便利かつ合理的な機能がほぼすべての機種に備わっている。すなわち写真撮影機能だ。

初めて彼女の写真を送ってもらって以来頻繁に送ってもらっていた。それは僕が何度もせがんだからだ。それに「恥ずかしいなあ」と言うものの、彼女はまめに近況報告がてら送ってくれていたのだった。

初めて写真で見た彼女はどこか凛々しい女性という雰囲気だった。

僕も交換条件という了解のもと、慌てて家の鏡越しに撮った写真を送ったのだが、到底彼女と釣り合うような男ではないだろうな、と一人がっかりしながら送信したのを覚えている。

写真ですらそうなのだから、実物の僕を見てよりがっかりさせたのかもしれない。

アヤはなかなか売店から出てこない。

ふとレジの方を覗き込むと、アヤが店員と何やら話しこんでいるのが見えた。

「何してるの」

「あ、コウジ」アヤが助かったという表情で見上げる。「どれにしようか迷っちゃって」

「どれどれ」

アヤと店員はレジの上に乗った靴の滑り止めシート数種類を矯めつ眇めつしていた。

「ブーツ自体がそれなりに大きいから、男性用の方がいいのかな。それともあくまで女性用がいいのかな」

アヤがまるでトランプのババ抜きのようにシートを僕の鼻先につきだす。

「んー、サイズがどうのこうのだったら、靴に巻きつけるタイプなんかどう。向こうに帰るときに外せるよ」

「それはいやー」まるで子どものように頭をぶんぶん振ってアヤは答える。「だってせっかくの可愛いブーツなんだもん」

「じゃあ女の子なんだから、女性用にしたら」

「うーん、やっぱそうか」

アヤは決心したように財布を取り出し、「これ下さい」と言って女性用のシートを店員に差し出した。

「あ、そうだ」会計をしながら、アヤが急に思い出したように言う。「花畑牧場！」

「そうだった、楽しみにしてたもんな」

花畑牧場とは、タレント活動を兼ねるある酪農家が北海道東部十勝地方で営み、ノースプレインファームのレシピをもとにした『生キャラメル』が有名な牧場である。

十勝の本店が冬期間休業中ということで、アヤたつての希望で新千歳空港内の店舗を訪れることになっていたのだ。

「生キャラメルソフトクリームー」

「はいはい、ちゃんと場所もチェック済みだよ」

「さっすがー」

そう言って無邪気にはしゃぐキミを見て、僕はキミの喜ぶ顔が見れるならどんなことでもしようと思ひそかに決意したんだ。

3

「ここはアヤが払うね」

うきうきしながらアヤはレジの店員に「生キャラメルソフトひとつ下さい」と注文した。

代金と引き換えに差し出されたソフトクリームを嬉しそうにアヤは受け取る。

僕たちは店舗内のテーブルの一つに体を落ち着けた。

「じゃあいっただっきまーす」

そう言ってソフトクリームに口をつけようとしたアヤだったが、すぐにその動きを止める。

「...ねえ」

「ん」

「これって...間接チュウになっちゃうかな」

僕は思わず水を吹き出しそうになった。

「そんな、子どもじゃあるまいし」

「だってー、何だか恥ずかしいじゃん。どこかにスプーンでも無いかな」

「そんなの、僕は気にしないのに」

「アヤが気にするのっ」アヤは顔をぷくっと膨らませながら辺りを見回す。「あ、あった」

アヤの視線の先にプラスチックのスプーンがたくさん備え付けてあったので、ソフトクリームを抱える彼女の代わりに僕が取りに行った。

「ほら」

「ありがとう」スプーンを受け取り、そそくさとソフトクリームをすくうアヤ。「今度こそいっただっきまーす」

ソフトクリームを一口、口に入れた途端とろけるアヤの表情。

それはまるで時間と共に溶けていくソフトクリームそのものだった。

「どう、おいしい？」

「んー、すっごくおいしいよお。あまーい」

「それはよかった。北海道でしたいこと、まずひとつ達成だね」

「うん」

「あ、そうだ」ソフトクリームを半分ほど食べた頃、アヤは鞆をごそごそしだした。「これってもういらないのかな」

そう言ってアヤは二枚の紙を取り出し、テーブルに並べはじめる。

それらは航空チケットと引き換えに渡される座席指定の用紙と、手荷物引換証だった。

「ああ、それは飛行機に乗るときと飛行機を降りるときに必要なだけだから。もういらないよ」

「そうなんだ、じゃああげるね」

「はい？」

手渡された座席指定用紙と手荷物引換証を困惑しながら受け取る。

改めてそれらを見てみると、しっかりと「マキハラ アヤカ様」と印刷されているのを見つけた。

彼女の名前が印刷されているのを見ると、何だか急にそれらの紙が愛しいものに思えてきたから不思議なものだ。

「わかった、もらっとくよ」僕は少し悪戯っぽい視線をアヤに向ける。「記念になるしね」

「えー」途端にアヤの可愛らしい頬がほんにり茜に染まった。「いいけど...、奥さんに見つからないようにね」

「ああ」

僕はそそくさと二つの紙を鞆へとしまう。

アヤの気が変わらないうちに。

ただ、あまりその心配はないようだ。アヤは夢中になってソフトクリームをなめている。

僕はその幸せそうなアヤの顔を眺めているだけで幸せだった。何故なら、今まで彼女の「顔」は知っていても「表情」は知らなかったのだから。

どれだけアヤの「表情」を求めていたことだろう。

また、電話の声やメールの文章から「感情」を推測することは今までもできていたが、それもあくまでも推測であって実物ではない。

しかし今は違う。

直にアヤの「表情」を見ることができし、「感情」を感じる事ができる。

何より手を伸ばせばすぐそこに、アヤの温もりを感じる事ができる。

僕がそんなことを考えながらアヤを見つめていると、その視線に気づいた彼女が言う。

「もう、コウジも欲しいなら欲しいってちゃんと言いなよ」

「別にそう言うつもりで見てたわけじゃ...」

僕は少々の否定を試みたが、素直に受け取ることにした。

「ちゃんとスプーン使うんだよ」

「はいはい、わかったよ」

本格的な夜が新千歳空港を覆いはじめる。

滑走路にはいつの間にか、航空機の誘導灯が鮮やかな色彩を放っていた。

これから僕たちは僕の住む街釧路へと向かうことになっている。僕にとって今日は釧路と新千歳空港の往復日。長い北海道暮らしとは言え、一日の中でこんなに短い時間の中車で往復するのは初めてのことであった。

前日にたっぷり睡眠をとっていたとは言え、総じて10時間以上の運転である。

しかし疲れは残っていなかった。

と、言うよりもアヤと会えたことが疲れを吹き飛ばしたのだった。

ほんのちょっぴり残してテイクアウトしたソフトクリームを、キミが溶かしちゃってこぼしたのを見たとき、僕は何だかホッとしたんだ。

初めは凜とした第一印象だったけど、そういうちょっと抜けたところがイメージ通りで、余計に胸の中をくすぐられるようだった、なんて言うと、キミは怒るかな。

でもホントにそうだったんだ。

4

「たくさんお菓子持って来たんだよ」そう言って助手席でアヤは鞆をまさぐる。「100均なんだけどね」

「そうなんだ」僕はハンドルを握ったまま、アヤへと視線を向けた。「何持ってきたの？」

「じゃーん」

そう言ってアヤが取り出したのは、幼いころによく食べていたイチゴ型のチョコレートや梅昆布、フリスクなどだった。

イチゴ型のチョコレートなど、子どものころ以来見るのも久しぶりだった。

「ねえねえ、横で食べていい？」

アヤはまるで幼い子どものように懇願してくる。

「どうぞ」僕は思わず笑いながら承諾した。「先は長いからね」

「やった」

アヤの歓喜の声を左に聞きながら僕はハンドルを切って、車をいよいよ道央自動車道へと進めた。ここからはおよそ300キロにわたる長いドライブである。

正直に言おう。

僕は緊張していた。

携帯やパソコンのメール、電話などではこれまでにたくさんコミュニケーションをとってきた。これまでに、アヤ以外にこれほど通信手段を用いてコミュニケーションを取ったことなどない。

それは、そうするより他ないからだ。

アヤは北海道在住ではなく、ここから遠く離れた本州のある県に住んでいる。

そんな彼女と僕はインターネットを通じて出会った。ただし、いわゆる「出会い系サイト」ではない。互いの趣味で健全に出会い、交流を深めていったのだった。

たがいに住んでいる場所があまりに違いすぎるために、ネットワークを通じた交流にとどまっていた。

しかも互いに配偶者がいる。つまり僕には妻が、アヤには夫が。ゆえに僕たちは通信を用いた交流を活用するしか他に手立てはなかったのだ。

しかし、僕と妻の関係は冷え切っており、アヤと夫の関係も同様であるという。

互いに惹かれていくのにさほど時間は必要なかった。

通信を用いて十分すぎるほどに想いを深めて来たのだが、アヤとは今日が初対面。

緊張しないわけはなかった。

「ねえねえ」

不意にアヤが僕の左そでを引っ張る。

「ん？」

「見ててね」そう言うと、アヤは口元をもごもごさせた。「出っ歯！」

「は？」

うっすら開けられたアヤの口元を見ると、歯が見えないようにうっすらと開けられた口の真ん中に、二粒のフリスクが縦に並べられていた。

僕は今度はしっかり吹き出してしまった。

「なんだそれー」

確かに出っ歯に見えないことも無いが、急にそんなことをしだしたアヤに笑えたのだった。

「何かね、コウジが元気ないように見えて…。笑ってもらおうとしたんだよ？」アヤはフリスクを飲みこんだ。「アヤのこと、期待はずれだったのかな、って不安になっちゃって」

そう言ってアヤは俯く。

「違うよ」僕は慌てて否定した。「その…緊張してたんだ。ごめん、不安にさせちゃって」

「アヤだって緊張してるよ」

「そうなの？そうは見えないけど」

「必死で緊張を隠してるだけだもん」アヤは少し拗ねて見せた。「ドキドキしちゃって、心臓痛いんだからー」

「あはは、僕もおんなじ。アヤにとって僕が期待はずれだったらどうしようかと思った」

「そんなことないよ、思った通りの人だった」

「でも僕にとってアヤは違ったな」

「え？」アヤは慌てて顔を向ける。「期待通りじゃなかったってこと？」

「そうだね」僕はアヤに悪戯っぽく笑って見せた。「思ってたより、ずっと可愛かった」
瞬間、アヤの呼吸が止まる。
「コウジのおバカ。一瞬泣いちゃいそうになったじゃんか」

期待通り。

期待はずれ。

キミにそんなこと思うもんか。

だって僕たちは、初めからその姿も、顔も、温もりも知らないで惹かれあつたんだろう？いまさら見ためでがっかりしたりするわけないよ。

でもまあ、正直に言うと、キミの可愛らしい顔と雰囲気にもっともっと惹かれちゃつただけ
れど。

5

道央自動車道は途中で釧路方面に向かう道東自動車道に接続する。

その道東自動車道はまだ建設途中で、前述の通り途中で途切れている。まずは夕張で道東自動車道は一度終わり、その後一般道を通ることになるのだ。

現在時刻は夜中の10時。

この時間になると、道央方面から道東へと向かう車は極端に少なかった。

僕とアヤを乗せた車は、雪深い森林地帯をヘッドライトの一筋の明かりを頼りに走り続けた。

互いに多少の緊張がとけた今、僕たちは離れていた距離と時間を埋めるように多くのことを話した。他愛のないことからそれぞれの住む地方の話題、配偶者の愚痴、二人のこれまでなど、話題は尽きることを知らなかった。

道東自動車道は再び占冠村から再び開通している。

「ちょっと休憩して行こうか」僕はとなりのアヤに話しかけた。「また道東自動車道に乗ったらしばらくトイレないからね」

「うん、トイレ行つときたいな」

「オッケー」

僕は車を占冠の道の駅トイレに横付けした。

エンジンを止め、アヤを外へと誘う。

「うわっ、さむーい」

アヤはそそくさとトイレに駆け込んだ。

それを見送った僕は、煙草に火をつけ夜空を見上げた。

冬の夜空の空気は凜として、遠く澄み切っていた。吐き出す煙草の煙と、僕の吐く白い息が静かに宙をたなびく。

占冠の街明かりは暗く、瞬く星々の輝きを邪魔するものは何もなかった。

今日もオリオン座が大きく両手を広げてその姿を誇らしげに僕に見せつける。

その時、アヤがトイレから戻ってきた。

「何見てるの？」

「ああ」僕はアヤの方を見ずに言った。「オリオン座」

「え？」アヤも僕にならって夜空を見上げる。「ホントだ」

「前に電話では一緒に見たことあったよね」

「うん、まるでコウジが隣にいてくれてるようだった」

「それが、今ではホントに隣にいるんだな...」

「そうだね...今までホントに長かったなあ。どれだけこの日を待ってたことか」

僕は隣のアヤを見つめた。アヤは相変わらず夜空を見上げている。

遠く焦がれたアヤが今隣にいることを改めて実感した僕は、急に彼女のことを抱きしめたい衝動にかられた。

僕よりも低く、小さなアヤの肩に手を伸ばす。

しかし。

「さっむーいっ！早く車に戻ろう？」

そう言って車の助手席に駆けていくアヤ。僕の左手はつい今までアヤがいた空間をむなしくかすめる。

おそらく僕の心の衝動にも、行動にもアヤは気づいていなかったのだろう。

僕は思わず一人で笑っていた。

危なかったよ。キミがあの時車に戻ってなかったら、僕は少し先走りすぎてたかもしれないね

。

かつては遠く離れた地で共に見たオリオン座。

二人で探したオリオン座。

いつまでも僕たちを見守ってくれないか。

6

道東自動車道は最終的には釧路まで延伸する予定ではあるようだが、まだそこまで建設は進んでいない。

僕は途中の帯広市で道東自動車道を降りて、一般道を走る道を選んだ。

帯広から釧路まではおよそ120キロの道のりである。時間にしておよそ2時間。普段より帯広に遊びに行くことの多い僕にとっては通いなれた道だった。

それにしても、日付はそろそろ替わるような時間になってしまった。

僕は釧路まであと1時間ほど、という地点でアヤに再度の休憩を提案した。

「さすがに疲れたよね。いいよ、のんびり行こう」彼女は初め優しく承諾したのだが、次の瞬間には少しその笑顔が陰る。「それに...」

「それに？」

「寝る前には旦那さんに一度連絡しなくちゃ」

「ああ...そっか」

どれだけ僕たちが互いを想っていたとしても、アヤは「妻」であり、僕は「夫」なのだ。仕事を持っていて、「出張」などの理由付けが比較的簡単な僕に比べると、アヤが今ここにいるためにはそれなりの理由が必要だった。

彼女が今回のために用意した理由とは、「一人旅」だった。

一人であるが故、定時連絡はアヤには欠かせない。

「わかった、じゃあちよっと車止めるよ」

そう言って、僕は十勝川にかかる豊頃大橋の近くにある駐車スペースに車を止めた。

「外で待ってるから、終わったら教えて」

「え？」アヤは驚いたような顔をして僕を見つめる。「隣にいればいいのに。寒いよ？」

「寒いことより、アヤが旦那さんと話してるのを聞いている方が辛いからね」

「...ごめんね」

「いや、仕方ないことだよ。でも、辛いから」

「わかった、すぐに終わらせるからね」

「うん」

僕は車から降りた。

思ったよりも夜風は冷たく、僕は身ぶるいをひとつして首をすくめた。

振り返ると、アヤが携帯を耳にあてて話し始めている様子がかがえる。

僕は見ていられずに、少しだけ歩くことにした。

「どこに行ったかと思ったよー」思っていたよりも早く、電話を切り上げたアヤが駆け寄ってきた。「探しちゃったじゃんか」

僕は笑ってアヤを迎える。

「ごめんごめん」

「何してたの？」

「ああ」僕は夜空を見上げた。「星をながめてた」

「ホントに好きだね」アヤも僕にならう。「ホントにロマンチスト」

「なあ」僕はアヤの方を向かずに続けた。「僕と....、付き合ってくれないか？」

僕は腕時計を見た。

日付が変わるまで残り5分だった。

「ぎりぎりだね」アヤがぼつりつつぶやく。「今日中」

「うん」僕は気恥かしくて頭をかきながら言った。「今日を記念日にしよう、って言ったろ」

「覚えててくれたんだ」

「忘れるもんか。で、返事は...」

「...これからよろしくね、コウジ」

アヤはえへへと笑いながら僕を見上げた。

こうして僕らは「恋人同士」になったんだ。

でも、人前では手もつなげない。愛を語り合うこともできない。

僕らは今後、どうなるんだろう。

でもね、僕はキミとならどこにでも行ける。どんな茨の道であろうと、この先にどんな泥沼が待っていようとも。

キミを守って見せる。

そこにわずかな光があるのなら。

決してこの灯を消しはしない。

7

国道38号線をひたすら東に下ると、通称「釧路新道」に差し掛かる。この道自体も国道38号線の一部なのだが、数年前に架け替えが行われて以来そう呼ばれている。

釧路の街明かりが近付いてくるにつれて、アヤの口数が減っていった。

「アヤ、眠い？」

「う...うん」アヤはかぶりをふった。「なんで？」

「いや、何か急におとなしくなったからさ」

「まだ緊張してるんだよー」

アヤは努めて明るい口調で言っているようだったが、かすかな違和感を感じる。

嘘、ではないだろうが他にも隠している感情があるようだった。

「それだけじゃないでしょ？」

「う...」アヤはぼつの悪そうな表情で小さくうなだれた。「わかっちゃうか、やっぱり」

「アヤはわかりやすいからな。電話でもそうだったし、実際に会ってみて余計にそう思う」

僕はアヤの横顔をちらりと横目で見てみた。

国道を照らす水銀灯のオレンジの光が彼女の頬を次々に撫でていった。

「んとね、こんなこと言うのは変かもしれないけど...」

「いいよ、言ってごらん」

「...この同じ釧路の空の下にコウジの奥さんがいるのかと思うと、ちょっと複雑」

「ああ...」僕は苦笑いするしかなかった。「そういうことか」

「...でも！」アヤは僕に向き直る。「楽しみにしてたんだよ、コウジが普段生活してる街が見れるの。ただ、ちょっぴり複雑な気持ちになっちゃっただけだから」

国道38号線はやがて釧路市街へと僕たちをいざなう。

道東最大の都市を自負するわりには、深夜1時にしてひっそりと静まり返った街。

交差点では向こう側の歩行者信号が明滅する音すら聞こえてきそうだ。

「コウジの家」アヤがぼつりと言う。「どこ？」

「え...？」

僕はアヤの真意がつかめきれずにいた。

一体どういうつもりで聞いたのだろうかという疑問と、隠すことでもないという一種の開き直りが頭の中でぐるぐる回る。

「えっと、この近所だよ」

「連れてって」

「...嫁さんいるけど」

僕が恐る恐るアヤの顔を覗き込むと、アヤは吹き出して笑った。

「あはは、誰も乗り込むなんて言ってないよ。車の中から宣戦布告してやろーかな、って思って。もちろん、コウジの住んでるところを外からでも見てみたいってのもあるけど」

「なんだ、そういうことか」

僕はホッと胸をなでおろした。

ところが、僕の安堵を鋭く見抜いたアヤは顔を膨らませて言う。

「あ、何だかその態度、むー！」

「ええ？」

「助かった、って思ったでしょ」アヤがじろりと僕を見る。「ホントにピンポン押しにいつてやろーかな」

「じゃあ...行くかい？」

「うそうそ、冗談」アヤは手を叩いて笑った。「でも、ちょっと外から見るといいでしょ」

「わかった」

僕はコンビニのある小さな交差点を左折し、ひときわ閑静な住宅街へと車を進めた。すると100メートルも進まないうちの僕のアパートが見えてくる。

二階建てのそれは、時間が時間だからであろうか、僕の部屋をはじめどの部屋にも明かりは点っていないかった。

「ほら、あれが僕のアパート」

僕は左手と視線で示した。

「へー、これが」

アヤは助手席の窓からまじまじとそれを眺めている。

いつかは僕も彼女の街を訪ねることになるだろう。毎回来てもらっているのはアヤが怪しまれるし、金銭的にも辛い。

その時は僕は一体何を考えるのだろうか。何を感じるのだろうか。

アヤが今感じている思いと同じ思いを抱くのだろうか。

そんなことを考えていると、アヤが言う。

「ありがと、もういいよ。そろそろホテルに向かわなきゃ」

キミは気づいていただろうか。

釧路の市街地に入ってから僕は何度も助手席のキミを見ていたんだよ。
僕の街にキミがいることが不思議で、嬉しくて。

8

僕が釧路に住みはじめて、もうすぐ十年目になろうとしている。

およそ十年前に釧路市の国立大学に入学したのがきっかけだった。以来、大学を卒業し、就職後もずっとこの釧路の地に住み続けている。

実の所、僕にとって同じ地に住み続けている期間は釧路が一番長い。

父親がいわゆる転勤族だった僕の家族は、およそ四年周期で引っ越しをしてきた。僕が中学生になったころから父親は単身赴任を選択したので、今の実家がある所には八年間住んでいた。つまり、今年度の四月に九年目に入ったので一番長く住んでいることになる。

「飲み屋街にあるんだね、このホテル」

アヤが窓から街を見下ろしながら言う。

「ここが一番安かったんだよ」僕は二人分のトランクを置きながら答えた。「今回は合計四泊しなくちゃならないからね」

「そだね、安さ第一で！」

僕が釧路の夜をアヤと過ごすために用意したホテルは、釧路一の歓楽街の入口にあった。

歓楽街と言っても、東京の歌舞伎町のような華やかな街ではなくこじんまりとしたスナックなどが軒を並べているような街だ。

ここは大学からも近いので、お酒を覚えた学生時代にはよく飲みに来たものだった。

「じゃあさっそくだけど、お風呂もらおうかな」そう言ってアヤはそわそわしだした。「のぞかないでよー」

「のぞくか！」僕は慌てて言った。「長旅で疲れただろうから、しっかり疲れ落してきな」

浴室からアヤが服を脱ぐ衣擦れの音が聞こえ、やがてシャワーの流れる音に変わる。

僕はベッドに腰掛けながら窓から町並みを見降ろし、煙草に火を点けた。

煙草を吸わないアヤのために窓を開ける。

途端に思わず身震いしてしまうような冷たい空気が僕の頬に刺さった。

眼下には見なれた飲み屋街の風景。

大学生であろうか、数人の若者のグループが千鳥足で騒ぎながら家路につく姿が見える。女の子たちは男の子達に比べてしっかりとした足取りだが、それでもここからでもわかるほどに顔を赤くして上機嫌だ。

思わず僕は自分自身の学生時代を彼らに重ねた。

あの頃は決して難しいことなど考えずに済み、悩みと言えど出席日数が不足せずに単位が取れているのかどうか、就職が思うように行くかどうか、といったくらいであった。

あとは適当に遊び、適当に学び、それなりに恋愛を楽しめば良かった。

そんな懐古的な感傷に浸っていると、アヤが今、この釧路にいることが嬉しいのだが不思議で仕方ないような気分になってくる。

僕が夢を追いかけて、おそらく今までの短い人生の中でもっとも中身の濃い四年間を過ごしたこの街にアヤが存在するなんてことは想像もしていなかった。

ここから遠く離れた地で彼女なりの人生を歩んできたアヤ。

ここで自分なりの人生を歩んできた僕。

ここから遠く離れた地で彼女なりに人を愛してきたアヤ。

ここで自分なりに人を愛してきた僕。

そんな、通常では決して交わることのなさそうな平行線が今、この釧路で交差している。

否、僕たちはそもそも平行線ではなかったのかもしれない。平行だと思っていた二つの直線は、ほんのわずかな角度をもって交わるようになっていたのだろう。

人と人の出会いなんてそんなものだ。

絶対などない。

キミは僕が大学時代の話をするのを嫌がるね。

でもあの四年間の「直線の人生が」なければ、キミにきっと出会えなかったんだと思うんだ。直線がまっすぐ一本につながっていなければ、キミとの交差はなかっただろう。

でも、キミが嫌だと言うことは僕はしない。

いつの日か、キミと過ごす日々が四年間をこえたとき、もしかしたらふたりで「バカなことしたねー」って笑いあえる時が来るかもしれない。

その時まで僕はキミと「今」を生きよう。

9

「えー、まさか寝てるの？」

僕はそんなアヤの非難の声で目を覚ました。いつの間にかベッドの上で寝てしまったらしい。

「あ、ああ、ごめん」

「運転疲れたもんね、お疲れ様」

僕は重たい瞼をこすりながらアヤを見上げた。彼女はホテルに用意してあったバスローブに身を包んでいた。

「似合うよ、それ」

「何それー」アヤは可愛らしく笑う。「嫌味？」

「違うよ、なんだか可愛い」

「もー、ほめ上手なんだから！早くコウジもお風呂入っておいで」

「ねえねえ、これ見て」

アヤが布団から左手を抜き、僕に示した。

僕とアヤは今同じ布団に入っている。直に彼女の温もりが伝わってくるようで、年甲斐も無く胸が高鳴っていた。

「どれ？」

「これだよ、これー」

アヤは空いた右手で、左手の人差し指の付け根あたりを指した。

そこには小さく、ささやかなほくろがあった。

「これが...どうかした？」

どこからどう見ても普通のほくろである。何も変わった点は見当たらない。

するとアヤは何かを企んでいるような表情で、それでいて悪戯を思いついた子どものように口元をもごもごさせながら、にっと笑う。

「これね、こうすると...」言いながらアヤは僕の目の前で人差し指を除く左手の指を軽く握った。「ほくろがゾウさんのおめめに見えるの！」

僕は思わず嘔き出した。

確かにそれはゾウに見えなくもない。

しかしそれ以上に、それを今あたかもすごいことのように胸を張って自慢するアヤが可笑しかった。

僕はこの状況で果たして眠れるかどうか問題であったのに。

「すごいでしょ」

「ああ、ほくろ自体もすごいけど、それを発見したアヤもすごいね」

「でしょ！」

アヤはえへへと笑う。

その照れたような笑顔が、僕の胸をぎゅっと締めつけた。

たまらなく愛おしい。

そう思った。

アヤの全てが愛おしくて、全てが欲しい。

そう思った。

気づけば僕はアヤの左手を握っていた。

「...どうしたの？」アヤが優しいまなざしで僕を見つめる。「突然だね」

「やっと、やっと手の届くところに来てくれたな、って思って」

「ホントだね」アヤも僕の右手をそっと握り返す。「ここまで長かったね。嬉しい？」

そう言って、アヤは僕の右手を自分の胸に抱き寄せ、体を僕に預けた。

僕もそれに応えてアヤをそっと、そして強く抱きしめた。

「嬉しいよ。すごく嬉しい」

「勇気出して会いに来て良かった...」

そして自然と重なる二つの唇。

どちらからともなく、吐息が漏れた。

初めてキミを抱きしめた時、僕は体が震えるほどに嬉しかったんだ。

キミの温もりが、キミの柔らかさが、キミの吐息がそばにあることが嬉しくて。

眠りに落ちたキミが、寝ぼけて僕を引き寄せるように抱きしめてくれた時、思わずキミにもう一度キスをしたんだよ。

どこかで機械的な甲高い音が鳴り響いている。

それが目覚ましのアラーム音だと気づいた時には、それはすでに消されていた。

「...ん」僕の左隣でアヤがもぞもぞ動きだすのがわかる。「コウジ...」

僕はアヤに向けて背中を向けて寝ている格好だ。

眠りに落ちた頃には互いの息が頬に当たることを「恥ずかしいね」なんて言っていたのに、寝ている間に寝がえりを打っていたらしい。

まどろむ意識の中、アヤが僕をぎゅっと抱き寄せた。

「コウジ...？」僕はもう少し寝たふりをすることにした。「...まだ寝てるの？」

アヤも目覚めたところらしい。

囁くような甘い声。それが僕の耳に心地よかった。

「ねえ、ねえってば」

僕の肩をゆすりだしたアヤ。

さすがにこれ以上はかわいそうだと思い、僕も目覚めることにした。

「ん...アヤ、おはよ」

「もー」結構わざとらしくあったかな、と思ったがアヤは全く疑わない。「ホントに寝起き悪すぎ」

「だってさー」僕は体を起こした。「アヤと一緒に寝てると、暖かくて気持ち良かったから」

途端にトマトのように真っ赤になるアヤ。

「ま、またそんなこと言ってー！」

「本当のことだから」

僕はまっすぐにアヤを見つめる。

「今まで付き合ってきた人にもそうやって言ってきたのー？」

「いいや」悪戯っぽく見つめ返す彼女をまっすぐに見て、僕は答えた。「アヤにだけだよ」

「男の人なんて、みんなにそう言うんだよ」

「今までアヤがどんな人と付き合ってきたか知らないけどさ」僕はふっとため息を一つついて続ける。「僕は本当はあんな歯の浮くようなセリフはあんまり言えないんだ。でも、アヤにだけなら言える。だって、アヤは照れ笑いはするけど、本当に笑ったりしないでちゃんと聞いてくれるから。アヤがちゃんと聞いてくれるから、僕は正直に自分の気持ちを言えるんだよ。それに...」

「それに？」

「アヤのことが好きだから。アヤに僕の気持ちを全部伝えたいんだ」

「おバカ」アヤは布団に顔をうずめて、上目づかいに僕を見上げた。「でも、嬉しい」

初めてキミと朝を迎えたね。

実はキミが眠りに落ちた後、しばらく君の寝顔を眺めていたんだ。初めて会った僕のとおりで安心しきった顔で眠るキミ。すごくドキドキしたことを覚えている。

あの時ちょっと意地悪してみたけど、その困った様子が可愛らしくてもっと意地悪してみたくなるんだ。

ごめんね。

2

「今日はどこに連れて行ってくれるんだっけ？」

ドライヤーで髪を乾かしながらアヤが言う。明るい栗色の髪が次第に温風に乾かされ、やわらかく浮かび上がる。

その度にアヤから甘い香りがして僕はくらくらしした。

「まずは釧路市湿原展望台に行こうと思うんだ」動揺を悟られないように、何でもないふりをして言う。「見てみたい、って言ってたから」

「うん」アヤが振り返る。「キタキツネ見れるかなあ」

「見せてあげたいよ、可愛いから」ただしかし、僕は一点だけアヤに念押ししておく。「もしそばに来て触っちゃだめなんだよ。エキノコックスっていう寄生虫がいるからね」

「えー」

アヤは落胆の声をあげるが、そこは譲れない。

「えー、じゃないの。湿原を見た後は鶴居村に行って丹頂鶴を見て、それから摩周湖だね」

「前にメールで言っていた摩周ブルーっていうソフトクリーム食べるんだよね」

「そうそう、気に入ってもらえると嬉しいけど」

「アヤ、アイス好きだから楽しみ！」

「で、夜は釧路まで戻ってきて晩御飯食べて、阿寒湖温泉に向かうよ」

「温泉！お肌すべすべになるかな」

「十分アヤの肌はすべすべだったと思うけど？」

僕は悪戯っぽく言った。

「...おバカ」

「ガソリン入れていかなきゃ」

エンジンを回して気づいた。湿原展望台までは何とかたどり着けるだろうが、このままではその後摩周湖までたどり着けないであろうほどにガソリンが減っていた。

考えてみれば当然だ。昨晚、千歳から釧路まで給油なしで走ったのだから。

「結構ヤバい？」

となりでアヤが心配そうに言う。

「まあ、もたないだろうね」僕はおどけて言った。さしたる問題ではない。「駅前のスタンドに入れていくよ」

釧路市湿原展望台までは釧路市内から一時間もかからない。

僕たちは途中のコンビニでお茶や煙草などを買って、一路展望台を目指した。

道東最大の都市を自負する釧路市だが、市内の都市部を抜けるとすぐに一面の雪景色と白樺の林へとその景色を変えてゆく。

その道中、アヤはしきりに助手席の窓から外を気にしていた。

「何をそんなに真剣に見てるの？」

「え？」アヤは子どものようにわくわくした目をこちらに向ける。「キタキツネがいるかなあ、って思って」

「ああ」僕はハンドルを握りながら苦笑した。「もしかしたらひょっこり顔出してくれるかもね。その辺にキツネの足跡見えるから」

「ええ、どれどれ？」

「ほら、時々雪の上にちっちゃなちよこちよこした足跡が見えない？それがキツネの足跡」

するとすぐにアヤは助手席の窓からきよろきよろあたりを見回す。

「あ、あるある！」

「会えたらいいね」

結局キミとキタキツネを会わせてあげることはできなかったね。すっごく可愛いんだよ。

でも、子どものようにはしゃぐキミのことを、ずっと可愛いと思っていたことは内緒です。

3

国道53号線を行くと、小高い山の上に茶色い建物が見えてくる。釧路市湿原展望台だ。

釧路湿原は釧路地方に広がる日本最大の湿原で、水鳥を食物連鎖の頂点とする湿地の保全を目的としたラムサール条約登録湿地である。

車を駐車場に止めて、アヤに降りるように促す。

「あ、デジカメ用意しなくちゃ」

アヤが鞆をごそごそ探し出す。

「楽しみにしてたもんな」

「うん」満面の笑顔でこちらを向くアヤ。しかし、途端にその表情にかすかな陰りがさす。「もちろん、釧路湿原に来たぞ、って言う記念もあるけど...証拠作りもあるかな」

「証拠？」

「うん、旦那さんに何か言われた時にちゃんと行ってきたんだよ、っていう証拠」

「ああ、そういうことか」

僕は納得した。

しかし、その一方で複雑な気分もあった。

何度も触れるが、僕には妻がいてアヤには夫がいる。彼女と昨日初めて会って以来、互いにそ

の相手の存在を忘れるように愛を確かめ合って、まるで独身カップルのようにふるまってきた。

しかしアヤの口から「旦那さん」という言葉が紡がれる度に、アヤは僕の彼女でいてくれてはいるものの、「人妻」であるという実感が、そろりそろりと僕の背筋の一番冷たい部分を撫でていった。

嫉妬、というにはふさわしくない感情。

でもきっと、この名も無い感情は僕だけのものではないだろう。

彼女だって感じているはず。

「すっごいね」車から降りたアヤが両手を広げながら感嘆の声をあげた。「一面の雪景色！真っ白！」

「真冬の北海道だからね」

僕は車を施錠しながら答えた。

「この雪の上で腹すべりしたーい」

「まるでアザラシだね」

「何それー」アヤはぶくっと頬を膨らませて言う。「体がアザラシさんみたいだ、ってこと？」

「違うよ」僕は笑って答える「アザラシさんみたいに可愛いね、ってこと」

「ホントにー？」

まだ疑いのまなざしを逸らさないアヤに、僕はなだめるように言った。

「いつまでもここにいても寒いから、展望台の中に入ろう」

「なんかごまかしてない？」

「してないしてない」

「へー、ほー、そうですかい」

なおも食い下がろうとするアヤの手をとって、僕は歩き出す。

「ほら、行こう」

「...ま、いっか」

久しぶりにこの展望台に上った。前に上ったのは何年前だっけ。

アヤはといえば、広大な原生湿地にしきりに目を輝かせている。

「やっぱり大自然はいいねー」そう言ってアヤは今にも展望台から身を乗り出さんばかり。「空気がすごく澄んでる」

アヤは眼を閉じて深呼吸した。

僕はその横顔を見つめていた。見とれていた。

そしてアヤが大きく息をつき、再び目を開けたとき、思わずどきりとした。

横から見るアヤの眼。それはそれは、まるで清流の澄み切った水をそのまま閉じ込めたかのような透明な瞳だった。

僕はそれと同じ澄み切った瞳を見たことがある。

それは僕が大学生だったころ、教員免許を取得するために教育実習に行ったときに見た子ども

の瞳。当時は小学二年生のクラスに入ったのだが、穢れを知らない子どもの瞳は何よりも澄んでいて感動した覚えがある。

それと同じ瞳を、アヤは持っていた。

「何、さっきから見つめちゃって」アヤの声にふと我に返る。「照れるよ...」

展望台から見た釧路湿原は、まるで初めて見る景色のようだった。

今まででも何度か来たことはあったけれど、キミと見た雄大な湿原は、まるで時を閉じ込めているかのようだったんだ。

このまま、僕とキミの時間も閉じ込めてくれたらいいのに、なんて考えてたんだ。

僕たち以外に誰もいない展望台にキミとふたりで。

ずっと。

4

釧路湿原を出発した僕らは、一路鶴居村を目指した。

鶴居村は釧路地方唯一の「村」で、釧路湿原の一部にその地を寄せている。

その名の示す通り、この村には丹頂鶴が生息し、観光客の目を楽しませている。その中でも「鶴見台」と呼ばれる繁殖地が特に有名で、僕たちもそこに向かっていった。

鶴見台には三十羽はいようかというほど、丹頂鶴が羽を休めていた。中には甲高い鳴き声を発し、異性に求愛をする者もいれば、つがいで仲良く餌をついばむ者もいる。

僕とアヤは互いにデジタルカメラを手に、鶴を撮影した。

そして初めて、二人で写真を撮った。

僕がカメラを逆に持ち、アヤがとなりでふんわり笑う。

それだけで幸せだった。

鶴居村と言えば、丹頂鶴もちろん有名だが、乳製品の製造でも全国的に名をとどろかせているらしい。中でも特にチーズが有名だとか。

僕とアヤは国道を挟んで鶴見台とは反対側に位置する売店でチーズを買った。それは一口大にカットされていて、運転手を務める僕でも容易に食べられそうだ。

「あ、すぐに食べたいので袋に切れ込み入れておいてもらっていいですか」アヤが機転を利かし、店員に伝えた。「そうしてもらえると、すぐに袋開けられていいよね」

「ああ、賢いね、アヤ」

「へっへー」

僕たちはすぐに売店をあとにして、車へと向かう。

そんな僕たちを冷たい冬の北海道の風が包んだ。

「寒いー」

アヤが身を縮めて僕にしがみついてきた。

「もっとくっついておいで」

そう言って抱きしめたアヤの肩はすっかり冷えていて、かわいそうなくらいだった。つないだ手も、まるで氷のように冷たい。

僕はそんな彼女の右手を、ありったけの温もりを込めて両手で包んだ。

「美味しい！このチーズ」サイドブレーキを落とし、まさにアクセルを踏み込もうとする僕のと
なりでアヤが感嘆の声を上げる。「ねね、食べてみてよ」

「ちょっと待って」国道へと車を寄せ始めていたので、すぐには手が出ない。「走りはじめたら
もらうから」

「だめー、早く食べてみて」そう言ってアヤは僕の目の前にカットされたチーズを差し出す。「
ほら、あーんして」

「え？」

僕はうろたえた。

運転中であることと、小さな頃に母親にされて以来女の人に「あーん」なんて言われたことが
なかったことに。

しかしアヤはそんな僕にお構いなしに繰り返す。

「あーん、して」

僕は黙って口を開けた。

すかさずアヤがチーズを押し込む。

「どうどう、美味しいでしょ？」

「うん、美味しい」

「へへへ」アヤが横目でもわかるくらいににやにやしている。「餌付けしちやった」

「え、僕ってアヤに飼われてるの？」

「うん、そうだよー」

あの時、僕の唇にかすかに触れたキミの手。

柔らかくて、ひんやりと冷たくて。

でも、暖かくて。

左手でずっと触れていたのとは違う感触にすごくドキドキしたんだ。

摩周湖は北海道東部、阿寒国立公園弟子屈町にある湖である。

その透明度は日本で最も高いとされ、世界規模で見るとバイカル湖について第二位である。そ
の湖底は急激に深くなっていることと、その透明度から青以外の光の反射が少なく、よく晴れた
日に見る者の目を奪う深い群青色は「摩周ブルー」と呼ばれていた。

その日は平日ということもあり、摩周第一展望台は観光客の姿も少なかった。

「ここでコウジおすすめのソフトクリーム食べるんだよね」

アヤがうきうきしながら助手席から降りる。

「そうだよ、すごく美味しいから気に入ってもらえると思う」

「楽しみ」

「ホントにアイス好きだね」

「好きだよ、だってホントに美味しいもん」

そう言って笑うアヤを連れて展望台内の売店へと向かった。

摩周湖まで来たのは何年ぶりだろう。もしかしたら軽く5、6年は過ぎているかもしれない。僕の記憶の限りでは、大学の研修で来て以来だった。

僕たちはまず売店を抜け、摩周湖の一望が見下ろせる展望台を目指した。

防寒のためのフードをくぐると、一面に摩周湖が広がる。

「わー、きれい」

アヤは寒さに身を縮ませながら言った。

「今日はよく晴れてる」ここで僕はニヤツと笑って言った。「摩周湖は普段あまりにも霧に包まれてることが多くて、湖面が見えないことが結構あるんだ。そのせいか、初めて見た摩周湖が晴れていたなら婚期が5年遅れるなんて言われてる」

「そうなんだ」少し寂しそうな表情を見せながら相槌を打ったかと思えば、アヤはすぐに笑い飛ばした。「そんなの、私達に関係ない」

「そうだね」

悪い冗談を言った、と僕は後悔した。

「綺麗な色のソフトクリームだね」アヤがうずうずした表情で目の前にソフトクリームを掲げる。「摩周ブルー、だっけ？」

「そうそう」

そのソフトクリームは摩周湖の湖面の色彩の名を冠していた。その名にふさわしいパステルブルーのその色はさわやかな印象を持たせる。

僕自身、何年も前に来たときに食べて感動した味だった、とだけは覚えていたので、ぜひアイス好きの彼女にも食べてみてほしかったのだ。

「最初に食べていいの？」

「いいよ」僕は笑った。「昨日みたいに溶かしちゃう前に食べな」

「そういうこと言う？」アヤも笑う。「じゃあ遠慮なく、いただきます！」

「どうぞ」

「...な、何これ！」摩周ブルーの先端を一口ほおぼったアヤが、目を見開いて僕とソフトクリームを交互に見つめる。「すごく美味しいんですけど！」

「でっしょー」

数年間忘れていたにもかかわらず、僕は得意顔だ。

「なんて言うかなんて言うか！すごくさわやかな味！ソーダ系の味とも違うし、とにかく美味しい！」

「そんなに気に入ってもらえるとは」

「気に行っちゃうよ、ほらコウジも食べて」

そう言ってアヤは僕に摩周ブルーを差し出す。僕は素直に受け取ったのだが、ふとあることに気がつく。

「そう言えば、新千歳の時みたいに『間接キスだ』とか言わないの？」

「おバカ」アヤがはにかむ。「...いまさらじゃない？」

「...確かに」

前にも食べたことのある摩周ブルーのソフトクリーム。

まるで初めて食べたような味がした。

キミと一緒に食べたからだろうか、それとも？

僕たちはこれから、どんどん「初めて」を作っていくんだね。

6

それから僕たちは時間が余ったので、予定していなかった屈斜路湖をめぐって釧路市内へと戻ってきた。

平日の屈斜路湖は摩周湖と同様で人出は少なく、多くの白鳥が湖面で羽を休めていた。

白鳥達は観光客が餌をくれるものだと学習しているのだろう、僕たちの姿を認めると一斉に駆け寄ってきた。

近くで見ると思ったよりも大きな白鳥に、アヤはおっかなびっくりしていたっけ。

また、屈斜路湖の売店で売っていた北海道のおやつ「いもだんご」にアヤはハマった。

「これ、美味しい！向こうに帰っても作りたい」

そんなことを言っではしゃいでいた。

僕たちが目的の炉端「煉瓦」へとたどり着いた頃には、すでに日が落ちてからだいぶ時間がたったころだった。

辺りはすっかりと暗くなり、街灯が煌々と街を照らしている。

「いくらたくさん食べるぞー」

僕が車のエンジンを切ると、アヤは宣言した。

「楽しみにしてたもんな、アヤ」

「うん、いくら大好き！それも北海道の本場のものだから...口いっぱい詰めてプチプチしたい」

「こぼすなよ。じゃあ行こうか」

「うん」

そう言ってお互いドアを開けた瞬間、強烈な風が僕たちを襲う。

そう言えば、前日までの低気圧の影響で全道的に風が強いと天気予報で言っていた。

「す、すごい風！」

「飛ばされるなよ」

「何それ」風に暴れるコートと格闘しながら薄めで僕を見つめるアヤ。「嫌味？」

「違うよ」僕は手招きした。「こっちおいで」

途端にアヤはぱっと嬉しそうな顔をしたが、一瞬思いとどまったような顔に変化する。

「くっつきたいけど、お店の中に早く入った方がよくない？」

「それもそうか」

ね、と僕をなだめるアヤの手をとって店内へと入った。

釧路では炉端と呼ばれるジャンルの飲食店が非常に多い。

漁港でとれた新せんな魚介類が豊富だからだ。

中でもこの「煉瓦」は釧路では有名な店舗で、釧路の空の玄関口である釧路空港でも旅客を迎える到着ロビーに大きな看板がある。

また、運営もマルア阿部商店という釧路でも大きな水産加工会社が行っているのも、味・鮮度共に保障されている。

「ねえねえ」アヤがメニューをぱらぱらめくりながら言う。「アヤ、お酒飲んでいい？」

「いいけど、酔っぱらうなよ」

「泥酔しない程度にするから大丈夫。でも酔っ払っちゃったらよろしくね」

「おいおい、食べたら阿寒まで行かなきゃならないの忘れるなよ」

「はい」

今回の旅は食べてばかりだね、なんて笑うキミ。

キミは僕が連れて行った所のものを本当に美味しそうに食べてくれたね。

それがすごく嬉しくて、こっちまで幸せな気分にしてくれるんだ。

7

「あははー、ちょっと酔っ払っちゃった」

「だから言わんこっちゃない」

顔をほんのり紅に染めたアヤの手を取りながら僕は車に向かって歩いた。

相変わらず外は冷たい風が吹き荒れている。

「あ」不意にアヤの足が止まる。「ねえ、この建物って」

アヤが指さす方向にはMOOと呼ばれる黄色い建物があった。

「...ああ」やっぱり気づいたか、という思いで僕は答えた。「MOOだよ、お土産物屋がたくさん入ってる」

「そんなこと知ってるしー」頬をぷーっと膨らませてアヤが言う。「あの子と来た所でしょーよ」

アヤが言う「あの子」とは、かつて僕がアヤに話したことがある大学時代に知り合ったある女性のことである。

「ふーんだ」

「昔の話だろ」

「そーですねー」

そう言ってアヤはすたすたとその建物へと向かって歩き出した。

「どうしたんだよ」僕は慌てて追いかける。「横断歩道も無いのに」

「アヤも行く！」

「え？」

「コウジのあの子と思い出、アヤが塗りつぶしてやるんだ。コウジにどんな過去があっても、コウジの中にアヤ以外の女がいるなんて許せない」

結局、閉館時間間近であったため中を散策することはできなかったが、エントランスにだけはい入ることができた。

そこは釧路市の施設であったため、数年前から教育委員会が入っているのだが、その看板をアヤが殴りつけたとき、さすがに焦った。

何とか車に戻ってアヤをなだめようと試みたのだが、アヤはしばらく頬を膨らませたままだった。

釧路新道を抜けて阿寒方面へと向かう道道に入ったころ、隣のアヤがうつらうつらし始める。

「眠い？」

「うん、ちょっとね」

「寝ててもいいよ、初めての土地で疲れただろ」

「寝ないし！」

アヤの強い口調に少し驚きながら、僕はアヤをうかがった。

「どうして？まだ阿寒までは一時間くらいかかるよ」

「だって…」アヤはそこで一瞬言葉を詰まらせた。「もったいないもん…ずっと一緒にいられるわけじゃないし、寝ちゃったらその分お話しできない」

「…わかったよ、無理はするなよ」

「ねえ」アヤは僕の左腕に絡みつくようにしがみつき、頭を僕の肩に預けた。「アヤが一番？コウジにとっての一番？」

「もちろん」僕はアヤの温もりに答えるように姿勢をずらし、肩に乗せられたアヤの頭に頬をくっつける。「アヤが僕の一番だ」

「あの子よりも？」

「当たり前」

ここで妻より、と言わないのは、僕と妻の現状を知っているアヤだからこそであろう。しかし

、「あの子」との思い出は懐かしくもあり甘酸っぱいものだったということを伝えていたから、なおのこと気になるのだ。

妻との現在は冷え切っているが、「あの子」との過去は綺麗な思い出として語ってしまったから。

「今まで出会ったどんな人よりも、アヤが一番好きだよ」

「...ホントに？」

「ああ」僕はアヤを安心させるように、頬でアヤの頭を撫でた。「アヤはホントに素敵な女性だよ。どんな言葉で表現していいかわからないくらい。ホントに愛してる」

「...よかった」

僕たちを乗せた車は、車道を照らす明かり以外何もない道を走った。

重なり合う想いを乗せて、雪原の中を。

いつの間にかキミは眠っていた。

僕の肩に頭をうずめたまま眠りに落ちたキミを起こさないよう、何度も頭を、柔らかい手を撫でた。

その全てが、本来は僕のものではない。

でもこの瞬間だけは僕のものであってほしい。そう願った。

その髪の柔らかさも香りも、キミの温もりも。

キミは何も心配いらぬよ。

僕の全ては、キミのものだから。

8

「もうすぐ着くよ」

僕はアヤをゆり起した。

この峠を越えると、すぐに今日の宿がある阿寒の温泉街だ。

「...ん」重たい瞼をこすりながらアヤが目覚める。「どこ？」

「もう阿寒市街だよ」

「ごめん、寝ちゃった」うん、と伸びをしてアヤは慌てて口元に手をやる。「よだれ、たれてなかった？」

「それはそれは、たくさん」

「嘘っ」

「嘘だよ」僕はくくっと笑った。「ぐっすりだったね」

「嘘つきはきらーい」アヤもつられて笑う。「でもよかった。アヤ、よく寝ながらよだれたれてるんだ」

その温泉宿に到着した頃にはすでに9時を回っていた。

その日にチェックインする宿泊客の中で僕たちは最後の客であつたらしく、フロントには受付要員一人しかいなかった。

「ではこちらに必要事項をご記入ください」

手渡されたのはどこの宿でもホテルでも当たり前のように書く受付用紙である。

当然、昨日釧路で泊ったホテルでも書いた。

しかしこの宿のものが前日のホテルのそれとは違ったのは同伴客の氏名を書く欄までがあったことである。

僕は一瞬迷った末に「川内浩志・川内亜弥香」と記入した。

ふと隣のアヤを見上げるとそんな僕のささやかな行為に気づかず、きよろきよろと辺りを物珍しそうに眺めているだけだった。

「なかなかいい部屋だね。広いし、落ち着く雰囲気もいいし」

荷物を置いたアヤは嬉しそうに声をあげた。

「値段の割にはね」僕も荷物を落ち着かせて、さっそく茶器に手を伸ばす。「喉渴いたろ、いまお茶入れるから」

「え？」

アヤが驚いたように僕を見る。そのアヤの表情に、僕もオウムのように「え？」と返すしかなかった。

「ちょっと待って、普段からそうしてるの？」

「普段から、って？」

「運転で疲れた人がお茶を入れて、助手席の奥さんがのんびりしてるの？ってこと」

「ああ、特に気にしたことないかな」

「それって変だよ」アヤが肩を怒らせながら僕から茶器を奪い取る。「これって奥さんが本来やることだし。ここではアヤが淹れるからコウジはその辺でどっしりしてて」

「どっしり、って…」

僕は部屋を見回した。

予想外に広くて、そう言われても僕はどこに身を据えるべきか迷う。とりあえず座布団が敷かれている所に座ることにした。

そう言えば、キミは会う前にメールで「北海道にアヤがいる間はアヤが奥さんになる」って言うっていたね。

台帳に僕がキミのことを「奥さん」にしたことを気づかなかつたみたいだけど、これも「奥さん」になろうとしてのことだったのかな。

だとしたら、とても嬉しい。

キミが本当に「奥さん」だったら、なんて、何度考えたことか。

アヤが淹れてくれたお茶で一服した後、僕たちは宿内の温泉に入ることにした。

浴衣に着替えてバスタオルなどを用意していると、アヤが「あっ」と声をあげた。

「旦那さんに電話しなくちゃ...」

「ああ、そうだね」僕は思わず大きくため息をついた。「僕も...さすがに一回くらいは嫁さんに連絡入れようかな」

「むー、何だかんだ言ってコウジも奥さんにちゃんと連絡は入れるんだ」

そう言ってアヤが頬を膨らませる。

「そんなこと言ったって、変に怪しまれたら面倒だろ」

「そーですねー」

「じゃあ、僕は部屋の外で電話するから、アヤは中で電話すればいい」

僕は携帯電話を手に取り、スリッパに履き替えて部屋のドアに手をかけた。

するとそんな僕の浴衣の裾をアヤが引っ張る。

「部屋の中で話せばいいじゃんか」アヤは相変わらず頬を膨らませたままだ。「それとも聞かれない会話でもするの？実は『好きだよ』とか言っちゃってるんじゃ...」

「そんな言葉、アイツにはもう何か月も言ってない」僕は真顔で伝えた。「確かにアイツとの会話を聞かれない、ってのはあるよ。でもそれはアイツと話す時の僕のキツイ言葉を聞かせたくないってのと、携帯からこぼれるアイツの声をアヤに聞かせたくないってのがある。それに、やっぱり僕もアヤと旦那さんの話してる所は見たくないから...」

「そっか」アヤはうなだれて、僕の浴衣の裾を放した。「確かにアヤも見たくないし、聞きたくないかも」

「でしょ？」

「ごめんね」

「いいんだ」僕はうなだれたままのアヤの頭に手を置いた。「仕方ない」

「じゃあ、電話終わったら教えるから」

「わかった、僕は部屋の外にいるから」

「うん」

僕はアヤを部屋に残し、廊下に出た。すぐに部屋に鍵がかけられる音が静かな廊下に響いた。

この鍵がかかっている間はアヤが電話中だというサインである。

万が一にでも、僕の声が部屋の中に届かないように少し廊下を歩いて、通話ボタンを押した。

お互いに5分も経たず電話を終え、僕たちは大浴場へと向かった。

大浴場は男湯と女湯が天井近くでつながっていた。

「アヤー、聞こえるー？」

浴室特有の湿った響きで僕の声がアヤに届く。

「聞こえるよー」

女湯の方からも、お湯があふれる音とともにアヤの声が響いてきた。

「そっちはアヤだけー？」

「うんー、誰もいないよー」

「そっかー、よかったー」

「なんでー？」

「いやー実はね、こんな風に男湯と女湯で話すの夢だったんだー」

「じゃーアヤが初めてー？」

「そうだよー」

「なんか嬉しいー」アヤのふわふわした声のはじけた。「またもう一つ『初めて』だねー」

実はあの時、男湯には僕以外にも先客がいたことを僕は内緒にしていた。

だって、キミとの「初めて」が減るのが嫌だったんだ。

後からそのことを話すと、キミは本気で恥ずかしがっていたね。

ごめんね。

10

僕はなぜか不意に目覚めた。

枕元に置いた腕時計を確かめると、時刻は深夜3時をまわった頃だった。

就寝灯の淡いオレンジ色の光が部屋全体を優しく包んでいる。

ふと隣に視線を落とすと、アヤの安心しきった寝顔がすぐそばにぼんやりと見えた。

静かな夜だ。

ゆっくりと上下するアヤの布団。まるで寝息すら聞こえてきそうなくらいに。

ほんの少し肩が布団から出て、見た目にも寒そうだったのでかけ直す。

何度も何度も、その横顔を見つめた。

柔らかい曲線を描く頬を、ぷっくりとした唇を、優しく閉じられた目とまつ毛を、かすかに揺れる鷺色の前髪を。

そのアヤを形作る物すべては、何度見つめても飽きることなどなかった。

僕は一人、胸を握りしめていた。

そうしなければ、この胸の鼓動が、響きが、アヤを起こしてしまいそうで。

そして、僕はそっと自分の布団から抜け出した。

凍てついて開くことのない窓の霜を手でぬぐうと、満月が全面真っ白い雪と氷で覆われた阿寒湖を蒼く照らしている。

眠りについた温泉街が幻想的な湯けむりを上げて、月に照らされていた。

ぬぐったガラスの隙間から、その月光が部屋に差し込む。

その光は、ちょうどアヤがいる辺りをうっすらと照らし、就寝灯のオレンジと混合して薄い紫色へと変化した。

今、この色の寝顔を見ることができるのは自分だけだと自覚した時、えも言えぬ感情が湧きあがる。

この人のすべてを盗みたい。
かすかに漏れる、その寝息まで。

いつかは永遠に失うことがあるのだろうか。
それは死が二人を分かちまで？
それとも...？

この想いを貫こうとすればするほど、人が作りだした「制度」が憎らしくなってくる。
その「制度」は愛する者同士を結び付けるものではなかったのか。
愛する者同士の間にもそびえたつ壁だったのか。

ひとつの想いだけを貫こうとすればするほど、愛とはほど遠い力に、激しく揺さぶられる。

しかし、ただ一つはっきりとしているのはアヤのことを誰よりも愛しているということ。
その安心しきった寝顔を守っていきたい。
すべての不安から。

そんな僕の密かな思いとは対極的に、アヤは時々笑顔を浮かべながら眠っていた。

「他のお客さん、もうとっくに朝ごはん食べたのかな」

アヤが辺りを見回しながら言う。

雪原と化した阿寒湖を一望できる、全面ガラス張りの食堂には僕たち以外宿泊客の姿は見当たらなかった。

それもそのはずだ。

現在の時刻はすでに9時前。この宿のチェックアウト時間は10時なので、皆朝食を済ませて出発準備に取り掛かっている頃だろう。

僕とアヤは盛大に寝坊したのだ。

「僕たちも早く食べて準備しなきゃね」

「うー、でも朝ごはんはゆっくり食べたいよ」アヤが恨めしそうに言う。「そうでなくてもアヤ、とろいから」

「僕は別にかまわないけどさ」僕は思わず苦笑いした。「アヤがお化粧する時間がなくなるよ？」

「それは困る…」

「じゃあがんばって食べよう」

「はい」

というやりとりはあったものの、やはりアヤはマイペースに箸を進めているように見える。きっとこれが彼女なりの精一杯なのであろう。

アヤは時々「遅い？」と言っては僕の顔色をうかがっていたが、僕はその度に「そんなことはないよ」と答えた。実際、特段遅いとも思わなかったから。

僕にはゆっくりと箸を進めているようにも見えるその様子も、普段どちらかと言うとせっちな僕の心をほぐしてくれていた。

先に膳を平らげた僕はじっとアヤを見つめる。

するとその視線に気づいたアヤは照れくさそうに眼を伏せた。

「そんなに見られると、何だか恥ずかしい」

「そう？ごめんね」そんなアヤに思わず頬が緩む。「何だか変な感じだね」

「ん？何が」

「昨日はホテルだったから、普通の服を着て一緒に朝ごはんを食べたけど、今日は浴衣で一緒にいる。それに昨日は釧路までの長旅が大変だったし、一日が慌ただしかったからね」

「…それがどうかしたの？」

アヤは僕が何を言わんとしているのか、量りきれないような不思議な表情をしていた。

「つまりさ」僕は端的に説明し直した。「アヤとふたりっきりで旅行してるんだな、って実感と

、あんなに遠く感じてたアヤが今はこんなに近くにいるんだな、って実感してるってこと」
「そうだね」アヤは箸を一度置き、まっすぐに僕を見つめ返した。「近くにいるよ。コウジのすぐそばにいるよ」

アヤがあんまりにも真剣に、僕に言い聞かせてくれるように言うものだから、僕はどきりとした。

まるでアヤの瞳が僕の心臓を撃ち抜いたかのようなようだった。

僕はそんな動揺を隠すように言った。

「浴衣、すっごく似合ってるよ。可愛い」

「ホント、アヤバカ」慌てて箸を握り直し、食事を再開するアヤ。「...照れるじゃん、急に」

僕は朝を迎えるたびに、キミに恋をした。

隣にキミの寝顔を見る奇跡と、キミに起こされる奇跡。

その一瞬一瞬に、恋に落ちたんだ。

2

朝食を食べ終え僕は部屋の片づけを、アヤは化粧をしているときに不意に備え付けの電話機が呼び出し音を響かせた。

「もしかして、時間？」

アヤがピアスをつけながら僕を見上げる。

「たぶんね」僕はアヤに苦笑いを見せて、受話器を取った。「もしもし？」

「お客様、チェックアウトのお時間ですが、まだかかりますか？」

「ああ、もうそんな時間ですか」そうわざとらしくとぼけながら、アヤに目配せをする。「もうすぐ出ます。ご迷惑をおかけしました」

するとアヤがそそくさと化粧の続きを始めた。

阿寒湖温泉はの歴史は比較的浅く、その発見は日本史で言う江戸時代後期の頃だと言われている。当時は道東一带に和人は少なく、アイヌの人々が冷えた体を暖めるのに利用していたようだ。

観光客対象の旅館ができたのが明治45年だった。それから昭和9年に阿寒国立公園の指定を受けてからというもの、観光の拠点として発展していくこととなる。

「さっむーい！」

アヤが上着の中に体を埋めるように縮こまり、歩道中に張った氷に足を取られないように慎重に歩いている。

「ずっとそればかり」僕はつないだアヤの右手をそっと冷たい風から守った。「北海道に憧れてたんじゃなかったっけ？」

「憧れてたけど...寒いのは苦手」

「あはは、滑らないようにだけは気をつけて」

「うん」アヤは相変わらず足元に細心の注意を払っている。「こっちに来る前に、ガイドブックで氷の歩き方を予習してきたから」

「氷の歩き方？」

「そう」まるで小さな行進のように、アヤは足を垂直に上げては再び垂直におろして歩いていた。「まっすぐに氷の上に足をおろせば滑らないんだって」

「ああ、そう言うこと」僕は納得した。「そんなに大げさにしなくたって、普通の道みたいに踵から降ろさなければ大丈夫だよ」

「え？そうなの」

きよとんとした顔でアヤが僕の顔を見上げた。

「そうだよ。踵から降ろすからずりっと足が前にすべって転ぶんだ」

「へー、そうなんだ」アヤは嬉しそうに再び背筋を伸ばし、僕の手を取って歩き出した。「でも転ばないようにしっかり支えてね」

僕たちは昨夜過ごした旅館に車を預け、阿寒湖温泉街を散策していた。

と言うのも、かつて僕が阿寒湖温泉を訪れた時にある温泉旅館の内部を携帯電話のカメラで撮影し、その写真をアヤに送ったことがある。

その温泉旅館ではお昼過ぎに蒸かしたじゃがいもを訪れた客に振舞うイベントが毎日のように催されていた。

その様子も撮影しアヤに送った所、「いいなー、おいも食べたい」という感想が返ってきたので、せっかくだら連れて行こうと考えたのだ。

道すがら、阿寒の土産物店が立ち並ぶ通りを通ってきた。

阿寒はかつてアイヌコタンと呼ばれるアイヌ人の集落があった地で、アイヌ文様の木彫りが名産品である。

寒風吹きすさぶ中その温泉旅館に到着したのだが、生憎時間が早すぎたのか所定の場所に蒸かしいものは無かった。

がっかりした僕を、彼女は「仕方ないね」と笑う。

「でもせっかくだから、何かお土産もの買いたいな」

「お土産もの？」僕の心はぴくりと反応する。「もしかして...旦那さんに？」

「おバカだなー」そんな僕に、アヤは声をあげて笑った。「せっかくだから、アヤとコウジでお揃いのものが欲しい、ってことだよ」

少し恥ずかしそうに、どこかもじもじしながら言うアヤ。

僕は一気に顔に血が上る音を聞いた気がした。

それから僕たちは、数件の木彫り店に入り互いに気に入る物を探した。

するとある店で僕とアヤの目を引くキーホルダーを見つけた。

それはナキウサギをかたどったキーホルダーで、どこかとぼけた顔に僕とアヤは笑う。

いくつか並んだそれは、よく見れば一つ一つの表情が微妙に違った。

それはそうだ。アイヌの木彫りと言えば、全てが手づくりで、それが売りの一つだったのだから。

「これ、可愛いね」

「ああ、気に入った？」

「うん」

「じゃあさ」僕は頭に浮かんだ考えをアヤに提案した。「互いに気に入ったものを選んで交換しようか」

「いいねー、それ」

そしてさっそくいくつかを手に取り、僕とアヤは真剣に選び始める。

その時、僕とアヤの会話を聞きつけた店員がのっそりと奥から出てきて、僕たちに声をかけてきた。

「よければ裏に名前、彫りますよ」

「え？」

僕とアヤは思わず顔を見合わせた。

それは非常に魅力的な申し出のように思えたのだが、僕たちの「交換する」という前提のもとでは話が違った。

互いの名前を彫ってもらい、それを交換する。

互いの妻や夫にそれを見られたら。

考えただけでその後の展開は容易に想像がつく。

そこで僕は店員の申し出に、少し修正案を加えた。

「あの、イニシャル一文字でもかまいませんか？」

あの時に互いに交換したナキウサギ。

次に再会するのはいつだろうね、なんてキミは笑っていたね。

できるだけ早くに会わせてあげたいな、なんて僕は答えたけど、それはつまりなるべく早くキミと会いたい、ってことだよ。

3

阿寒湖から次の目的地である十勝方面へ向かうには、一度釧路に戻るのが僕にとって一番わかりやすい道だった。もしかすると、他にも道はあったのかもしれないが真冬の北海道である。慣れ親しんだ道の方が運転するのもありがたい。

ましてや助手席にはアヤがいる。

道に迷ったり、事故を起こしたりなどの無様な姿は見せられない。

「また釧路に戻るんだね」そんな僕の緊張感など知ってか知らずか、アヤがどこか弾んだ声を上

げる。「ここもまだ釧路の一部みたいだけど...釧路はもうアヤ達にとっても思い出の街だね」
「そうだね」そんなアヤの様子に少し笑ってしまった。「これから阿寒に行くたびにアヤのこと
思い出すよ」

「阿寒に行った時だけ？」

アヤは不満げに頬を膨らませる。

「ごめん、嘘。いつも、だよ。いつもアヤのこと考えてる」

「それでいいの」助手席で今度は満足げにうんうんと頷くアヤ。「アヤなんて、毎日寝る前にコ
ウジのこと考えて...寝不足なんだからね」

「寝るときだけ？」

僕は逆襲に打って出た。

「...アヤはいいの」

「なんだそれ」

「言わなくてもわかるでしょ」

「えー、わからん」

「...アヤだっていつも考えてるもん」

顔を真っ赤にして俯くアヤ。

僕は返事をする代わりに、それまでシフトレバーに添えていた左手でアヤの右手をぎゅっと握
った。

「そういえばさ」僕は運転しながら思いだした。「この釧路に向かう道の途中で、美味しいアイ
ス屋さんがあるんだけど」

「えー、行きたい！」

アヤの表情が一段と明るくなる。

「だろうな、って思った」僕は得意げに言った。「あっかんべえ、っていう有名なアイス屋さん
があるんだ。ただのソフトクリームも濃厚で美味しいし、ジェラートもたくさんの種類がある」

「それはそれは...アイス好きとしては行かないわけにはいきませんねえ」

今にもよだれをたらしそうな表情でアヤが言う。

「僕も前に行ったことがあって、ぜひ食べさせてあげたいって思ってたんだ」

「へー」途端にアヤの表情が曇りだす。「...誰と行ったんだよお」

「誰って...」そんなことを聞かれることなど予想もしていなかった僕は少しうろたえた。「同僚
との職員旅行とか...」

「とか？」

アヤは聞き逃さない。

「...嫁さんと」僕は観念した。ここで変に隠しても仕方がない。「でも、だいぶ前のことだよ」

「いーけどねー！」アヤが風船のように頬を膨らませたまま小さく叫ぶ。「アイスに罪はないし
、材料のお乳を出してくれた牛さんにも罪はないしねー」

「なんか、ごめんね？」

「いいですよーだ」

そう言うアヤの頬はしばらく膨らんだままだった。

その一見するとただの民家にも見えなくもない店舗は、阿寒と釧路を結ぶ道道のおよそ中間地点にあった。

周りをジャガイモ畑と酪農地帯に囲まれたその建物はこじんまりとしているが、確かな存在感を放っている。

僕は車を止め、アヤに降りるように促した。

「小さくて可愛いお店だね」

いつの間にか機嫌を直したアヤははしゃいだ声を上げた。

「初めて来たときは一回見逃したんだ」そんなアヤにホッとしながら僕はアヤの手を引く。「さ、入ろう」

見た目以上にせまい店舗の中は5人も入れば狭く感じるくらいだった。

エントランスをくぐると、すぐにジェラートのショウケースがあり、中年の女性が一人店番をしていた。

「どれにしますか？」

「コウジは何がオススメ？」

「そうだなー」僕はざっとジェラートを見回す。「どれも美味しいだろうけど、さっきも言ったように普通のソフトクリームもいいよ」

そう僕が説明をしていると、店番の女性が声をかけてきた。

「ダブルもできますよ」

「え？」すかさずアヤが目を輝かせる。「ダブル!？」

アヤは迷いに迷った挙句、ナッツがふんだんに使われたジェラートとラムレーズンのジェラートを注文した。

ジェラートがカップに形作られていく様子子どものようにわくわくした表情で見つめるアヤ。そんな彼女の様子を見て、店員の女性はふふっと小さく笑った。

「ご旅行ですか？」

「はい」アヤは一瞬答えに迷ったようだった。「そんな所です」

「どちらから？」

「僕は釧路市内なんです」僕はそんなアヤの迷いに気づかず、浮かれて言っていた。「で、彼女は道外から」

アヤがはっとして僕を見上げる。

「じゃあなかなか会えないんじゃないですか？」出来上がったジェラートのカップをアヤに手渡ししながら、女性は言った。「さみしいですね」

「そうですね...」僕はアヤの視線を感じながら、代金を支払う。「まあ、こうして何度か会えますから」

あの女性はきっと僕たちのことを遠距離恋愛中の「恋人」同士だと思ったんだろうね。
あの時僕とキミは「恋人」同士に確かになったかもしれない。でも、それは今は僕たちの間
だけ、あるいは僕たちのことを何も知らない人だけに通じる関係なんだ。
だから、せめてあの女性にくらいは自慢したっていいじゃないか。
キミのことを誰かに自慢したかったんだ。
こんなにも可愛い子が僕の「恋人」なんだぞ、って。

4

道道はやがて釧路新道へと再び接続する。
釧路新道を西へと走っていくと、太平洋沿いの国道38号線へと姿を変えた。
北海道らしいまっすぐでのんびりした道を、僕はアヤを隣に乗せてハンドルを握り続ける。
「ちょっと寄り道していい？」
「うん、運転疲れた？」
「ちょっとね」
言うてからすぐ、あくびが僕の口にぷっかりと浮かんだ。
「そんなに疲れてたのなら言うてくれればよかったのに」そう言うアヤの声には心配がにじみ出
ていた。「無理はしないでね」
「ありがと」僕は眠気で少し重たくなってきた顔をこすりながら返事をする。「もうすぐ道の駅
だから、そこで少し休憩するよ」

国道38号線を少し走ると、やがて道の駅「白糠恋問」が見えてきた。
釧路から十勝方面へと抜けていく時に必ず立ち寄ってきた道の駅である。
ここには白糠の特産品であるタコをはじめとした海産物や、紫蘇を使った土産物などが多数そ
ろえられていた。
また、道の駅自体にレストランが設置されているだけでなく、コンビニエンスストアも併設さ
れているので、トラックのドライバーなどもよく体を休めていた。
僕は海沿いの駐車場へと車を止め、シートベルトをはずして解放された体をシート深くに沈み
こませた。
「ごめんな、ちょっと休憩」
「いいよ」アヤが優しくふんわりと笑い、僕を見降ろす。「運転お疲れ様、ありがとう。ゆっく
り休んで」
そんなアヤの表情を下から見ていると、僕の心臓は疲れた体と反比例してどくどくと強く高鳴
りだした。
どうして、アヤはこんなにも愛情深い笑顔を僕に見せてくれるのだろう。
いや、本当はその答えを知ってはいるのだが、彼女の愛情に応えられるだけのものを僕は持って

いるのだろうか。

時間をかけてじっくりとアヤと向き合っていきたい。その中で、ほんの少しだけでも彼女の愛情に報いることができれば。

そんなことを考えていると、どうしようもない「現実」が僕の心の目の前に立ちふさがる。

アヤはいつまでも僕のそばにいることはできない。

アヤは僕の「恋人」である以前から他人の「妻」なのだ。

明後日には、左手の薬指に揃いの指輪をつけた人の元に帰っていく。

明後日。

二日後。

今日を入れて残り、二日。

「あと二日なんだな...」

思わず口をついて出てしまった言葉。それは二度と戻ってこない。

言ってからのはとした。

「...早いね」優しかったアヤの笑顔が、一瞬にして寂しげに曇る。「ホント、あっという間」

「ああ」

「コウジに会いに北海道に行く、って決めてから実際に会えるまであれだけ一日一日が長く感じたのに、会ってからの一日ってすぐに終わっちゃう」

「帰したく...ないな」

「アヤだって...帰りたくない」アヤが俯く。「このまま北海道にいて、ずっとコウジと一緒にいたい」

「僕だって...」

そう言ってから、僕の頭の中ではアヤを新千歳空港に迎えに行ってから今までのアヤのころころ変わる表情が駆け巡っていった。

互いに第一印象を探りあっては、なかなか素が出せなくてどうしていいかわからない表情。

ソフトクリームをこぼして、恥ずかしそうな表情。

場を和ませようと、フリスクをかじっていた表情。

悪戯っぽく笑う笑顔。

真っ赤にして照れた顔。

ちよっぴりへそを曲げて、頬を膨らませた怒り顔。

ベッドの上での切なげな表情。

その全てが、僕の心を締め付けた。

あと二日で、また離れてしまうなんて。

不意に目頭が熱くなる。鼻の奥がつんと痛い。

「泣いてるの？」

アヤが心配する。

「泣いてないよ」

僕は強がる。

「ダメだよ、泣いちゃ」アヤがつとめて笑顔を見せた。「笑顔で楽しかったね、って言えるようにしなきゃ」

「そう、だね」

「そうだよ、せっかく北海道まで会いに来たんだもん」そう言うアヤも何かを必死でこらえているように見えた。「楽しい思い出だけを持って帰りたいし」

僕は最近結構涙もろくなっただらしい。

歳のせいだ、なんて周りには言っているけど、テレビのドキュメンタリーでもすぐに涙腺が緩んでしまうんだ。

でもね、誰かのために涙がこぼれてしまいそうになったのは初めてかも。

愛しい、っていう気持ちが形となってあふれたのはキミが最初だよ。

こんなにもキミのことを愛してる。

ホントだよ。

5

国道38号線を、一昨日千歳から来た道をまた戻るように西へとおよそ2時間。

やがて車は帯広市へと入った。

帯広市は近年発展が目覚ましく、道東最大の都市を誇っていた釧路市を今や凌駕している。

それまでは十勝の畑作地帯を縫うように走っていた国道は、一気に都会の雰囲気醸し出した

。「今日泊る十勝川温泉って、ここからまだかかる？」

「すぐだよ」僕はハンドルを右に切った。「この十勝大橋を渡ったら、すぐに十勝川温泉の温泉街だから」

「美人の湯なんだよね」うきうきしながらアヤが言う。「たっのしみー」

帯広市に隣接する音更町にある十勝川温泉は、その名の通り十勝平野を悠然と流れる十勝川の河畔を中心に広がっている。

その泉質は世界にもめずらしいモール泉であった。

モール泉とは、地下深くで石炭の形成途上であり炭化が進んでいない泥炭や亜炭層から源泉をくみ上げるため、植物起源の有機物を含んでおり、肌に触れるとつるつるとした感触が楽しめる

ゆえに観光ガイドブック等では「美人の湯」とも紹介しているものが多い。

まだメールや電話でしかつながりがなかった時にアヤに紹介すると、「ぜひ行きたい！」との反応が返ってきたものだった。

かく言う僕も、十勝方面へはよく遊びに来ていたものの十勝川温泉に仕事以外で泊りに来たの

は初めてだったので、楽しみにしていた。

「昨日の阿寒のお宿よりは劣るものの、結構いいお部屋だね」

アヤは荷物を降ろし、さっそくお茶を淹れる準備に取り掛かった。

「そうだね」昨日のこともあるので、僕はアヤが急須にお湯を入れる様子を座ったまま眺めていた。「やっぱり温泉宿と言えど和室が落ち着く」

今回のために予約していた宿は、昨日の阿寒の宿の部屋よりは一回り狭く、設備も古めかしいもので、値段相応といった感じだった。

窓から外を眺めると、少し先に十勝川にかかり帯広市と音更町を結ぶ十勝大橋が見えた。

少し傾きかけた太陽がほのかに朱に染まり、遥かに見える大雪連峰と十勝大橋と見事なコントラストを描いていた。

「おなかすいちゃったね」アヤが湯呑みを並べながら言う。「今日の晩御飯はお寿司だっけ」

「そうだよ、アヤの大好きな」

「やったー」

そう言って立ち上がるアヤ。

ちょうどその時、アヤと夕日が重なりあう。

アヤの茶色くふわふわの髪の毛が、収穫前の稲穂色に輝いた。

「アヤ」

僕はアヤを手招きした。

急須をちゃぶ台に置き、素直にアヤは僕に従った。

黙って僕はアヤを抱きしめる。

強く、強く、アヤがどこにも行かないように、と願いながら。

アヤはと言えば、負けじと僕にしがみついてくる。

初めはそっと触れる程度だったのが、次第に強く。

まるでどちらの力が強いかわからない、どちらの想いの方が強いかわからないように。

僕は少し力を緩めた。「アヤ」

アヤも僕から顔だけを離し、僕を見上げる。「ん？」

「キス...しよ」

そんな僕の懇願に、アヤはキスで答えた。

「もっと」

何度も何度も、アヤはキスで答えてくれた。

僕はアヤを畳の上にそっと寝かせる。

「まだ足りない」

今度は僕の方からキスをした。

「もっと」

「もっと...」

「もっと！」

キミが僕の元へと来てくれる、と決めた時から一カ月。あれだけ長かったのに、新千歳空港でキミの顔を見た瞬間会えなかった時間は一気に吹き飛んだ。

それなのに、キミと過ごす日々はあっという間に過ぎていき、もうすでに折り返しを過ぎていた。

隣にキミがいてくれると実感する度にキミに恋に落ち、キミに見つめられる度に愛しさが増していき、キミに触れる度にキミを離したくないと思ったんだ。

キミをまた何千キロも先の「帰る場所」に帰したくないと。

手を伸ばせばいつでも届く距離から、どれだけ手を伸ばそうとも届かない、どれだけ声をあげようとも届かない場所になんか。

6

あれから僕とアヤは何度も何度もキスを交わした。

会えなかった今までを埋めるように、再び会えなくなるこれからは耐えられるように。

何回目だろう。もはや数え切れなくなったところにアヤが切なげに言う。

「もっとたくさんしていたいけど、お寿司屋さん閉まっちゃうよ...？」

「そう...だね」

とろんとしたまなざしのまま僕を見上げるアヤを見て、もう一度キスをしてから僕はアヤを離れた。

「そろそろ行こうか」

「うん...」

「まつりや」は根室発祥の回転ずしチェーン店である。

根室の本店は「祭囃子」というのだが、釧路市内にチェーン店を展開し始めてからチェーン店舗は「まつりや」と名を変えていった。

今では帯広市内にも二店舗展開していた。

僕はそのうちの音更店を選択した。

「今のうちに電話しとこうかな」駐車場に車を止めた途端にアヤが複雑な表情で言う。「旦那さんに」

「今日は早いんだね」いつもならもっと遅い時間、例えばお風呂に入る前や寝る前なのに今日に限ってこんな夕暮れに電話するなんて。「どうして？」

「だってさ」アヤがもじもじしながら言う。「あとあとラブラブしてる時に邪魔されちゃイヤじゃん...。だったら先手を打って、こっちからかけちゃえ、って思って」

「なるほどね」

「それに、どれだけ仕方ないって言っても、旦那さんからの電話がかかってきた瞬間にコウジ

の顔が曇るんだもん」

そう言って俯くアヤ。

僕は思わず自分の顔を手で押さえた。

表情に出てしまわないように、と気をつけていたものの微妙な変化が出てしまっていたのだろうか。

「いいんだよ？」アヤがぽつりと言う。「アヤだって嫌だもん、コウジの携帯に奥さんからの着信があると」

「...ごめん」

「だから、いいんだってば」

そう言って笑顔を見せるアヤ。

何だか痛々しい笑顔だった。

「わかったよ。じゃあ僕も外で嫁さんに電話入れとくよ。同じように邪魔が入らないように」

「うん、そうしてて」

「終わったら車から降りておいで」

僕はそう言い残し、ひとり車から降りた。

途端に冷たい風が頬を突き刺す。十勝平野の冬の風は、釧路のそれよりも乾燥しているが故に更に痛かった。

助手席のアヤが携帯電話を耳にあてているのを確認して、僕も妻に電話をかける。何度目かのコール音ののち「...もしもし」といかにも眠そうな妻の声が聞こえてきた。

僕は妻に「札幌で同僚とともに飲みに行ってくる」とだけ伝えて早々に電話を切った。

もちろんここは十勝であるし、札幌なんてほど遠い。

妻にはこの数日間のことを札幌での出張と伝えてあるのだ。

アヤはまだ出てこない。携帯を耳にあてた姿勢のまま口が動いているので、まだ話は終わっていないのであろう。

僕はふと、通りの歩道まで進んでみた。行き交う車のヘッドライトとテールランプが、通りを乳白色と赤に染めては去っていく。

そんな明かりに交じって時折見える行き交う車内には、家族連れもあれば恋人同士であろうか、仲良く肩を寄せ合う者もいる。

半年、いや一年ほども前であろうか。僕と妻も同様であった。

助手席には妻が座り、僕がハンドルを握る。それが当然であった。

しかしいつしか、僕の中で妻への「想い」が「思い」へと変わり、変容していった。それはまるでろうそくの炎のよう。安定して燃え続けていた炎は、燃え上がることも無くやがてそこにあった「蠟」をすべて燃やしつくし、小さくなり、消えた。

その瞬間、僕は「夫」ではなく、「保護者」へと名を変えた。

「保護対象」は安寧の日々のぬるま湯にどっぷりとつかり、燭台までもが冷えていくのに気づかない。

僕は孤独であった。

それからしばらくして、僕はアヤと出会う。

初めは「孤独」から彼女へと「支え」を求めていたのかと思っていたが、彼女がくれる言葉や想いに次第に惹かれていった。

新千歳空港で初めて直接アヤに出会うまで、日本のほぼ真ん中に住む彼女とは文字や電気信号化された声でしかコミュニケーションを取ることはできなかった。しかしそれでもアヤは誰よりも僕のそばにいて、誰よりも愛を僕に与えてくれた。

心の底から、彼女を僕は愛した。

手をつなぐどころか、触れることもできなかったアヤを。

それが今や、僕の車の助手席に座っている。

それだけで、その助手席は特別なものになった。

他の誰にも座らせたくない。

当然、妻であろうとも。

キミだけを、愛している。

7

夕餉の時間にはまだ少し早い時間だからであろうか、店内にはまだそんなに客は入っていなかった。

まつりやは形式としてはごく一般的な回転ずし店である。

しかしネタの大きさや新鮮さには定評があり、かつて全国ネットのテレビ番組に紹介されたほどである。

十勝にチェーン展開する前に、釧路に店舗がオープンしていて、学生のころからよく食べに行っていた。ただ、十勝の店舗に入るのは僕も今回が初めてである。

店員に案内され、カウンターの一角に僕らは腰を据えた。

「ねえねえ、何がオススメ？」おしぼりで両手を丹念に拭きながら、アヤが尋ねてくる。「流れてくるの全部美味しそうで迷っちゃうよー」

「そうだなー」僕も流れてくる寿司を眺めながら考える。「やっぱりサーモンかな」

「サーモン？」首をかしげるアヤ。「鮭だよね」

アヤは意外そうに眼をぱちくりさせている。

「きっとイクラとかカニとか、いかにも北海道ですって感じのヤツ想像したんだろ」僕はにやりとして続けた。「全国どこにでもあるような鮭なんてって思っただろ？」

「うん」

「これがまた違うんだよ。すごく脂がのってて、美味しいんだぜー」

「へー」アヤの目が一瞬にして輝き出す。「じゃあそれにしよ！」

「ほんっとに美味しいねー！」

とろけそうな笑顔でアヤが言う。まるでマンガのように頬に手まで当てて。

「だろ？北海道の海の幸は格別」

「うんうん！」

「しかし...ホントに美味しそうに食べるね」

「えー？」アヤが恥ずかしそうに上目づかいで言う。「そう...かな？」

「うん、美味しいよー幸せだよーってのがビシビシ伝わってくる」

きっと僕の方こそとろけた顔をしていることであろう。

アヤが幸せそうに北海道のものを食べている様子を見ているだけで僕は幸せだったから。

彼女の幸せが僕の幸せだった。

「もー、サーモンとイクラと生タラバガニが絶品！」

「よかった、それでこそ連れてきがいがあるってもんだ」

「ねえねえ、シメにいも団子食べていい？」

まるで子どものように懇願してくる。

「いいけど...ホントにいも団子気に入ったんだね」

「だって、ホントに美味しくて！」まるで演説でもするかのようアヤが言う。「北海道は食の宝庫ですから！」

その口調は北海道知事選挙にでも出馬するかのようだった。

思わず僕にも笑みがこぼれる。

「僕はいつもまつりやのシメはグレープフルーツって決めてるんだ」

「どうして？」アヤが不思議そうに首をかしげる。「お寿司の後に？」

「うん、口の中がさっぱり爽やかになるからね」

僕はそのままカウンターの中の板前にいも団子とグレープフルーツを注文した。

その様子を眺めていたアヤは、急に周りを見渡しだす。

そう言えばいつの間にか他の客が少しずつ増えてきたようだ。

「お客さん増えてきたね」きよろきよろしているアヤに声をかける。「晩御飯どきだからかな」

「そうだね」

アヤの返事はどこか上の空だ。

増えてきた客に驚いて、というわけではないらしい。

「ねえ」

アヤが急に僕を振り返る。

「ん？」

「やっぱり北海道の人って肌が白い人多いねー」

「ああ、北国の人って白いイメージあるな」何を見ていたのかと思えば、そんな所に注目してたのか。「アヤだって十分白い綺麗な肌してるよ？」

「アヤのは単なる色白」半ば自嘲的に言うアヤ。「北海道の人は...何て言うか肌の透明感が違う」

「そんなもんかな？」

僕は思わずアヤと他の客を見比べた。言われてみれば、反対側のカウンターに座る女性客の肌は単なる色白とは少し違うような気もするが、アヤが言うほどの違いはあまりわからなかった。

そのとき不意にアヤが僕の膝に手を置く。

「アヤ以外の女の人、見ちゃだめ！」

キミはよく「アヤのことだけ見てて」と言う。

そんなこと、言われなくてもそうしてるよ。いや、どうしてもそうなっちゃうんだ。

キミから目をそらすことなんて僕にはできないんだ。

離れていても近くにいても、キミにこの双眸はくぎ付けだから。

8

「やっぱり恥ずかしいよお」

「何をいまさら...」

小さく薄暗い部屋に、僕とアヤの声がこだまする。

「だってえ...照れちゃう...！」

「ほら、早く入れて？」

僕とアヤはまつりやを出た後、帯広市のカラオケ店に来ていた。

これも予定のうちで、僕もアヤもカラオケ好きという点で一致し、アヤが北海道に来たときには必ず行こうと約束していたのだった。

「やっぱりコウジが先に入れてよー」

そう言って真っ赤になったアヤが僕にリモコンとマイクを押しつけてきた。

互いに何曲か歌った後、少しの休憩を入れることにした。

「やっぱり何だか恥ずかしいね」アヤが上気した表情で照れくさそうに言う。「初対面で歌を披露するのって」

「何言ってるの、ノリノリで歌ってたのに」

「だって...カラオケ大好きなんだもん」

「でも...」僕はまっすぐにアヤを見つめて言った。「歌、上手だね。びっくりした」

するとアヤは顔を手で覆って、まるでイヤイヤをするように悶えはじめる。

「ま、またそんなこと言って！アヤなんてまだまだだよっ！」

そうは言っているが、覆った掌の人差指と中指の間はバッチリ開いていて、しっかりとこちらを見ている。

そんなアヤの様子がおかしくて、僕はまだ意地悪したくなった。

「ホントだよ、声も可愛かったし」

「っひゃあ！」今度は両足までジタバタしだす。「は、恥ずかしいっ！」

それまで僕とアヤはテーブルをはさんで向かい合うような格好であった。

「ねえ」

不意にアヤが声をかける。

「何、どうした？」

「となり、行っていい？」

急に照れくさそうに伏し目がちで言うものだから、僕は一瞬言葉に詰まってしまった。

しかしそれは僕にとっても嬉しい申し出だったので、断る理由はどこにもない。

断るわけがない。

「...いいよ？」 きっと僕もものすごく照れた顔をしていただろう。「こっちにおいで」

「よかった！」 アヤが嬉しそうにテーブルを回り、僕のとなりにちょこんと座る。「嫌だ、なんて言われたら泣いちゃうし」

「言うわけないし」

「ずっと、こうしてくっついていたいな」

アヤがそのふんわりした頭を僕の肩に預ける。

僕もそっと彼女を肩を抱く。

その瞬間、アヤの甘い香りが僕の鼻をくすぐるように漂ってきた。

こんな時間がいつまでも続いて欲しい。そう思った。

「そうだ」

アヤが急に頭を起こす。

「何？」

「会ってカラオケ行ったら絶対に歌ってあげようと思ってた曲があるの」

「へえ、誰の何て曲？」

「西野カナって知ってる？」

「それくらい知ってるよ、僕だってまだ若いからね」

実は名前だけはテレビなどでよく見かけるので知っている、という程度で、彼女が歌う曲をまともに聞いたことはなかったのだが。

「西野カナの『Dear...』って歌なの。聞いたことある？」

当然僕は知らなかった。黙ってかぶりを振る。

「この曲ね、何だかまるでアヤとコウジのこと歌った歌みたいなんだよ」 そう言いながら、アヤはカラオケのリモコンを操作する。「遠距離の歌なんだー」

「へえ、それはぜひ聞いてみたいな」

「えへへ、あんまり上手じゃないかもしれないけど、この歌の歌詞がアヤのキモチだから」

アヤがリモコンの送信ボタンを押すと、すぐに前奏が始まった。

「じゃあね」 って言ってからまだ5分もたっていないのに

すぐに会いたくてもう一度 oh baby ギュツとしてほしくて boy, miss you

もしも二人帰る場所が同じだったら時計に邪魔されなくてもいい oh no no

おかえりもオヤスミも そばで言えたらどんなに幸せだろ？

Just want to stay with you

でもね、ケータイに君の名前が光るたびに いつだって一人じゃないんだよって
教えてくれる

会えない時間にも愛しすぎて 目を閉じればいつでも君がいるよ
ただそれだけで強くなれるよ 二人一緒ならこの先も
どんなことでも乗り越えられるよ 変わらない愛で繋いでいくよ
ずっと君だけの私でいるから 君に届けたい言葉

Always love you

友達のノロケ話で またちよっとセツナクなって oh no no

「今から迎えにきて」なんて言えたら どんなに幸せだろ？

Just want you to stay with me

でもね、やっぱりワガママは言えない 困らせたくない
いつだってがんばってる君の笑顔が 大好きだから

会えない時間にも愛しすぎて 目を閉じればいつでも君がいるよ
ただそれだけで強くなれるよ 二人一緒ならこの先も

どんなことでも乗り越えられるよ 変わらない愛で繋いでいくよ
ずっと君だけの私でいるから 君に届けたい言葉

Always love you

“平気だよ”って 言ったらウソになるけど

“大丈夫”って思えるのは 君だから

会えない時間にも愛しすぎて 目を閉じればいつでも君がいるよ
ただそれだけで強くなれるよ 二人一緒ならこの先も

どんなことでも乗り越えられるよ 変わらない愛で繋いでいくよ
ずっと君だけの私でいるから 君に届けたい言葉

誰よりも君のこと 愛してるよ。

アヤは時折目を閉じて、何かをかみしめるように歌っていた。
他のどんな歌手よりも、僕だけの心にこんなに響いて届く歌。
これほどまでに清らかでまっすぐな歌声を、僕はこれまでに聞いたことがなかった。
これほどまでに心を揺さぶる歌声を。

9

僕とアヤはカラオケをあとにした。
今はすでに車に乗って、今晚の宿へと向かっている。
十勝川を越え、音更町へ抜けていく。帯広市では夜でも街の明かりがまぶしかったのだが、音更町に入ると途端に夜の闇が車道を覆っていった。

静かな畑の間を走っていると、まるでこの夜空の下、二人きりでいるようだった。

「そうだ」

僕は車を車道の隅に止めた。

「どうしたの？」

不思議そうに僕を見つめるアヤをいざない、僕は車から出る。

何だかわからない、といった様子だったが、アヤも素直に僕に従い助手席から降りた。

「ほら、見てみ？」

僕はとなりに来たアヤに夜空を指さして見せた。

「え？」ふと夜空を見上げるアヤ。すぐに驚嘆の声を漏らす。「...うっわー、綺麗！」

それはまさに満点の星空であった。

北海道の澄んだ冬の空気に、はっきりと星々がその存在感を主張していた。

まるでプラネタリウムのように、一つ一つの星が輝き、手の届きそうなほどに天球にぶら下がっている。

「アヤ、アレわかるかな」僕はひとつの星座を指差した。「オリオン座」

「あ！」アヤもその星座を指さしてはしゃぐ。「わかるよ！とうとう一緒に見れたね！」

僕とアヤはかつて同時にオリオン座を見上げたことがある。

同時に、とは言っても今のように隣あってではない。電話で話しながら、遠く離れた地で共に夜空を見上げた、ということだ。

あの頃の僕たちは、まだ互いの顔を携帯電話やパソコンの写真でしか知らなかった。

それでもメールや電話で互いに交わす言葉や声に恋に落ち、少しでもそばにいる幻想を抱いていた。

その中で、僕が鉏路川の上空にオリオン座を見つけた際、アヤも自宅の窓から共に同じ星座を眺めた。

同じものを同じ時に、電話といえども言葉を交わしながら見ることができたというのはとても嬉しかったことを覚えている。

しかしそれでもどうしても足りなかったものがある。

それは、圧倒的な存在感。

そして、温もり。

電波を介して、遠く離れたアヤの声は僕の耳に届き、確かにこの世のどこかにアヤが存在しているという実感はあった。でもそれは「どこか」であって、僕の隣ではない。彼女の息遣いも感じる事が無ければ、やわらかな髪に触れることもできない。温もりを感じることもできない。

しかし今は、まさに僕のとなりで同じ星座を見つめている。

あれだけ圧倒的な距離に身をじらされていたのが嘘のように、そこにアヤがいる。

アヤが吐く白い息と僕のそれが重なりあっては、夜空に消えていく。

圧倒的な存在感を放って。

僕は思わずアヤを後ろから抱きしめた。

今ここにいるアヤの存在感のすべてを抱きしめるように。

「...コウジ？」

「ホントに...」僕はなんと言っているかわからなかった。「...会いに来てくれてありがとう」

「ううん」アヤは後ろから絡められた僕の腕をそっと抱きしめる。「アヤも会いたかったから、だから来たんだよ？」

僕はアヤを抱きしめる腕の力が自然と強くなっていくのを感じた。まるで自分のものではないかのように勝手に強くアヤを抱きしめる。

きっと、僕自身の意思もあるだろうが、本能的にアヤを離してはならないような気がしたのだろう。

離したくなかったのだろう。

いつまでも同じものを見て、同じように感じていたい。

ずっとふたりで。

これほどまでに人を愛しいと思ったのは初めてかもしれない。

キミがこんな気持ちを僕に教えてくれたんだ。

愛しさは時に何よりも暖かく、熱く、そして切ない。

その全てが、キミに恋をしているということ。

「乾杯」

アヤの掛け声で、二つのグラスが重なりあう綺麗な音色が部屋に響きわたる。

お酒があまり得意ではない僕は梅酒を、アヤは乳酸飲料をベースとしたチューハイを、それぞれ客室に備え付けてあったささやかなグラスに移し替えたのだ。

僕は普段は決して晩酌などしない。

そんなことせずともいつでもぐっすり眠ることができたし、寝る前にアルコールを摂取したとも思わなかった。

しかし一緒にお酒が飲みたいとのアヤの申し出を断る理由はなかった。

「今日と明日、寝ちゃうともうバイバイなんだね」アヤがグラスに口をつけながらしみじみと言う。「やっぱり、寂しいね」

「それ、今言うかー」ちよつとのアルコールですぐにふわふわした気分になってしまう僕。「笑ってバイバイしよう、って言ったのアヤなのに」

「そうだけど...」

アヤがそう言いながら、足元を崩す。

途端に浴衣の隙間から、アヤの白い肌があらわになった。

「アヤ...それ、ちょっと刺激強すぎる」

「ちょ！」アヤが慌てて浴衣の崩れを直す。「えっちー！このえろすけ！」

「ひどいなあ、そこまで言わなくても」

「...でも、そんなコウジも大好きだよ？」

アルコールでほんのり桜色に染まった頬と、潤んだ大きな瞳で見つめられながらそんなことを言われると、僕は急にどぎまぎしてしまった。

からかったつもりが、逆にアヤにやられてしまった。

僕はどうしていいかわからずに、手に持っていたグラスを一気にあおる。「...知ってる」

「ねえ」アヤが僕たちの後ろを視線で示す。「これ、このままじゃさみしい」

アヤが示した先には、二組の和布団がきっちり敷かれていた。

僕たちが出かけていた間に、仲居さんが用意してくれていたのだろう。ちよつとくらいの寝像の悪さなら、隣に寝ている相手に迷惑をかけない程度に二組の布団は離れていた。

「せつかくふたりでいるのに、離れ離れで寝るなんてヤだな...」

「そうだね」僕はグラスを置き、立ち上がる。「こうすればどう？」

僕は二つの敷布団をぴったりとくっつけ、敷布団と掛け布団を垂直になるようにつなげた。そうすることで、どちらかが寝像が悪くても、決して敷布団の隙間に落ちることはまずないだろう。

「いいねー、コウジ、あったまイイ！」

アヤが歓喜の声を上げる。

僕はそんなアヤに満足して、布団の上に寝転がった。

「コウジ？」

「いやあ、普段滅多に飲まないから、少し気持ち悪くなっちゃった」くらくらす視界の中で、アヤに懇願した。「少し横になっていい？」

「大丈夫？」アヤが心配そうに僕の顔を覗き込んでくる。「お水、飲む？」

「ああ、欲しいな」

僕は重たい体を何とか起こそうとした。

しかしすぐにアヤに制止される。

「いいからそのまま寝てて。アヤが飲ませてあげる」

そう言ってアヤは洗面所にグラスを持っていき、水をくんですぐに戻ってきた。

「ありがとう、アヤ」

今度こそは体を起こさなければ、せっかくアヤが水をくんで来てくれても飲むことはできない

。

しかしそれすらもアヤに制止された。

「いいから寝てて、って言ったでしょー」

アヤはそう言ってくんできた水を自ら口に含んだ。

「え？」一体アヤが何をしようとしているのか、わけがわからなくなった。「僕にくれるん...」

しかし、僕の言葉は最後まで出てくることはなかった。

アヤが僕の唇を、彼女の唇でふさいだのだ。

ただのキスとは違う。

アヤの唇がそっと僕の唇を開き、少しずつひんやりした水を注ぐ。

僕は初め驚いたが、アヤが何をしようとしていたのか理解すると、全てをアヤに任せた。

一筋、僕の唇から水が漏れ、頬を伝って落ちていく。

そんなのは構わない。

アヤから注がれる甘い水を、僕は体中にしみ渡らせるようにゆっくりと飲んだ。

まるでキミの想いをそのまま飲みほしているようだった。

キミそのものを飲みほしているようだった。

キミが僕の中にすうっと入ってきて、優しくやわらかにしみわたっていく。

次の日は朝から快晴であった。

凜と澄みわたった冬の朝の空気に、くっきりと大雪連峰が浮かび上がっている。

僕とアヤは朝食を軽くすませ、車に荷物を積み込んでいた。

「とうとう、千歳に逆戻りするんだね」

アヤがぼつりと言う。

「そう...だね」

アヤを新千歳空港に迎えに行ったあの日、彼女を乗せてそのまま釧路へと一気に東へ下った。その道中当然この帯広市も通ったわけで、これからは一気にその道を逆に走っていくことになる。

そして、明日にはアヤは自分の街へと帰っていく。

荷物を積み終え、僕とアヤは車内に収まった。

「今日は思いっきり楽しむんだー」

アヤはそう宣言する。

その表情は何かを振り切るようでもあり、自分に言い聞かせているようでもあった。

「そうだね」僕も車のエンジンに火を入れながら応じた。「今回の旅を最高の思い出にしてもらわないと」

「何だよー」アヤがむっとしながら言う。「もう次が無いみたいな言い方して」

「違うよ」僕は入れかけたギアを慌てて元に戻す。「できれば僕だってこれからもアヤとたくさん思い出を重ねていきたいな、って思ってるよ」

「だったらそんな言い方しないの」

「ん...ごめん」

アヤは「判ればよし」と笑った。

僕はギアを再び入れ直す。そしてサイドブレーキを落として、車をゆっくりと走らせた。

音更町から十勝大橋を越え、帯広市に入る。

朝の国道は比較的交通量は少なく、若干寝不足の頭でもすいすい走ることができた。

国道からすこし街中に入ると、アヤが急に左腕に絡みついてくる。

僕はシフトレバーを握る手をアヤの手に移動し、応じた。

「とちちむら」は近年オープンした、十勝地方の食を堪能できる総合商業施設である。古くからある「ばんえい競馬場」に併設されるように建設され、相乗効果を狙った立地となっている。

僕はそれが完成してからというもの、気にはなっていたがこれまでにいく機会がなく、今回アヤを連れて初めて行ってみようと思いついたのだ。

「今日こそ帯広名物の豚丼が食べられるんだね」

アヤがうきうきしながら言う。

帯広市と言えば、全道的に豚丼が有名だ。

甘辛いたれに漬け込んだ豚バラ肉を炭火でじっくりと焼き上げ、これまたたれを十分にしみ込ませたご飯の上に乗せて出される丼ものである。

開拓時代に入植してきた人々が、家畜として連れて来た豚をそのようにして食べたのが始まりだと言われている。

全国津々浦々にある観光地の名物同様、帯広市内には豚丼の専門店が乱立していた。

その中の一店に昨日向かったのだが、到着したのが昼食時から大幅に遅れてしまっていたのでその店は閉まっていた。

そして今日、とちまちむらで食べようとアヤと約束していたのだ。

「美味しかったけど…」アヤはお腹をさすりさすり僕に付いて店から出て来た。「もう満腹一。ごめんね、食べきれなかった分食べてもらって」

「いいよ、僕は一人前じゃ足りなかったし」

「やさしいね、そう言ってくれて」

アヤがにっこり笑う。

その甘い声と、ふんわり笑顔で十分満足だった。

「あ」突然アヤが声を上げる。「今お馬さん見えた！」

「馬？」僕もアヤが見ていた方を振り返る。「ああ、隣は競馬場だからね」

「その馬じゃなくて、着ぐるみのお馬さん」

「え？」

僕は改めて辺りを見回す。すると確かに、とちまち村からばんえい競馬場へと至る入場門のあたりに愛嬌のある馬の着ぐるみが楽しげに行き交う人々に手を振っていた。

「可愛いねー、お馬さん」アヤが思わず走り出す。「こっち向いてー」

僕とアヤはたいして歳は離れていないはずだが、時折小さい子どものような一面を彼女は見せる。

そんなアヤの後ろ姿が、愛おしかった。

「アヤもこっち向いて」僕はデジカメをかまえた。「写真撮ってあげる」

「えー」アヤは明らかに顔を真っ赤にして照れている。「可愛く撮ってね」

「元が可愛いから大丈夫」

僕もいつの間にかこんな歯の浮くようなセリフをよく平気で言えるようになったものだ。アヤと出会う前の僕であれば考えられない。

きっと今までは、そんなことを言えば相手が引くであろうという恐れを持っていたのだ。いや、実際引くだろう。

しかしアヤはそんなことは一切なく、むしろいちいち顔を真っ赤にして照れてくれる。

僕の想いや言葉をすべて受け止めてくれる。

そんな安心感から、僕は素直に思ったことを口にする事ができるのだ。

僕は改めてデジカメのレンズをアヤに向けた。

そしてシャッターを押す。

今回の旅で、僕は何枚もキミの写真を撮ろうと思っていた。

再び離れ離れになってしまった後で、少しでもキミのを感じることができるよう。

でも、結局はそんなに多くは撮らなかった。

それはキミにカメラを向けている時間すらもったいなかったから。

キミのことを、見ていたかったから。

2

ばんえい競馬には通常の競馬とは違う点がいくつもある。

第一に、馬が走るコースが一直線であること。通常の競馬では馬が走るコースが楕円形なのに対して、ばんえい競馬は起伏のある直線状のコースを馬が走る。

第二に、その馬上に騎手はまたがらないということ。ばんえい競馬では騎手は馬が引くそのの先端に立ち、またそのそりには重しが載っている。ゆえに馬は通常の競馬のように颯爽と駆け抜けることはなく、起伏のあるコースを必死で上り下りしながらその順位を競うのだ。

通常の競馬では見られない、馬達の真剣そのものな表情が観客達の心をつかむらしい。

「ごめんね、ちょっとトイレ行ってくる」アヤが僕に荷物を預けた。「寒くって、ちょっとおなか冷えちゃったみたい」

「わかった、待ってるよ」

するとアヤは僕の耳に囁くように言った。「大きい方じゃないからね」

「そんなこといちいち言わなくていいよ」

アヤは「あはは」と笑いながらトイレへと消えていく。

僕はそんなアヤの後ろ姿を眺めながら思わず笑ってしまった。

初日のよそよそしさなどどこ吹く風、といったように僕たちは急速に接近していった。

確かに僕たちは、新千歳で初めて顔を合わせてからたかだか4日目。

たったの4日間だ。

それなのに、今では長年つき添ってきた恋人同士のような空気をを感じる。

そもそも、メールや電話といったツールを最大限に活用してきたので、直接顔を合わせるのは今回が初めてとは言え、もっと前から気持ちは通じ始めていたのだから、単に4日間とはひとくくりにできないのかもしれないが。

まだまだ、これからも続いていくような気がする。

いや、終わらせることなど到底できないのだ。

それほどまでに、僕はアヤに惹かれている。

もう後には戻れない。

「そろそろ帯広を出ないと、千歳に着くのが遅くなる」

トイレから戻ってきたアヤに僕はそう告げた。

「何だよー」アヤは不満顔だ。「そんなに早くアヤと離れたいんかー？」

「いや、そういう意味じゃ...僕だってアヤと離れたくないよ」

僕がそう言うと、アヤは一気に満面の笑みを見せる。

「知ってるー」

「な...」

「へへ、意地悪言ってみただけだよ。ごめんね」

「もし僕が『そうだ』って言ったらどうするのさ」

「そんなこと言われたら...」うーん、と思考を巡らせるアヤ。そして唇を尖らせて言った。「アヤ、競馬場の真ん中に立ってお馬さんにふんづけられて死ぬ」

僕とアヤを乗せた車は、音更帯広インターより道東自動車道へと進んでいった。

この日、気温は冬の北海道らしく低いものの、十勝管内は特に雪が降ることもなく視界は良好。非常に運転がしやすかった。

ところがそれも束の間、道東自動車道が日高山脈を貫くトンネルを抜けた途端、あたりは一面の雪景色。それどころか猛吹雪と言っていいほどの雪が吹きすさんでいた。

まるで川端康成の名著「雪國」のようだった。

ただし、猛吹雪の中アヤを乗せてハンドルを握る僕にとっては「雪國」のような感傷に浸る余裕はない。雪にタイヤを取られないよう、視界を遮られないよう、細心の注意を払う。

「すごい雪だね」

僕とは正反対に、アヤは弾んだ声を上げる。

「うん、久しぶりかも、こんな吹雪の中運転するの」

「大丈夫？」途端に心配そうな声を出すアヤ。「どこかで休憩する？」

「そうだね、さすがに疲れてきたし...」

「いいよ、千歳に着くのが少しくらい遅くなっても」

そう言ってアヤはシフトレバーを握る僕の左手に柔らかく手を重ねた。彼女の手のひらから伝わる温もりはどこまでも優しく、温かい。

どこまでもアヤに包み込まれているような、ホッとする感覚。

「お言葉に甘えて、次の駐車スペースでちょっと休憩するよ」

僕は視線だけをアヤに向けて言った。

「そうしなー」ふんわりと笑顔を向けてくれるアヤ。「先はまだ長いんだし」

それからほどなくして見つけたスノーチェーン着脱用の駐車スペースに僕は車を止めた。

サイドブレーキを引くのとほぼ同時にリクライニングレバーを引き、運転席を一気に倒す。

「疲れたー」

「お疲れ様、運転ありがとうね」

「なんもなんも」 労わるように僕を覗きこむアヤを見上げながら、僕は手のひらをひらひら振った。「遠い所来てくれたんだし、これくらいは僕ががんばらないと」

アヤは「ありがとう」とにっこり笑った。

僕にはそれだけで十分だった。

とはいえ、気持ちの上での疲労と体の疲労は別物だ。シートを倒した時から、体の至る所から疲れがにじみ出るようだった。

「ごめんけど、ちょっとだけ寝ていいかな」

「うん、いいよ」アヤはそう言うと、はっとした表情を見せた。「ごめん、そんなに疲れてたなんて全然気づかなかった」

「謝ることないよ」

「でも…」

それでも心配そうに僕を覗きこむから、僕は思わず笑った。

「疲れてるのを忘れるくらい楽しいんだ、アヤとおしゃべりするの」

「そう言ってくれて嬉しいけど…しっかり今休んでね」

「うん、ありがと」そう言って僕はそっと目を閉じた。「5分だけ寝かせて」

「任せて」

そう言うと、アヤは何かを思いついたようにバッグの中を探り出した。

そして僕に一枚のハンドタオルを差し出す。

「これ使ってね。外、眩しいでしょ？」

「ああ」初め僕はどういう意図でアヤが僕にそのタオルを渡してきたのかわからなかったが、すぐに理解した。「ありがとう、ホントにアヤは優しいね」

「コウジだからだよー。他の人にはこの半分も優しくしないんだからね」そう言って悪戯っぽく笑うアヤ。「いいから、ゆっくり休んで？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

僕はタオルを顔にかけて、目を閉じた。

そしてあっという間に眠りに落ちる。

自分の車のエンジン音の向こう側に聞こえる、行き交う車の音。

夢現の意識の向こうで聞こえてくる。

彼らはどこへ向かうのだろう。

誰かの元へか、それとも仕事へ向かう途中か。

真っ白な世界の中で、僕らふたりの乗った車だけがぼつんと浮かび上がっていた。

それでもキミは僕の手を離さなかった。その温もりが嬉しくて、僕も離さなかった。

いつまでこの手を繋いでいられるのだろう。

「今回の旅、なかなか計画通りにいかなかったね、ゴメン」僕はハンドルを握りながらアヤの横顔に謝った。「こんなに時間がつまるなんて思いもしなかった」

道東自動車道からようやく千歳へと向かう道央自動車道に乗ったのだが、辺りはすでに暗くなってしまうている。

冬の北海道は実に落日が速い。

かつて僕自身が北海道で初めて冬を経験したときにも驚いたものだった。僕の地元では冬とは言えまだ夕方であろう時刻には、もうすでに星たちが瞬いていたのだから。

「仕方ないよ」ふと笑いながらアヤが言う。「この次に期待だね」

僕たちは本来、計画の段階ではこの後札幌に向かい、札幌の都会を満喫したり北海道の鎮守である北海道神宮にお参りしたりする予定を立てていた。

しかし、今夜の宿の予約の時間が迫っていたこともあり、札幌入りは断念せざるを得ない。

車のヘッドライトが、降りやまない雪を照らし続けている。

「じゃあ、せめて小樽には行ってみない？」

「小樽？」

「うん」僕はアヤに提案を続ける。「有名な小樽運河って知ってるかな。冬の運河はすっごくきれいなんだ」

「どんなふうに綺麗なの？」

明らかにアヤの声は弾みを取り戻した。

僕はそれに手ごたえを感じ、続ける。

「昔はものを船で運ぶために作られた運河みたいだけど、今は有名な観光スポットで、わきの散策路には雪が積もって、運河の水面にはランプが浮かんでライトアップされてるんだ。それもぎらぎらした下品なライトじゃなくて、オレンジ色のろうそくのような温かい光なんだよ」

「へえ...」

急にアヤの声が沈む。

「どうした？」視線は前に向けたまま、アヤの様子をうかがった。「あんまり興味ない？」

「ううん、そんなことはないよ」そう言って、アヤはそっと僕の左手に柔らかな手を重ねた。そしてわずかに力を込める。「詳しいな、って思ってた」

「そりゃあ、北海道に住んで長いからね」

「そうじゃなくて...」アヤの声に不安の色が混ざる。「誰かに行ったことあるのかな、って...」

「大丈夫」僕はアヤの手をぎゅっと握り返して、か弱い小さな子に言い聞かせるように努めて穏やかに言った。「確かに一度だけ小樽には行ったことがあるよ。でもそれは僕が大学受験に来た時の話。札幌の大学に受験に来たときに、ちょっと立ち寄っただけだよ」

「ホント？」

直接アヤを見なくても、アヤが不安げに僕の横顔を見上げるのがわかる。

「ああ。だから僕にとっては初めてじゃないけど、『誰か』と行くのはアヤが初めて。アヤが初めての人だよ」

「...奥さんとも、行ったことないの？」

きっとアヤが本当に確かめたかったのはこれなのだ。

阿寒からの帰り道に立ち寄ったアイスクリーム店でのことを気にしていたのだろう。

今回の旅を通してわかったことだが、アヤは僕の妻のことに過剰に反応する。

いや、こんな関係だからであろう。僕だって、アヤの夫のことを気にしていないといえば嘘になる。

アヤの思いや不安は、痛いほどわかった。

「もちろん、行ったことない」アヤが安心できるなら、何度でも言おう。「さっきも言ったように、ひとりでは来たことがあるけど、嫁さんはもちろん、他の誰とも行ったことないよ」

「よかった...」

アヤは心底安心したように、ホッと息をつく。

「じゃあ、行ってみる？」

「うん」

僕は小樽へと続く札幌自動車道に向かうように、カーナビを入力し直した。

確かに降雪の勢いは先ほどまでより強まっている。積雪も厚みを増し、タイヤを通じて感じる雪の感触は、油断するとスリップしそうなくらいだ。

それにしても、小樽まで目前という地点で札幌自動車道がまさか通行止めになるとは思わなかった。

途端にみじめな気分が僕を襲う。

とてつもない勇気と、危険を冒してまで遥々北海道まで会いに来てくれた愛しい人との限られた時間を、プラン建てミスのみならず天候にも邪魔をされるなんて。

しかしこれ以上高速道路を走るわけにもいかず、僕は最寄りのインターチェンジで一般道へとハンドルを切った。

「とりあえず小樽市内には入ったけど...どうしようか」土地勘のないアヤに聞いても仕方ないことはわかっているながらも、アヤに伺う。「千歳までもどる？」

「アヤはいいよ、一般道でも」そんな僕を包み込むように、アヤは言う。「のんびり行こうよ」

小樽に近づくほどに深みを増す積雪に、キミは歓声をあげていたね。

地元じゃめったに雪が降らない、降ってもこんなに積もらない、って。

北海道に来る前から、キミは北海道の雪にあこがれていた。だからたくさんの雪を見せてあげたかった。

僕がかつて惚れた、北海道の雪を。

重ねて渋滞ときた。

嫌なことは重なるものだ。

僕は一向に進まない赤いテールランプの列に心の中で悪態をつく。

「なかなか進まないね」

アヤは明るく言う。しかし今までとは違い、疲労の色は隠せない。

「そうだね...札幌道が通行止めになったから、車が全部こっちに流れてきたんだろうね」

僕は焦っていた。

車がなかなか進まない苛立ち、それもあつたが、アヤを振り回してしまっているのではないかと、そんな不安。

僕に会うこととともに、北海道にくること自体を楽しみにしていたアヤ。だからこそ僕は、アヤと一緒にいることができる限られた時間の中で、アヤに「たくさんの北海道」を見せてあげたかった。

僕が惚れた北海道を。

しかしそれは僕のわがままかもしれない。

慣れない土地で、電話やメールでずっと連絡を取り合っていたとはいえ、「初対面」の僕と四六時中一緒にいることは、少なからず身も心も疲れさすだろう。

「アヤ、おなかすいちゃった」アヤは腹部をさすりながら、えへへと恥ずかしそうに言う。「ごめんね、食い意地はってて」

「そんなことないよ」僕はアヤの方へ視線をやる。幸か不幸か、車は動かない。「僕もおなかすいてきた。運河まで行く前にどこかでご飯食べていこう」

僕はナビを操作し、この道の先に何か食事ができそうなところがないか検索を始める。

「なんだかゴメンね」

アヤが不安そうな声で僕の手を握る。

「何が？」

「なんだか嫌われちゃいそうで...」

その声は今までに聞いたことがないくらいにか細く、どこか申し訳なさそうだった。

一方の僕はというと、アヤがなぜそんなことを思うのか不思議だった。僕の無計画さや不運を責められこそはすれど、僕がアヤに対して不満を持つ要素はない。

「どうしてそんなこと思ったの？」

「だって...コウジは一生懸命運転してくれてるのに隣で`おなかすいた、なんてワガママ言っちゃって...。言ってからなんだか恥ずかしいし、申し訳ないし。それに...」

「それに...？」

アヤは言ってから口元をもごもごさせている。まるで言っていることなのかどうか迷っているようだった。

「それに...なんだかコウジ、怒ってない？」

意を決して出た彼女のその言葉に僕は虚を突かれた。

「だって、さっきから時々黙っちゃって...なんだか怖いよ」

「え？」そんなつもりはなかったのだが。「そんなに怖い顔してたかな」

「ううん、違うの」アヤは頭を振った。「静かな時間が怖くて...コウジは絶対そんなことは言わないけど、実は内心アヤのことあきれてるんじゃないか、とか、嫌な女だな、とか思ってるんじゃないかって...」

「そんなこと思ってないよ」僕は慌てて否定した。「むしろびっくりしたよ、アヤがそんな風に不安に思ってるだなんて」

「だって...」そう言ってうつむくアヤ。「...ほんの少しだけだったとしても、嫌われたくない。マイナスに思われたくない」

その言葉を聞いた僕は、思わず車をどこかに止めてアヤを抱きしめたくなるくらいに胸が締めつけられた。

これほどまでに、誰かに想われたことがあっただろうか。

僕はシフトレバーに添えていた左手で、アヤの柔らかな頭を肩に引き寄せる。

「ごめんな、不安にさせて」言ってからさらに左手に力を込め、頬と肩でアヤの頭を抱きしめる。「アヤのことをほんの少しでも嫌いだなんて、思ってないよ。アヤのこと嫌えるわけがない」「じゃあ何考えてたの？」

「うん...こう言ったら変かもしれないけど...」

「いいよ、何でも言って」

「ありがとう」僕は先ほどの焦りや不安をアヤに漏らす。「実は、急に僕も不安になったんだ。今回の旅が思い通りうまくいかなかったことでアヤにあきれられてないかな、とか、アヤのことを振り回してるんじゃないかな、とか」

「あきれてなんかいないよ？」アヤが僕の肩に頭を預けながら言う。「だってコウジ、アヤのためにいろいろ考えてくれたもん。うまくいかないことだって時にはあるよ」

「そう...かな」

「うん。北海道ではね、コウジしか頼れる人いないんだよ？」

「北海道だけ？」

僕は少しいじわるっぽく言った。

こういうときにも悪戯心が出てきてしまうのが、僕の悪い癖かもしれない。

「そうじゃないでしょ」ムツとしながらアヤは続けた。「もしも許されるなら、アヤはコウジにどこまでもついていきたい。そう思ってるんだから」

再び僕の胸がぎゅうっと締めつけられる。

どうしてこの女性は、僕の心をここまでつかむことができるのだろう。

何とも言えないむず痒い空気が、暖かで熱い想いが、車内を包む。

相手にいかに想われているか。それを測るものさしはない。

でも、キミからもらう「言葉」は何よりも僕に「キミに想われている」という実感をくれたんだ。

キミが口にする不安が僕に対する想いで、不安に思うほどに僕のことを考えてくれているんだな、って思わせてくれる。

できればキミの不安をすべて取り除いてあげたいけれど、なんだか嬉しいんだ。

ウイングベイ小樽というショッピングモールは、札幌道が通行止めにさえなっていなければ小樽インターチェンジを降りてすぐ、という好立地にあった。

海沿いの一般道を走ってきた僕たちは、夜の海沿いのヨットハーバーに目を奪われていたが、大きな建物に隣接されている巨大な観覧車が見えたとき、そこがショッピングモールだと気付いた。

その観覧車は冬にもかかわらず、ネオンを輝かせゆっくりと回転している。営業はしているようだった。

ここにならすぐにも食事のできる店くらいあるだろうと思い、僕はすぐに立体駐車場に車をすべり込ませる。

「ここに六花亭ってお店あるかな」車から降りながらアヤが尋ねる。「コウジは六花亭ってお菓子屋さん知ってる？」

「もちろん」僕も車を降りて、施錠する。「でも、六花亭がどうかしたの」

六花亭は、おそらく道民なら誰でも知っているであろう、北海道を代表する製菓店だ。道民でなくとも、全国的に有名な北海道士産『白い恋人』を製造販売する石屋製菓とともに知名度は高い。

本社工場を道東の帯広市に構え、僕の住む釧路市やその近隣には特に店舗数は多い。

「あのね、またコウジの気分を悪くさせるかもしれないけど…」そう言って、アヤは申し訳なさそうにうつむく。「うちの旦那さんがバターサンドっていうお菓子食べたいから買ってきて、だつて」

そういうことか。

何度目だろう、すうっと僕の背中に「現実」が冷たく這いよる。

今はどうしても消え去ることのない「現実」。

「そっか…」

何とも言えないその感情に、僕はそんな反応しかできなかった。

「ごめんね、ホントにごめん」そんな僕を見て、アヤはあわてだす。「だつて、買って帰らないと何言われるか…。証拠作りでもあるんだよ、お願い、わかつて」

わかつてる、わかつてるんだ。

アヤには「現実」がある。

もちろん、僕にだつて。

ただ、北海道に来ているアヤとは違い、僕には証拠作りの必要もないだけなのだ。

僕はすうっと、ひとつ深呼吸をして平常心を取り戻そうとした。いつまでもアヤに不平等な不快感を与えるわけにはいかない。

「わかったよ、六花亭があるか、ここではまずそれを探してみよう」たぶん僕は力なく笑ってい

ただろう。「その後はすぐに晩御飯だよ」

幸いにも、ウイングベイ小樽には六花亭の常設売り場があり、六花亭の代表商品である「マルセイバターサンド」はすぐに見つかった。

ホッとした顔で会計を済ませるアヤを見ては、お腹のあたりがちくりと痛む。

理屈ではわかっていた。

いや、わかっていた「つもり」なのかもしれない。

アヤの口から「旦那さん」、そして僕の口から「嫁さん」という言葉が出るたびに、僕とアヤの間に重苦しい空気が流れる。

そのたびに、僕とアヤは「不倫関係」なのだと実感させられた。

どれだけお互いに愛し合い、純粋に想い合っているにも、この関係を形容する言葉はそれなのだ。

そして、明日にはアヤは夫の待つ街へ帰る。

きっとそのことが余計に僕の心をかき乱すのだ。

インターネット上で初めて知り合ってから、およそ二か月。

初めてそばにキミを感じることができてから、四日間。

こうして考えると、キミとの時間はまだまだ始まったばかりだね。

だけど、それでも僕は、できることならキミとこれからもずっと一緒にいたい、って思うんだ。

「これからもずっと」っていうのは、死が二人を別つまで、ってことだよ。

でもそれよりも、明日の「サヨナラ」がなんだか怖い。

お互い、次にいつ会えるかわからない「現実」と、社会的にも保障されたパートナーの元へとキミを帰すことが。

移住するまでに惚れこんだ北海道の物を、大好きなキミが買って帰り、「あの人」と食べていることを、どうしても想像してしまう。

キミを帰したくない。

このまま、ふたりどこか誰も知らないところへ行きたかった。

新千歳空港でアヤと初めて会う前から、僕たちはお互いにチャンスがあった時によく電話をしていた。

とは言え、そのチャンスはそうやすやすと来るものではなく、特にアヤは専業主婦であるが故、夫が仕事から帰る前や飲み会等で帰りが遅い時などに限られる。

僕はと言えば日中仕事がある。当然、アヤの夫の仕事の時間ともかぶることがほとんどであった。よって平日は十数分しか話せないことなんてざらだった。

一方、アヤの夫が夜遅くならなければ帰らない時は、僕が妻に「仕事で帰りが遅くなる」とでも言って家に帰らず、車の中などで携帯電話が熱くなるほどに話した。

となると、大きな問題が出てくる。

通話料金だ。

世の中の遠距離恋愛を貫くカップルの例にもれず、僕たちにもそれは大問題であった。

しかも僕とアヤが利用する携帯電話会社は違っていたので、通話料金はほぼ満額かかってしまう。

かと言って、好きな時にちょっとしたことでも連絡が自由にとれるわけでもないのだから、長く話せるときは貴重だった。

そんなときに時間の許す限りの会話をすることを放棄するなどという選択肢は、僕たちの間にはなかった。

「そう言えばコウジって」アヤが石焼焼きそばをふうふうしながら言う。「よく奥さんと離婚したい、って前から言ってたよね」

六花亭での買い物を終えた僕たちは、ウイングベイ小樽内にあった中華料理店で遅めの夕食を取っていた。

アヤよりも先に自分のメニューを平らげていた僕は、水を一口含んで答えた。

「うん、言ってたよ」

「でもね、アヤ思うんだ」

アヤは手に持っている箸で焼きそばを小突く。しかし、それを口に運ぶことをやめた。

僕は沈黙をもって、言葉の続きを促した。

「なんだかんだ言ってもね」そう言って、アヤは苦笑いを僕に向ける。「結局コウジは奥さんと離婚しないと思う」

聞いた瞬間、僕の心臓はどきりと大きく跳ね上がった。

それはアヤの言っていることが的を射ぬいたからではもちろんない。

アヤがそんな風に思っていたことに対してだ。

僕は自分の妻とは遅かれ早かれ、離婚することを真剣に考えていた。

妻とは大学時代からの付き合いだったのだが、その時間を加算すると十年近い年月になる。

確かに、僕は妻に真剣に恋をしていた。

しかし年月とは残酷なもので、かつてはあんなに愛しかった妻は、今ではもはや、ただ同居する他人となっていた。

このまま「結婚生活」を続けていくことの意味をなくしたまま、僕は一生を終えるのか。否、そんなことは耐えられない。

そんなことを考え始めたころ、僕の目の前に新たな光がさした気がした。

それがアヤだった。

いつしか僕の心の中には、半分の「妻との離婚」そしてもう半分の「アヤとの未来」でいっぱい

いになっていた。

だからこそ、アヤの言葉は僕の胸に突き刺さる。

「なんでそんなこと思ったの」

「具体的に...こうだから、っていうのはなかなか言えないけどさ」アヤはしばらく目を伏せて考え込むと、ふと思いついたように言う。「例えば、携帯電話かな」

「携帯電話？」

「うん。コウジってさ、ドコモの携帯使ってるでしょ」

「うん」僕はテーブルに置いていた自分の携帯電話に視線を落とす。「初めて携帯を持ったところからずっとドコモだったからね」

「前にコウジの親族はみんなドコモだ、って言ってたよね？」

アヤは一つ一つ確認するように問う。

僕はそんなアヤの真意をつかみきれずにいた。

「...ということは、奥さんもドコモだよ。アヤはiPhoneだからソフトバンクなのに」

そこまで聞いて、僕はハツとした。

「アヤがもし逆の立場だったら、すぐにソフトバンクに変えるよ？ソフトバンク同士だったらタダともだから、ほとんど通話料気にせずに話せるし...それにコウジ、前にiPhoneに興味ある、って言ってじゃん」

何も返せないでいる僕を一瞥して、アヤは続けた。

「もちろん、家族割とかいろんな事情があるのはわかるよ、アヤだってばかじゃないし。でも...そういう所でなんとなく...なんとなくだよ、アヤとの繋がりより奥さんとの`繋がり、が捨てきれないのかな、なんて思っちゃう」

そう言ってまっすぐに僕を見つめるアヤ。

それは、きっとアヤが初めて僕に本気でぶつかってきた瞬間だった。

アヤが正面切って僕に不満をぶつけてくる。

初めて二人の間に流れる不穏な空気はもちろん心地のいいものではなかった。しかし、どこかでそれを嬉しく思った僕がいる。

嫌なことは嫌だと、初めてアヤが僕に言ってくれたのだ。

しかし、ただ喜んでいては本物の大ばか者である。

本気には本気で返さなくてはならない。

「わかった」僕もアヤをまっすぐに見つめ返す。「僕もソフトバンクにする。アヤと同じiPhoneにする」

「無理しなくても、いいんだよ...？」どこか悲しそうな顔で僕を上目づかいで見つめるアヤ。「アヤに言われたからって、いやいやそうされても嫌だし...それに」

「それに？」

「わがままな女だなんて思われて嫌われたくない...」

まったく、この人は。

どこまで僕の心をかき乱せば気が済むのだろう。

「確か、さっきこの建物のどこかでソフトバンクのショップを見つけたんだ。そこで機種変更するよ」

え、と驚いた表情に変わるアヤ。

「い、いきなり？」

「うん、だってこのままじゃアヤがさっきみたいに思うのも仕方ないって思った。アヤのことをわがままだなんて思っていないよ。本気でぶつかってきてくれたことが嬉しかったんだ。だから、僕もアヤに本気を見せるよ」

「そうしてくれると...気持ち的にも金銭的にも嬉しいけど、大丈夫？」

不安そうに僕を見つめ返すアヤに、僕は続けた。

「大丈夫かどうかは...正直わからない。アヤも知ってる通り、うちはみんなドコモだから、ソフトバンクに変えるっていうことは僕一人だけがいきなり家族割から抜けることになるし、嫁さんへの説明も必要だよ。だって、出張って言って出かけて、家に帰ったらいきなり携帯が変わってるなんておかしいから」

アヤは返事に困っているようだった。

まさか自分が言い出したことが一気に動き出すなんて思ってもいなかったのだろう。

「そうと決まれば、早く食べちゃってショップに行くよ」

僕はそんなアヤに余計な不安を与えてしまわないように、にかっと笑ってそう宣言した。

僕たちの関係を形容する言葉はいろいろとある。

誰が何と言おうと、そのうちのひとつが「不倫」だが、キミはその言葉を使うことを嫌ったね。

——不倫は不倫だけど、アヤは「本気の恋」だから不倫だなんて言いたくないんだ...

それは僕も同じだった。

また、他の言葉で表現するなら「遠距離恋愛」。

北海道と本州の真ん中では、そうそう気軽に会いに行くこともできない。ましてや「不倫」なら。

だからこそキミと僕は「繋がり」を求めた。

今まではパソコンのメール、携帯のメール、そして携帯電話での通話で満足していたのかもしれないね。

でも、同じ携帯電話なんて素敵じゃないか。

ありがとう、僕の背中を押してくれて。

「だから、前から欲しかったiPhoneに携帯を変えたいんだ、って」僕は携帯に向かって語気を荒げた。「札幌のショップに立ち寄ったら安かったんだ」

携帯の向こうの妻に、この四日間で何度目かわからない嘘をついた。

今僕がいるのは小樽であって、札幌ではない。

札幌に出張だ、と言って、今アヤといるのだから。

そのアヤとはいえば、僕から少し離れたところでショウケースに並んだソフトバンクの新型携帯電話をためつすがめつしている。

「とにかく、機種変して帰るからな」

そう言って、僕は一方的に通話を切った。

それに気づいたアヤが僕の方に向かって歩いてくる。

「...どうだった？」

「まあ、一筋縄ではいかないだろうけど何とかなるさ」不安そうなアヤを安心させるように穏やかに言う。「とりあえず話はしたんだし、機種変して帰ったら諦めるだろうよ」

さっそく僕はアヤを伴い窓口に向かったのだが、時間が遅すぎたようだ。携帯電話の機種変更の手続きはおろか、キャリアの変更受付時間もとうに過ぎていることを受け付けの女性に告げられた。

「ダメだったね」

アヤが心底残念そうに言う。

「仕方ないよ、遅すぎた」

「...どうするの？」

「明日になったらもう一度挑戦するよ」

「明日になったら...」アヤは一瞬考え込み、落胆した。「...アヤと一緒にショップに行けないね」

そうだった。

アヤは明日の朝一番の羽田空港行きの飛行機で自分の街へと帰るのだ。

ショップの開店時間には、すでにアヤは空の上のはず。

「iPhoneに変えたら、すぐにメールするよ。誰よりも一番早くに」僕は力を込めてアヤを慰める。

「アヤのために変える携帯なんだから、初めてのメールもアヤがいい」

「飛行機の中じゃメール返せないよ？」

「飛行機を降りたら返してくれればいい」

「すぐに旦那さんと合流したら、もっと遅くなるかも...」

「いいよ、待ってるから」

僕はアヤの両手を握った。

言葉だけでなく、僕の本気がこの手を通じてアヤに届くことを願って。

「...ありがとう」僕を見上げたアヤの顔に笑顔が戻る。「アヤのために」

「いいんだ」僕も最大限の笑顔で答えた。「アヤとのためだから」

僕とアヤは手を繋いだまま、ショッピングモールをぶらぶら歩いていた。

ちょっとした屋内広場ではとある自動車メーカーの新車が展示してあり、ふたりで「もしふたりの間に子どもができたらどんな車がいいか」なんて話題で盛り上がったり、「その車でどこにでかけたいか」などと真剣に話し合ったりした。

そのようにあてもなく歩いていると、いつの間にか駐車場とは反対側のショッピングモールの出入り口付近にまで来ていた。

「端っこまで来ちゃったね」アヤが可笑しそうに笑う。「そろそろここも出よっか」

「そうだね」

そう答えて、車をどのあたりに止めたかを思い出そうとしたその時、ふと僕の頭に浮かんだものがあった。

観覧車だ。

「ねえアヤ、ちょっとお願いがあるんだけど」

「ん、なーに？」

「外に観覧車があったの覚えてる？」

「そう言えばあったねー」

「一緒に乗ってくれない？」

そう言うとアヤは一瞬困ったような表情を見せた。

「...アヤ、高い所苦手なんだ」

「そうなの？」

「うん...それにさー」そして突然歯切れが悪くなるアヤ。「観覧車、っていったら定番のデートスポットじゃんか」

初めはアヤが何を言わんとしているのかわからなかったが、僕はすぐに気づいた。

小樽に行こう、と僕が提案した時ときっと同じだ。

「観覧車なんて、子どものころにひとりでか家族としか乗ったことないよ」

「ホントに？」

「うん。でも昔から『彼女、と乗ってみたいな、って夢はあったんだ』

アヤは何と答えていいかわからないようだった。それも仕方ない、そうでなくとも高い所が苦手だと表明しているのだから。

「高い所が嫌かもしれないけど、僕の人生初めての観覧車デートしてくれないかな、『彼女、として』

それでもしばらく考え込むアヤ。しかし意を決したように僕の手をぎゅっと握り直し言う。

「いいよ、コウジがそこまで言うならアヤ、ついて行く」

観覧車に乗ったアヤは寒さもあいまってすぐに震えだした。

眼下に広がる、冬の小樽の夜景に視線をやる余裕もないらしい。

震えを抑えてあげようと僕がアヤの隣に行こうとすると、「揺れてるー！」と悲鳴を上げた。

「ホントに高い所苦手なんだね」

僕がそうからかうと、アヤは全力で訴える。

「だから言ったじゃんかー...」

「なんだかゴメンね、無理やり付き合わせちゃって」

「そんなことないよ。コウジがしたいこと、何でも一緒にしてあげたいから」

そう言って力なく笑うアヤ。

本当は怖くて怖くて仕方がないのに、僕のことだけを考えてついてきてくれた。

隠し切れないほど震えているのに、僕の願いをかなえるために。

そう思った時、僕の心は何者かに締め上げられたかのようにぎゅう、と痛んだ。しかしそれは不快な痛みではない。呼吸をすることすら忘れるほどに、アヤに目を奪われる。

「アヤってさ」きっと僕は苦悶の表情をしていただろう。「何度僕を恋に落とせば気が済むの...?」

そして僕はなるべくゴンドラを揺らさないように、そうっとアヤの正面に膝立ちをした。自然と僕の視線はアヤの顔を見上げる形になる。

やがて僕たちを乗せたゴンドラは、観覧車の頂上付近に差し掛かった。

「アヤ」

こんなにも誰かのことを愛しいと思った恋は、僕の今までの人生の中であったらどうか。

こんなにも愛しいと思った人が、今までにいたらどうか。

「いつになるかわからないけど、いつか...いつかさ、何も気にしなくて済む、その時、が来たら、僕と一緒にしてくれないか」

「はっきりと言えることではないけど」そう前置きをして、アヤは精いっぱい笑顔で答えてくれた。「アヤもおんなじ気持ちだよ」

僕とアヤは、ゴンドラの中でこれでもかと言うほどに力いっぱい抱きしめあった。

本当は結婚してほしい、と言いたかった。

でも今の僕の立場では言えることではなかった。

キミにも、そして僕にも、そうするためには超えなくてはならないハードルが多すぎて、高すぎる。

だから精いっぱいの思いで、一緒にしてくれないか、とだけお願いしたんだ。

もちろん、真意を込めて。

7

僕は千歳市内に向けてナビを設定した。事前に予約してあった今晚のホテルまではおよそ一時間。

車を立体駐車場から出した途端、来た時よりも勢いが強くなった雪がフロントガラスを覆う。

「これが今回の旅で最後のドライブになるのかな」

アヤがさみしそうに言う。

「そう...だね」

アヤがそんなことを言うものだから、僕の背中にも「明日の別れ」が実感としてそろりと背中を撫でる。

朝九時の飛行機で帰るアヤのために、僕は新千歳空港からなるべく近いホテルを予約していた。

車でおよそ十分。

そんなものはドライブとは呼べないし、何より朝はバタつくであろう。

明日もアヤと「おはよう」を言えるが、明日は「一日」ではないのだ。

「ごめんね」アヤは申し訳なさそうにうつむく。「空港から家まで帰ることを考えたら、朝一番の飛行機で帰るのがいいと思って...」

アヤも同じことを考えていたらしい。

「気にしないで」僕はぎゅっところえて答えた。「明日は僕も釧路まで帰らなくちゃならないから」

車を札樽道の高架沿いに走らせていると、雪を幾分か避けることができた。

今僕たちが走っている一般道を、高架上を走る札樽道の水銀灯がオレンジ色に照らしている。その光に照らされて雪がオレンジ色に輝くものだから、街全体が物悲しい雰囲気にもまれていた。

「ねえ...」アヤが握ったままの僕の左手を揺らす。「お願いがあるんだけど」

「何？」

「シートベルト、外しちゃダメかな」

おずおずと聞くアヤ。

「どうして？お腹でも苦しいの？」

「ばっきゃろー」そう言ってアヤは先ほどまでとは打って変わってけらけら笑い出した。「そんなにお腹出てないよー」

「ごめん、そういう意味じゃないよ」僕もつられて笑う。「じゃあどうして」

「あのね、遠いんだ」

「何が」

「ホントに鈍ちん」くっくくと笑いながら僕を小突くアヤ。「コウジが、に決まってるでしょ」

そう言って、すぐにアヤは真顔に戻る。

「なんだか時間をもったいないんだ。こうして助手席にいるのもいいんだけど、もっとくっつきたい」

アヤの可愛らしい懇願ではあるが、それはすぐには承諾できない。

いろんな意味で危険だ。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど」僕はアヤをなだめるように言う。「雪道だし危ないよ。それに、僕は一応は公務員だからね。違反がばれると色々うるさいんだ」

「ちょっとくらいいいじゃん...」落胆するアヤ。「それとも、アヤとはくっつきたくないんだ...」

」

「そんなことないよ」

僕は力を込めて否定する。

そう思われるのだけは不本意だ。

「いいよ、ちょっとくらいなら」

「ホント？」

アヤは声を弾ませて、さっそくシートベルトを解除し始めた。そして僕の左腕に絡みついてくる。

これまでは、アヤは助手席にいる時にはいつも僕の左肩に頭を預けていた。僕もアヤが無理な態勢にならないように体を助手席側にできるだけずらしていたものだ。

アヤはこうしているのが好きだという。

自分の頭がちょうどよくすっぽりと収まるのだそうだ。

そうしていると、高さ的にも僕の左側の頬がアヤのふんわりとした髪に密着するのだが、その柔らかな髪の感触や香りも僕は気に入っていた。

アヤが一度僕から離れる。

何をしようとしているのか僕が疑問に思っていると、アヤは助手席の上に正座し始めた。

そして顔を僕の目の前に出す。

視界がふさがれて危険を感じたのもつかの間、僕の唇にアヤの唇が重なる。

その口づけは何度も何度も繰り返され、そのたびに僕の頭はくらくらした。

「ずっと...こうしたかった」

アヤが唇を離して切なげにつぶやく。

「アヤ...嬉しいけど、危ないよ」

「じゃあ、こうすればちゃんと前見える？」

そう言ってアヤは頭を斜めにして、自らの頭で僕の視界をふさぐことの内容にする。

そして、口づけの再開。

「誰かに見られちゃうよ」そう言いながらも、僕もアヤの口づけに応じる。「いいの？」

「見られても、どうせ二度と会わないら？」

おかしそうに悪戯っぽく笑うアヤ。

そんなアヤがいとおしくて、僕からも口づけの応戦。

その時、僕の意識はぐっちゃぐちゃだったんだ。

危ないのはわかっていた。

だって降りやまない雪の中、運転もしていたんだからね。

視界では何とか道路をとらえていたけども、結構ハラハラしながらハンドルを握っていたんだよ。

でも...、すごくうれしかった。

キミにどれだけ想われているのか、わかった気がする。

嬉しすぎて、アクセルを思いっきり踏み込んでしまいたい気持ちを抑えるのに必死だったんだ

「やっと着いたね」疲れ切った声を上げながら、アヤはベッドに座り込んだ。「今日もすごい距離走ったねー」

「ゴメンな、遅くまで」

この部屋のダブルベッドは思ったよりも広く、ふたりで両手を広げても十分な広さがあるように思える。

僕は自分のキャリーバッグを部屋の隅に据えると、カーテンを開けてみた。

丁度JR千歳駅のそばにこのホテルはあるらしく、眼下には駅前の明るい街並みが見下ろせる。

この街が、今回の僕たち最後の街になる。

そう思うと感慨深い。

「何見てるの？」

いつまでもひとりで窓の外を眺めていると、アヤも僕の隣に立った。

「今日はお疲れ様」

僕はアヤの肩を抱き寄せる。

するとアヤも従って僕にぴったりと身を寄せた。

「コウジの方こそ、運転お疲れ様だね」

「大丈夫だよ」一層力を込める。「アヤがずっと隣にいてくれたからね」

「うん」

僕はふと腕時計を見た。

時刻はすでに十一時を回っている。

「もうすぐ今日が終わるね」アヤも僕の時計を覗き込んだ。「コウジといると時間があつという間。ホントに早く過ぎちゃう」

それは僕も同感で、アヤといると一日がいつもの半分ほどの時間しかないようだった。

そしてそれは、残酷なまでにアヤとの別れを加速する。

「もう...一日も一緒にいけないんだな」

僕が思わずそうつぶやくと、アヤはいきなり僕から体を離れたかと思うと僕の頬を両手でつまんだ。

「おバカ」

「な、何で」

「そんなさみしいこと言わないの！」そう言葉を荒げて言ったかと思うと、アヤはすぐにいつものふんわりとした笑顔に戻る。「あと何時間かは一緒にいられるでしょ」

「そうだね」

新千歳空港でアヤを出迎えた四日前。

二人とも少しでも早く、長く会いたかったから、僕が新千歳空港まで車で迎えに行った。

そうすると決まるまでは、思えば紆余曲折あった。

初めはアヤが釧路まで来る予定だった。平日だと僕が仕事があるために、アヤは新千歳空港から特急電車に乗って釧路まで来て、彼女のみ釧路市内のホテルで一泊してから会う予定だったのだ。

それに、釧路には僕の妻もいる。

いろいろと対策を練らなくてはならなかった。

それでも、釧路駅のどのあたりでアヤを迎える、だとか、迎えたらアヤだけがどこのホテルに泊まる、などの話で盛り上がった。

計画を練るだけでも、「その日」が早く来るような気がしたのだ。

僕は入念な計画を立てて、待ちきれずに何度も釧路駅に行ってはひとりでアヤを迎えるシミュレーションをした。

しかしそれでは、アヤがせっかく釧路という手の届くところにいるのにもかかわらず、一緒にいられる時間が一日減ってしまう。

そこで日を変えて、僕がある程度休みを取れる冬休みの期間に合わせてアヤが新千歳空港まで来ることになったのだ。

ただ、その計画をふたりで立てていたのは、年末。

年末から年始にかけて、と言えば所帯持ちならばどうしても避けることのできないことがある。

そう、クリスマスに正月だ。

僕と妻はふたりとも地元から遠く離れているために実家めぐりなどは暗黙の了解で免除されていた。しかしアヤはそうはいかなかった。

アヤと夫は同じ地元で出会い、結婚し、地元に住んでいる。ましてアヤは「長男の嫁」だった。年末年始は互いの実家にあいさつ回りをしなくてはならなかったし、お互いの実家に宿泊しなければならなかった。

その間、僕とアヤは一切の連絡を絶つ。絶たなければならない。

わかってはいるものの、アヤの想いを信じてはいたものの、その間僕は不安に押し潰されそうだった。

このまま連絡が取れなくなったらどうしよう。

クリスマス、そこで夫との間に何かあったら...

家族と触れ合ううちに心変わりしてしまったら。

長男の嫁であるがゆえに、「早く子どもを」なんてよく言われていたみたいだし...

ようやくアヤから連絡が入ったのは、アヤが北海道まで来る前日だった。

「連絡できなくて寂しかった」そんなアヤのか細い声が僕の心をかき乱した。「アヤと連絡でき

ない間に奥さんと「浮気、してない？」

「してないよ」僕もそれまでの寂しさを全てぶつけるように言った。「アヤがいるのに...できるわけない。このまま連絡来なかったらどうしよう、って本気で不安だった」

「そんなことするわけないよ」僕に呼応するようにアヤも強く言った。「まだ会ったこともないけど、コウジがいない毎日なんて考えられない」

アヤが北海道に来るその日。つまりは四日前だ。

はやる気持ちを抑えきれず、アヤの乗る飛行機がむこうを飛び立つ前に僕はすでに新千歳空港に到着していた。

そろそろアヤも飛行機に乗ったころかな、なんて考えながらも一切心は落ち着かず、車の中で携帯電話をいじくっていたその時、アヤからの電話着信があった。

それはそれは驚いたものだった。

事前の打ち合わせでは、アヤは夫に空港まで送ってもらっているはず。

ということは、僕に電話はおろかメールもできないはずだったのに。

何はともあれ、僕は電話にでる。

「どうした？」

「今ね、空港なんだけど」携帯電話の向こうのアヤの声は、まるで内緒話でもするようにひそひそ声だった。「トイレに行く、って言って、今女子トイレの中なんだ」

「そうなんだ」つられて僕も小さな声になる。「大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないよー」

今にも泣きそうな声でアヤが言うものだから、僕はあわてた。

何かトラブルでもあったのか、それとも飛行機が飛ばないのか。

「飛行機に乗る緊張と、コウジに会う緊張で吐きそう...」

僕はひとり、車の中でずっこける。

「大丈夫だよ、飛行機は世界一安全な乗り物だから」

「そんなこと言ったってー」

「それに、僕はもう新千歳空港にいるよ。両手広げて待ってるから」

「え？」今度はアヤが驚いていた。「もう着いたの？」

「うん、待ちきれなくてさっさと運転してたら着いちゃった」

「ええー、どうしよう...」

「どうしようって...」いつもの悪戯心が目を覚ます。「来るのやめる？」

「やめないっ！行くっ！」いつもの調子でアヤはそう返したが、すぐに少し落胆したような口調に変わる。「それとも、会うの嫌になっちゃった？」

「そんなわけないよ、だからこんなにも早くに新千歳についたんだから」

「ばっきやろー、これ以上不安にさせるなよお」

今にも泣きそうな声でアヤが言う。

「ごめんごめん。でも、あと数時間でそばに来てくれるんだね」

「そうだよ、アヤにあえるの嬉しい？」

「もちろん！」

「よかった…。旦那さんに怪しまれちゃアレだから、そろそろトイレ出て飛行機に乗るね」

「わかった、待ってるよ」

「うん、じゃあ `あとで、」

そうして、アヤと僕とは初めての「出会い」を果たしたのだった。

たった四日前のことなのに、ずいぶん遠い昔のような気がする。逆にこれからもこうしてアヤと毎日ずっと一緒にいられるような錯覚に陥っていた。

そんなアヤとも、明日再び離れ離れになる。

僕の頬をつまんでいたアヤの両手を離し、握った。

「次に会えるのはいつになるかな」

「そうだねー」アヤはじっと僕の間を見つめ返しながら言う。「次はコウジにアヤの街に来てほしいな」

「アヤの街か、行ってみたいよ」

「ぜひ」

「でも、そうなると夏休み頃になるかな…。まとまって休みが取れるのもその頃じゃないと」

「そっか…」笑顔のような泣き顔のような、複雑なまなざしを向けるアヤ。「じゃあ、半年後くらいになっちゃうね」

「うん…ごめんね」

「いいよ、こんなふたりが `会える、だけでも良しとしなきゃ」

「アヤ」

僕はそっとアヤを抱き寄せた。

優しく、まるで壊れ物を包み込むように。

その瞬間、鼻の奥がツンと痛む。

「僕と歩いた雪の、雪鳴りの音を忘れないで。一緒に見た雪を忘れないで」

「ホントにおバカだなー」そんな僕の頭をアヤはそっと撫でる。「もう二度と会えないみたいなこと言わないで？」

部屋に備え付けられているワーキングデスクの上には、ふたつのコンセントにそれぞれ充電器でつながれている携帯電話が並んでいる。

一つはiPhone、もう一つはドコモの携帯。

僕のそれは無造作に置いたのだが、意識してか無意識か、アヤが自分のiPhoneを充電器につないだ時に二つをきちんと並べて置いたのだった。

半年後、なんて言ったものの、次にこうして二つの携帯電話が出会うのはいつのことだろう。

いや、この二つの携帯電話が並ぶことはもうないかもしれない。

僕は早ければ明日、携帯電話をアヤと同じiPhoneに変えるのだから。

僕たちを今まで繋ぎ止めてくれていた携帯電話が僕たちとは違い、二度と出会うことはないと考え、それはそれで感慨深い。

また、漠然と「半年」という時間で表現されたものの、はっきりと日付が確定しているわけではない。それが僕に一抔の不安を残した。

「もう寝ようか」時刻はすでに午前三時を回っていた。「明日も早いんだ」

「そうだね、寝ちゃうのがちよっぴりもったいないけどー」

あれから僕たちはふたりでお風呂に入った。

このホテルはビジネスホテルには珍しくユニットバスではなく、ふたりでも十分にゆったりと入浴することができた。

思えば今回の旅で初めてのことだ。

そして今回の旅では最後のことでもある。

お風呂上りのふたりは備え付けのバスローブ姿であったのだが、今ではベッドの中でお互いに何も着ていない。

「いろんなところに行ったね」アヤが僕の方に体ごと向けて笑う。「たくさん連れて行ってくれてありがとう」

「うん」僕はアヤの髪を撫でた。「こちらこそ来てくれてありがとう、だよ。それに、もっともっといろんなところに連れて行ってあげたい。僕が大好きになった北海道のいろんなところに」

「アヤはそんなにたくさん来れないかもだけど、楽しみにしてるね」

僕はアヤの頭の下に左腕を差し込んだ。

アヤは素直に従い、僕に腕枕される。

「次はアヤの街のいろんなところに連れて行って」

「うん」

「楽しみだけど、半年後か」

僕はできるだけ重い雰囲気を作らないように、軽い口調で言ったつもりだった。

半年後、つまり一年の半分であるが、それが途方もない時間だということは知っている。

だからこそ、その「途方もなさ」を感じさせないように。

半年後なんてすぐだ、というつもりで。

「そうだね」

ふと笑ったかと思うと、アヤは笑顔のまま涙を一筋こぼした。

それは見る見るうちに溢れ出してくる。

「あ、あれ?...」アヤは両手で目じりを抑える。「なんで？」

そして声を上げて、まるで子どもの様に泣きじゃくり始めた。

「え、笑顔でいようと思ったのに...最後の夜くらい、ふたりで笑顔でいようと思ったのに！」

なんて綺麗な涙なんだろう。

誰かのために流すアヤの涙が、こんなにも綺麗だなんて。

そしてそれは、僕に向けられている。

自然と僕の頬にも熱いものが伝わるのを感じた。

「泣けば...いいんじゃないかな？」嗚咽交じりに僕も言う。「素直なアヤでいてくれて...いいんだよ...」

「コウジ...コウジ！」

アヤが涙でぐしゃぐしゃになった顔を、僕の胸に押し付けた。

「何？」

僕も負けじと、強く、強く抱きしめる。

「半年なんて...長すぎるよお」

「でも...でも、待っててな。次は必ず僕が会いに行くから」

「もっと傍にいたかった、傍にいてあげたかった」

「僕もだよ。ずっと傍にいたい...」僕の胸は、アヤの涙でじっとり濡れていた。「どうして一緒にいられないんだろな...もっと早く、お互い結婚する前に出会いたかった」

「うん...うん！」

止めようとしても止められない涙を、僕もアヤの髪に浸透させるようにアヤの頭をかき抱く。

「ゴメンね、僕の方こそ、男のくせに泣き虫で」

「ううん」アヤが僕の胸から顔をあげた。そして上目づかいで言う。「アヤ、こういう時の男の人の涙って嫌いじゃないよ」

「...そう？」

意外だった。

「うん」涙で真っ赤になった瞳のままでアヤは言った。「ましてやコウジの涙なら。だって、それだけ...泣いちゃうくらいアヤのこと好きでいてくれてるんだ、って実感する」

そしていつものふんわり笑顔。

ダメだよ、いまこのタイミングでそんな顔されたら。

明日にはこの笑顔が手が届かないところに帰ってしまう。どんなにアヤが泣いていても、その頭をなでてやることも、抱きしめてやることも、手を握ることもできなくなる。

そう思うと、一層涙があふれ出してきた。

自分でも、ここまで泣けてくるのかと驚くくらいに。

「えへへ...コウジの泣き虫」アヤが僕の髪をくしゃくしゃに撫でる。「ホントに大好き。愛してる」

「僕もだよ...？」

「知ってる」そして優しいキス。「ありがとう、こんなアヤのこと、いっぱい好きになってくれて」

遠距離恋愛。

僕はそう呼んでいたけど、こんなにも辛いものだななんて思いもしなかったんだ。

それが単なる遠距離恋愛じゃないのなら、なおさらだ。

四日前は、手が届くところにキミがいることが信じられなかったのに、今では、キミが手が届かないところに帰ってしまうことが信じられなくて。

こんなにも傍にいるのに。

こんなにも愛しているのに。

10

およそ一か月半前のことだ。

僕はたまたま立ち寄った大手家電量販店でデータ通信端末を購入した。それはパソコンのUSBに挿入するだけでインターネットにつながることができるという代物で、当時自分のパソコンを持ってはいたもののインターネットに接続していなかった僕にとっては夢の道具に思えた。

これで自分で作曲した曲をネットで公開できるぞ。

動画投稿サイトに公開しようか。

あ、はやりのブログなんて解説するのもいいかも。

端末を購入して、家に帰るまで気分はウキウキしていたのを覚えている。

帰宅すると、僕はさっそく端末をパソコンに接続して、とあるサイトに登録した。

そのサイトは曲を作る者やイラストを描く者、そして動画を編集する者などが集まり、単に自分の作品を公開するだけではなく、お互いの得意分野を生かして協力して作品作りができるという所だった。

僕はさっそくそれまでに作った曲を投稿し、反応をうかがう。

いろんな反応があり、それだけでも楽しかったのだが、いつしか欲を出すようになる。

———自分はイラストを描けないので、描ける人を募って自分の曲を中心とした動画が作りたい。———

そこでそのサイトの中にある「コラボ活動」のページに一曲アップロードして、イラストを描いてくれる人を募集した。

その曲は、時期的にもクリスマスが近かったので、歌詞の主人公の女の子がクリスマス前に意中の男の子に告白し、楽しくもちょっぴり恥ずかしいクリスマスを過ごす、といった曲だ。

反応はすぐにあり、何人か応募してくれてきた。

ほとんどが中高生くらいの若い子ばかりだったのだが、その中の一人に、僕と歳が近い女性がいた。

彼女とはサイト内において、イラストについての打ち合わせを頻繁にしているうちに他愛もない会話もするようになった。

それこそ、今日は何をして一日過ごしたとか、どこにでかけた、など。

そして彼女は、少し前に開設した僕のブログも覗いてくれるようになる。

仲を深めていくのに、そう時間はかからなかった。

ただ、彼女と僕はサイト内で知り合ったころには、すでにお互い結婚していることを明かしていたので、それ以上の関係にはならないだろうと思っていた。

しかしある時、彼女から提案があった。

「チャットしよう。その方がたくさん話せるし」

そのころの僕は、チャットについてあまりいいイメージを持っていなかったことと、やり方がわからないこと、そして自分も相手も妻や夫がいる身なので、丁重に断った。

それから携帯で連絡を取り合いたい、との提案もあったがそれも断った。

すると今度は「パソコンのメールなら大丈夫？」と彼女の方から聞いてきた。

初めは迷ったが、パソコンならそんなに問題ないだろうと思い、承諾する。作品作りをしていくうえで、パソコンのメールでやり取りできると便利だと思ったから、というのもある。

しかし、一人の女性として彼女のことを気にしていなかったか、と言えば嘘になる。

いつしか、自分の方から彼女に携帯電話の連絡先を聞いていた。

「びっくりしたよ」僕は車の中で電話の向こうに話しかけた。「アヤって、すっごい美人さんだったんだね」

携帯電話にイヤホンマイクを挿し、ハンズフリー機能で話しているので、今僕の手の中には彼女の写メが写っていた。

「もしかして、写真見ながら話してる？」

「うん」

「恥ずかしいっ」彼女はあわてた。「プリクラ写真なんて送るんじゃないよー。実物の五割増しくらいだからね」

「僕の方こそ、イケメンでなくてごめんね」

「アヤ、イケメン嫌ーい。イケメンってなんだかチャラそうで…。でもその点安心した。コウジってなんだかくまさんみたいで可愛い」

「その点安心した、ってのがちょっと気になるけど…」

「気にしなーい」そう言ってるころ笑う彼女。「でも、これで会ったときにすぐに誰がコウジだかわかるから良かった」

「そうだね」僕は空っぽの助手席を見つめる。「あと二週間でこの助手席にアヤが座ってくれるんだね」

「そうだよー」嬉しそうに笑ったかと思うと、声のトーンを急に下げる彼女。「それまで奥さん乗せちゃだめだよ」

「乗せないよ」僕も真剣に答えた。「あいつと車に乗ってどこかに出かけるなんてしばらくしてないからね」
「ならよし」

明け方近くになって、ようやく眠りに落ちたアヤの手を握りながら、そんなことを思い出していた。

たった一か月半ほどの時間の中でいろんなことがあった。

まさかこんなに愛しいと思える人に出会えるなんて思ってもいなかったし、その人がこうして隣で眠ってくれるだなんて。

でもそれも今回で一度終わり。

僕はひとり、ベッドの中で再び泣いた。

すると眠っているはずのアヤが僕を引き寄せる。

本当は起きてるんじゃないか。

そう思ったが、安心しきったその寝顔は完全に夢の中である。

行くなよ。

帰るなよ。

朝は毎日平等にやってくる。

どれだけ夜が明けなければいいと願っても、残酷なほどに。

そもそも僕は朝が苦手な方で、今朝は特にそう願わずにはいられなかった。

夜通しタイムリミットまで速度を変えずに時刻を刻む時計と、アヤの寝顔を何度も交互に眺めていた。

「そろそろ起きなきゃ」

あれからほとんど眠ることができなかった僕は、隣のアヤを揺り起こす。

アヤが乗る予定の飛行機が飛び立つまで、あとおよそ二時間。

「...うん」アヤものっそりと起き出す。「うー、まぶたが腫れぼったい...」

「確かに」僕はアヤのまぶたをそっと撫でながら言った。「たくさん泣いてたからね」

「誰かさんにたくさん泣かされたからねー」

そう言って悪戯っぽく微笑むアヤ。

「それはお互い様」

僕はアヤのまぶたを撫でていた手を、そのままアヤの頭に回してきゅっと抱きしめた。

なぜだろう、アヤと一緒にいられるタイムリミットはあと約二時間とわかっているのに、こうしてアヤと話をしていると実感が薄れていく。

ずっとこうしてアヤの声を直接聞いていられるような、アヤの温もりを全身で感じていられるような、そんな気がした。

「ねえコウジ」僕の胸の中でアヤがつぶやく。「アヤのこと...忘れちゃいやだよ？」

「ばっきやろー」アヤの口癖をまねて僕は答えた。「忘れるわけないし、忘れられるわけないよ」

「ありがと...」

「それに」アヤの柔らかい髪に口づけしながら続ける。「どこの誰だっけ、二度と会えないみたいな言い方しないで、って言ったのは」

「そうだったね」僕の胸の中でくっくくと可笑しそうにアヤが笑う。「次はコウジが会いに来てくれるんだもんねー」

「そうだよ」

そう言って、僕はアヤの顔を胸から離して柔らかな唇にそっと口づけした。

「もう一回」

アヤが唇を突き出す。

僕はそれに応えた。

「もう一回」

それでもやめないアヤ。

僕は何度も何度も応えた。

キミの唇はいつもなんだか甘かった。

キモチ的なものもあるのだろうが、味覚的な意味でも甘い。

砂糖を舐めたような攻撃的な甘さではなく、子どものころに吸った花の蜜のような懐かしくもある甘さだ。

僕はキミとのキスが大好きで、口づけするたびに頭の芯がしびれるような感覚に陥る。

だから何度も僕からもキスをした。

「コウジといると、リップクリームの減りが速い」

そう言ってキミは笑っていた。

確かにキミは、釧路のコンビニでリップを一本追加で買っていたね。

2

何気なくテレビを見ている時。

本を読んでいる時。

一人でいる時。

アヤのことをまだ知らなかった時。

そして、新千歳空港でアヤを待っている時。

そんな「時」の二時間は緩慢に流れていくのに、アヤと一緒にいる「時」のそれは時間が流れていくのも忘れるほどに、そして驚くほど速く過ぎていく。

「もっとこうしてくっついていたいけど」僕から体を離しながらアヤが残念そうに言う。「もうそろそろ支度しないと」

僕は時計を見た。

まだ十分間ほどしか経っていないと思っていた時間が、すでに三十分を過ぎている。

残り、一時間半。

「もう...こんな時間か」

昨晚、ホテルのフロントに問い合わせたところ、ここから新千歳空港までは車で十分から十五分程度で着くという。

だからと言ってあまりのんびりはしてられない。

万が一にも搭乗手続きの時間に遅れてしまって、アヤが飛行機に乗れないなんてことはあってはならない。

「アヤはメイクとかしなくちゃならないもんね」

「うん、ごめんね」心底申し訳なさそうにアヤは言う。「でも、今からじゃがつつりメイクはできないから眉毛描くだけにしとく」

「それで大丈夫なの？」

するとアヤは自嘲気味に言った。

「誰もアヤの顔なんて見ないら？」

「僕が見るよ」

「コウジにはすっぴんも何もかも見せてるから」

「それもそうか」

つられて僕も笑う。

なんでもない朝の風景。

これがいつも生活している部屋で、いつも隣にいられる者同士なら。

そうであれば、あたかもこれからふたりでちょっとお出かけ、のような会話だ。

ふたりでどこかに出かけて、休日を満喫して再び同じ部屋に帰ってくる。そんな日常の朝。

しかし僕たちは今日この部屋を出ると、ここには帰ってこない。

僕はカーテンを開いた。

どんよりとした雪雲がいまだに空を覆ってはいるが、朝の柔らかな日差しが部屋中を優しく包み込む。

雪はいつの間にかやんでいた。

眼下に見える千歳の街は昨夜とは打って変わってきらびやかな雰囲気は息をひそめ、いまだに目覚めを拒否しているようだった。

しかしそんな雰囲気をよそに、街を行き交うトラックはすでに働いていた。

航空貨物と書かれたコンテナを背負ったトラックが多いのは、新千歳空港が近いからなのだろう。

この中のどれか一つくらいは、アヤと同じ街へと向かうのだろうか。

「コウジ」不意にアヤの声が僕の背中に届く。「何考えてるの？」

振り返ると、アヤは鏡の前でメイク道具を手に持ったまま不安げに僕を見上げていた。

「たいしたことじゃないよ」僕はアヤの背中を抱く。「空港行きのトラックがたくさんいてさ。あの中の荷物のどれか一つくらいはアヤの街まで行くのかな、なんて考えてた」

「北海道からの荷物ねー」すると突然アヤはおかしそうに笑い出した。「コウジと知り合ってから、スーパーとかで買い物してるとついつい『北海道産、って言葉に目がいつっちゃうんだ」

「そう言えば前にも言ってたね。テレビで釧路川のシシヤモ漁が映ってた、とか」

「そうそう！」

「びっくりしたよ、そっちでも釧路川が映るだなんて。しかも僕の家そばだったし」

「ねー」相槌を打ちながら懐かしそうに目を閉じるアヤ。「アヤ、ホントに釧路まで行ったんだね」

「そうだよ」僕はアヤの頬に軽くキスをして、ぽんっとアヤの肩をたたく。「ほら、早く支度しないと」

改めて考えると、やっぱりすごいことなんだね。

時代が時代なら僕たちは決して出会うことはなかった。

きっとお互いの存在を一度たりとて認識することなく、それぞれの生活を営み、それぞれの人生を終えていたことだろう。

でも、僕たちは出会えた。

キミと出会えたことで、キミの住む街は僕にとって身近なものとなったんだ。

だって、それまでは特に気にも留めていなかったのだから。

お茶なんて京都産が最高だと思っていたし、魚介も北海道が一番だと思っていたしね。方言も知らなかった。

それが今じゃ地元や北海道に次いで一番詳しくなったかも。

でも、やっぱり遠い。

せめて北海道の物や釧路の物が、キミの元にたくさん届くように。

僕からキミに何かを送ることはできないけど、せめてこの街を行き交うトラックたち、そして飛行機なんかキミに届けてくれるといいな。

そんなことを考えていたんだよ。

3

「ごめんね、時間かかっちゃって」

アヤが慌ててコートに袖を通す。

僕はすでにいつでも出られるように準備はできていた。

「大丈夫だから落ち着いて」

「大丈夫じゃないよお」今にも泣きだしそうな声のアヤ。「朝ごはんゆっくり食べたかった！」

「仕方ないね、できるだけ急いで食べよう」

残り時間はおよそ一時間となっていた。

新千歳空港まで車ですぐとは言え、チェックインや手荷物預かりなどのことを考えると、あまりゆっくりはしてられない。

最後に、五日前に来た時と同じブーツを履いたアヤはぐるりと部屋を見渡す。

「忘れ物は...ないね」

「さっき確認したよ」

「そっか」

そう言って、アヤはもう一度部屋を見渡した。

そしてふっとため息をひとつつく。

「どうしたの？」

僕はアヤの背中に話しかける。

「ううん」背中を僕に向けたまま、アヤは小さく頭を振った。「もう、ここには帰ってこないんだな、って思ったらなんだか寂しくなっちゃって」

「そうだね」僕もアヤに共感する。「一晩だけだったけど、思い出の部屋だ」

そう、今回の旅でいくつかの宿に泊まったが、僕にとってはこの部屋がきっと一番思い出深い部屋になる。

初めて一緒に入ったお風呂もこの部屋だし、初めてアヤの本気の涙を見たのもこの部屋だ。そして、今回最後の夜を過ごしたという意味でも。

初めてのアヤとの「出会い」を締めくくる、記念の部屋なのだ。

きっとアヤも同じことを考えているのだろう。

アヤはもう一度大きくため息をつくときゃりーバックを引き、僕に向き直る。

「行こう、遅れちゃう」

このホテルは幸いにも宿泊費が前払い制だったので、すでに清算は済ませてあった。

したがって簡単なチェックアウトの確認だけで手続きは終わった。

すぐに僕とアヤは朝食が用意されているレストランへと向かう。

二つのキャリーバッグを傍に並べて、僕とアヤはテーブルについた。

「最後に一緒に食べるごはんがこんなにあわただしいなんて、ちょっと残念」

「そうだね」そう言いながら僕はさっそくスクランブルエッグをかきこむ。「ほら、早く食べちゃわないと」

「なんだか食欲なくて」そう言ってお腹をさするアヤ。「アヤの分も食べていいよ」

「どうしたの、アヤらしくない」

「だって」アヤは軽く頬を膨らませた。「朝ごはん、そんなに急いで食べれないんだもん」

大急ぎで朝食を済ませた僕とアヤは、駐車場に止めてある僕の車に向かった。

シルバーのスポーツワゴンタイプのその車体は、連日の長距離ドライブでうっすら汚れている。車輪が跳ね上げた泥まじりの雪が車体側面に走った距離と比例して付着するのだ。

雪深い地方ではごく当たり前のことで、忌々しいことでもあった。

しかしこの汚れの分だけアヤと一緒にいたこと、アヤとたくさんこの車でドライブしたことを思うと、なんだか今は大切なものに思える。

アヤと一緒にいた証なのだ。

「だいぶ汚れちゃったね、車」

アヤがそっと助手席のドアを撫でながら言った。

「そうだね」僕はトランクを開けながら応える。「でも多分しばらく洗車できないな」

「どうして？」

「だってアヤと一緒にドライブした証だよ」アヤのキャリーバッグをトランクに詰め込む。「洗えるわけない」

「でもいつかはちゃんと洗いなよー、車が可哀そう」

キミは僕の車にたくさんの物を残していった。
持ってきたものの使うことのなかったカイロ。
ふたりで買ったけど食べきれずに残したグミ。
助手席のドアにシートベルトの金具をはさんじゃってキミが付けた、僕がこの車に乗り換えて初めての傷痕。

そして思い出。

キミと初めて会ったあの日以来、一度も助手席に妻は乗せていない。
だってこの五日間でこの助手席はキミの指定席になったのだから。

4

新千歳空港へは、ホテルのフロントの言うとおりに約十分で着いた。
しかしあまりのんびりしている時間はない。
車を降り、僕はアヤのキャリーバッグを引いて駐車場と空港ビルへと昇るエスカレーターを
目指した。

心なしかアヤのキャリーバッグは来た時よりも重くなっている気がする。

いや、実際に重くなっているのだろう。

家への土産物も、ふたりで出かけた先でいくつか買って、何より思い出の重さがある。
いざエスカレーターに乗ろうとしたその時、アヤがふと立ち止まる。

「ここって」

「ん？」

アヤの声に気づいて僕も立ち止まり、アヤを振り返った。

するとアヤはおかしそうに笑いながら言った。

「アヤが花畑牧場のソフトクリームを溶かしてこぼした所だよね」

「そうそう、会っていきなりのおもしろエピソード」

「また」すると、寂しそうな声に変わるアヤ。「戻ってきちゃったんだね」

そう、この新千歳空港で今回のふたりの旅は始まり、そしてこれからここで終わりを迎えよう
としている。

僕は空いた方の手でアヤの手を握った。

「帰っちゃやだなあ」

「アヤだって帰りたくないよお...」

「もっと、いろんなところに連れて行ってあげたかったな」

「うん...行きたかった」

「次はたくさん、アヤの地元を案内して？」

「うん...いろいろ考えとくね」

「さて」僕はアヤの髪をくしゃっと一撫でした。「行こう」

搭乗手続きを終え、キャリーバッグを預けた僕たちは一気に身軽になった。

アヤが保安検査を受けなければならないタイムリミットまで、あとおよそ十分。

それまでに僕はどうしてもアヤを連れて行きたいところがあった。

「ねえ、どこに行くの？」

アヤは不思議そうな顔でついてくる。

「着いたらわかるよ」

おそらくほとんどの空港がそうであるように、新千歳空港は二階が出発ロビーになっていて、一階に到着ロビーがある。

僕はアヤの手を引いてエスカレーターに乗り、一階を目指した。

一階に到着して少し歩くと、とある売店が目に入ってくる。

「ここって…」

アヤも気付いたようだ。

「そう、アヤが靴の滑り止めを買ったところだよ」

「うわー、ほんの五日前のことなのになんだか懐かしい」

アヤが目を輝かせながら早足に歩く。

「僕はあの時のアヤの態度から、僕にがっかりしたんじゃないか、って思った」

「まだ言う？」可笑しそうに笑いながら振り返るアヤ。「だから緊張してたんだって」

「一生言うから」そんなアヤに対して悪戯っぽく返す。「言い続けてやる」

「今、一生って言った？」にやりと笑うアヤ。「言ったよね」

「言ったよ」

その僕の言葉を聞いて嬉しそうにアヤが笑う。

「それはプロポーズとして受け取っていいんですかー？」

「どう受け取るかは任せるよ」

「へー」心なしか足取りがさらに軽くなるアヤ。「じゃあ任せてもらうことにしよう」

「うん、よろしく」

そう言って、僕はアヤの手を引き方向を変える。

売店を背にしてする形になると、目の前にあるのは飛行機に乗ってきた人たちが吐き出される、とある到着口だ。

早い時間帯もあつてかガラスの向こうの中は閑散としていて、数人いる係員しか見えない。

「僕はね」アヤの手を強く握る。「ここでアヤが来るのをこうして待ってたんだよ」

「知ってる」アヤも強く握り返す。「見えてたもん」

「アヤなら飛行機を降りたときから携帯で連絡してくれると思ってたから、必死でiPhoneを持ってる女の人を探したんだ」

アヤは黙って聞いている。

「そしたらやっぱりすぐに電話してくれたね。だから話しながら必死で探した。でもすぐには姿が見えなかったよね」

「だって…恥ずかしかったから」

「うん。そしたら柱の陰に隠れてるって言うんだから」僕はその時のアヤを思い出して、思わず嘔き出した。「で、顔見せて、って言ったら、一瞬だけひよって顔出したね」

「やめて、恥ずかしい」

そう言ってアヤは空いた手で顔を隠していやいやをする。

「あの時のアヤ、もぐら叩きみたいでホントに可愛かった」

僕は構わず続けた。

今を逃すと、この心の中にある思いを直接アヤに話すことができるのは半年後になってしまう

。

「好きになるキモチって見た目だけじゃないけど、アヤは僕のどストライクだったよ。初めは顔も知らない姿も知らないで始まった恋だけど、アヤの姿を見た瞬間に改めてもう一回アヤに恋に落ちた。落とされたんだ」

「もー、ホントにアヤばっか！」アヤはつないだ手をぶんぶん振る。「でも嬉しい、そんな風に思ってくれて」

「アヤ」

僕は改めてアヤをまっすぐに見た。

アヤもその雰囲気を感じたのか、僕を正面に見つめ返す。

「この五日間、ホントに楽しかったよ。会いに来てくれてありがとう。アヤと実際に会って、ますます好きになった。毎日アヤのことを好きになったよ」

「アヤも勇気を出して会いに来てよかったよ。アヤも楽しかった。コウジのこと思ってた以上の人だったよ」

その時、館内放送が響き渡る。

それはアヤが乗る飛行機の保安検査の最終案内であった。

タイムリミットだ。

僕とアヤは再び二階へと向かうエスカレーターに乗った。

ここを昇りきってしまうと、保安検査場は目の前だ。保安検査場に入ってしまうと、目の前にアヤがいるのに一切触れることすらできなくなってしまう。

エスカレーターの半分ほどまで上がった時、僕はアヤにお願いした。

「キスさせて、最後のキス」

「う...恥ずかしいよ、誰かに見られちゃう」

あと五メートル。

「誰もいないよ」

「でも...」

あと三メートル。

僕はアヤの左頬にそっとキスした。

「うっひゃあ！」

そして僕たちはエスカレーターを昇り切った。

離れたくない。

返したくない。

またキミに触れることすらできないなんて...嫌だよ。

5

「富士山静岡空港へご出発のお客様の保安検査場はこちらになります」

アヤが係員の女性にいざなわれて、保安検査場に向かう。

僕たちが思っていた以上に時間は切迫していたようだ。

もしかしたらアヤが最後の搭乗客なのかもしれない。

僕は保安検査場のぎりぎりのところまでアヤと手を繋いで行った。

そしていよいよ検査場入口のゲート直前の所で、見送り客の限界まで来てしまう。

「コウジ...」アヤは手を離そうとしない。「体、大事にしてね」

「うん」

「あんまりタバコ吸いすぎちゃだめだよ」

「うん」

「釧路までの帰り道、アヤは隣にいてあげられないけど気をつけてね」

「ああ...」

「コウジ」はっと顔をあげると、アヤはムツとした顔で僕を見つめていた。「これで最後じゃないんだから、笑ってバイバイしよ？」

そう言ってからふんわり笑うアヤ。

しかしその目だけは今にも泣きそうだった。

「そう...だね」僕も笑う。「アヤ、元気でな」

「うん」

「アヤが乗る飛行機、見送ってから帰るから」

「え？」アヤはあわてて頭を振る。「そんな、いいよ。これから一人で長く運転しなくちゃならないのに」

「大丈夫だよ。携帯の機種変してから帰るんだから、そんなに時間は変わらないから」

「...そう？」申し訳なさそうに上目づかいで僕を見ると、すぐに嬉しそうに笑う。「じゃあ、お願いしようかな」

本当ならば、もうこの手は離さなくてはならない。

送り出さなくてはならない。

しかし、僕からはどうしてもできなかった。

「コウジ...」

「アヤ」

「コウジ...、もう行くね」

「ああ…」

アヤがそっと僕の手から自分の手を抜き取る。

その指先が離れる瞬間、もう一度アヤの手をつかみたくなる衝動を僕は必死で抑えた。

「行ってきます」

アヤは確かにそう言った。「帰る」や「またね」ではなく、「行ってきます」と。

「ホント鈍感」僕がその真意を測りかねていると、アヤが拗ねたように言う。「今のアヤとコウジがどんな形や関係であれ、アヤが帰りたい、って思うのはコウジの隣なんだよ？」

僕がハツとしていると、もう一度アヤは繰り返した。

「行ってきます」

今度は僕も迷わない。

「行ってらっしゃい」

そしてアヤは踵を返し、保安検査場へと入っていった。

アヤが金属探知機をくぐり、手荷物のエックス線検査を通過したのを見届けると、一気に実感がわいてくる。

今こんなに目の前にいるのに、もうこの手はアヤに届かない。

声を出せば届くであろう距離にいるのに、アヤに触れることはできない。

次にアヤの柔らかな手を握ることができるのは半年後。

胸の中に大きな石の塊でもつまったかのような閉塞感を感じた。これで二度と会えないわけじゃないのに、小さな絶望感が僕の体にじわりと広がっていく。

アヤはそんな僕の気を知ってか知らずか、もう一度僕の方を振り返り、小さく手を振った。

僕も何とか笑顔で手を振りかえす。

そしてアヤは出発ロビーの奥へと姿を消した。

僕はすぐに振り返り、保安検査場前を後にする。

そして早歩きで空港の三階へと向かった。

以前、新千歳空港に来た時に三階に展望デッキを見かけた記憶があったからだ。そこからなら、アヤが乗った飛行機が見えるはず。

飛行機が飛び立つまであと十分。

僕は急いで三階へ向かうエスカレーターを目指した。

エスカレーターに着いた僕は、まるで子どもが階段を駆け上がるかのようにエスカレーターを駆け上がった。

初めて会って、初めてキミとドライブをした五日前。

本当に初めて会った気がしなかった。

キミといると何もかもが満たされて、いつもの僕でいることができたんだ。

そんなだからかな、もうしばらくはキミと会うことができないなんて信じられなかった。

また少し時間が開けば、「トイレ行ってきた」くらいの軽い感じで、キミがひよっこり出てきてくれるような...そんな気さえしてたんだ。

6

しかし。

『冬季期間中、安全のために展望デッキ閉鎖』

無機質なフォントで書かれた看板が、展望デッキ入口の扉にぶら下がっていた。

一瞬目の前が真っ暗になった気がした。

これではアヤとの約束が果たせない...。

僕は弾かれたようにその場を後にする。

どこか、どこかにアヤの乗った飛行機が見えるところはないか。

僕は必死で探した。

そしてふと思い出す。

花畑牧場の喫茶スペース。そう言えばアヤとソフトクリームを食べたときに夜の滑走路の明かりが見えていた。

そこしかない。

僕は思わず駆け出す。

時間がある程度経ち、空港内には人出も増えてきていたので僕はその人々の間を縫うように走った。

途中、何度も誰かにぶつかりそうになる。

そんなこと、構わない。

アヤ...、アヤ...。...アヤ！

心の中で何度も名前を叫んだ。

ところが、だ。

不幸は不幸を呼ぶらしい。

花畑牧場は開店前で、その店の入り口には人間の侵入を拒むようにロープが張られている。

万策尽きた。

これ以上、滑走路を眺めることはできなかった。

駐車場に向かって歩いていった。

空港に入る際、アヤのキャリーバッグを持つ関係で自分の荷物は何も持ってきていない。飛行機に乗ることのない僕にとって、何も必要なかったというのもある。

ついさっきまで持っていた物の重みがない。

ついさっきまで隣にいてくれた人がいない。

ついさっきまで握っていた手がない。

それだけで僕の心は喪失感でいっぱいだった。

そしてそれを実感した瞬間、胸の奥がぎゅっとなまり、涙となって両目にたまり出す。鼻の奥も痛い。

だけど僕は必死でこらえた。

僕とすれ違った家族連れの子供が僕の顔を見て振り返った気がしたが、気にしていられなかった。

そしてターミナルビルを出ると、目の前には駐車場へと降りるエスカレーターがある。

このエスカレーターに乗るのは四回目だな...

そんなことを考えていた。

一回目はアヤを迎えに行くとき。

二回目はアヤを迎えて車に向かうとき。

三回目はついさっき。アヤを送るまえだ。

そして四回目。

こんなにもひとりって...さみしいもんだったかな。

エスカレーターを降りて車に向かう。

歩きながらターミナルビルをふと振り返って見た。

滑走路は巨大なターミナルビルをはさんで、この屋外駐車場の反対側にある。

当然滑走路はおろか、飛行機の機影すら臨むことはできない。

幸いにもエスカレーターのそばの駐車スペースを見つけて車を止めていたので、すぐに自分の車を見つけることができた。

丁度僕は助手席側に向かって歩いている。

当たり前なのだが、助手席には誰もいない。

空っぽだ。

ついさっきまで、そこにアヤがいたのに。

そんなことを考えながら運転席側に回り、開錠してドアに手をかけたその瞬間。

空全体をびりびりと震わせるような、低い轟音が辺りに響き渡る。

その轟音は次第に大きくなり、僕の体をも揺さぶり始めた。

僕は思わず時計を見る。

アヤが乗る飛行機の離陸予定時刻だった。

何度も飛行機に乗って地元と北海道を往復してきたのでわかる。このうなりは飛行機が滑走路の入り口に立ち、飛び立つために一気にエンジンをふかしている音だ。

僕は飛行機の姿も見えない空を見上げた。

相変わらずどんよりと曇っている。

そして轟音は爆音へと変わり、次第に離れていく。

この音とともに、アヤは空へと飛び立っているんだ。自分の街へと。

飛行機が地上にいる間なら、もしかするとキャンセルすればアヤは降りることができたかもしれない。しかし飛行機が一度浮かび上がってしまうとそれは絶対にはかなわない。

気が付けば、堪えきれずに僕は泣いていた。

もう、届かない。

半年後なんて、やはり遠すぎる。

僕は運転席に体を落ち着け、声を上げて泣いた。

「アヤ...！」

助手席を眺めるとやはり空っぽ。

ついさっきまでそこにアヤがいた気配だけが残されている。

あの時は泣いたな...

これほどまでに泣けるのか、と思うくらい。

キミがそばにいないということが、こんなにも辛いなんて会う前は考えたこともなかった。

こんなにも誰かのために泣いたことなんてなかったよ。

7

いつまでも泣いてなどいられない。

釧路に帰るまでにやらなくてはならないことが一つある。

そう、携帯電話の機種変更だ。できることならばアヤの飛行機が着陸するまでに済ませておきたい。

僕はエンジンをかけ、車を発進させる。

一人分の重さが減った車は相変わらず軽やかに走り出す。

千歳市内に戻った僕は、さっそく携帯電話も扱うディスカウントショップに入った。

そしてすぐにiPhoneを探し、店員に注文する。

確認してもらったところ、僕が今まで使っていたドコモの携帯電話は二年間継続契約中で、解約してiPhoneに変更するには違約金を払わなくてはならないらしい。

それは仕方ない。

僕はアヤが使っていたiPhoneの形状を思い出しながら、それが欲しい旨を店員に伝えた。

「それはきっと前の機種ですね」

「そうなんですか？」

「ええ、その背中が丸い形状のiPhoneはもう取り扱っていないんですよ」

「え？」

淡々と説明するその男性店員を思わず見つめた。

それではアヤとお揃いのiPhoneを持つことができない。

「今では最新機種のiPhone 4しかありませんが…」彼は僕の動揺を目ざとくも見抜いたらしい。「いかがしますか？」

僕は悩んだ。

アヤとおそろいの機種がやはり欲しい。

しかしそんなこと言っても無いものは無いだろう。

それにここでiPhoneを買わずに帰るとアヤとの約束を破ることになるし、何より昨日見せたアヤの「本気」に応えたことにならないだろう。

少なくともアヤは僕が応えたように思わないだろうし、僕自身納得しない。

それに通話料金の問題もある。

ソフトバンク同士になれば通話料金はほぼタダ同然になるし、そのサービス時間外でもiPhoneであればスカイプなどを使って無料で話すことができる。

僕は決心した。

結局、ドコモからソフトバンクへの移行や違約金支払いの手続き、その他もろもろ手間どってしまい、僕がiPhoneを手にするまでにかかった時間は一時間くらい。

受け取った紙袋を手に、ふと空を見上げる。

幾分か雲が薄くなった気がした。

今頃アヤが乗った飛行機はどのあたりを飛んでいるんだろう。

もう何百キロもアヤが遠くにいるなんて信じられなかった。

アヤと離れたことは実感していながらも、また明日にでもひょっこり顔を出してくれるんじゃないかと、そんな気がする。

それほどまでこの五日間の間にアヤの存在感は僕の中で大きくなっていった。

車の中でiPhoneのパッケージを開いて、僕は驚いた。

今まで持ってきた携帯電話のパッケージよりも小さいな、とは思っていたものの、中にはiPhone本体とイヤフォン、充電器とそれにつながるケーブルしか入っていなかった。

本来あるべき物が入っていない。

そう、取扱説明書が入っていないのだ。

昨夜のことだ。

小樽から千歳のホテルに入って一息つくと、僕はアヤのiPhoneにふと興味がわいた。

もともと新しい物好きというのもあったし、以前からiPhoneに少しは興味もあった。

「まず電源を入れると、ロック画面が出てくるの」

アヤは僕に嬉々として使用法を教えてくれた。僕がiPhoneを持つことを決心したことがやはり嬉しかったらしい。

僕自身もアヤと同じ携帯を持つことができるということが嬉しかった。

「それでね、この`ロック解除、っていうのを横にスライドさせると...」

アヤが教えてくれたことを思い出しながら、僕はiPhoneの電源を入れる。

ロックを解除すると、今まで使ってきたどの携帯電話とも共通しない画面が現れた。

僕はまずメール画面を見つけることに苦労した。

しかし、どうしても千歳を出る前にアヤにメールを送りたい。

アヤは飛行機の中だからおそらく電源を切っているだろう。すぐに僕からのメールを見ることはできない。

しかし、アヤのために買ったこのiPhoneから送る初めてのメールはアヤに送りたいかった。

初めてのiPhoneと格闘することおよそ三十分。

ようやく一通のメールをアヤに送ることができた。

きっとアヤは飛行機を降りたらすぐに気づく。

しかしアヤは空港まで夫が迎えに来る予定だと言っていた。すぐには返事は来ないだろう。

それでもかまわない。

アヤからの返事が入るまで、携帯が変わったことは誰にも言わないでおこう。仮に誰かが僕にメールを送ろうとして僕に届かないとわかった時点で、急ぎの用事なら電話に切り替えるだろう。

携帯電話事業者がソフトバンクに変わったことで、当然ドメインも何もかも変わったのでメールは今までのアドレスでは僕に届かない。

しかし電話番号は変えずに済んだので、電話着信ならば受け取ることができる。

初めて受け取るメールも、アヤからがいい。

さて、そろそろ釧路に向けて出発しなくてはならない。

時刻はすでに昼近くになっていた。

しかし燃料メーターを見てみると、釧路まで一気に走るには心もとない残量になっていたので、僕はひとまず近くでガソリンスタンドを探すことにした。

幸いにも少し車を走らせたところにセルフスタンドがあったので、僕は迷わず車をそこへ滑り込ませる。

セルフスタンドなので当然自分でガソリンを車に充填するのだが、まさにノズルを握って注入しているその時にiPhoneが震えだした。

空いている手で画面を見てみると、通話着信だ。

発信者は唯一登録してある名前。

「マキハラ アヤカ」

僕は思わず手に持ったiPhoneを落としそうになって慌てた。

メールなら何とかなるかもしれないが、電話なんてかかってくるはずがない。

現実が信じられない気持ちと、再びアヤの声が聞ける喜びとが混ざった不思議な気分で、アヤからの着信を繋いだ。

「もしもし、アヤ？」

「うん、アヤだよー」

たった二時間ほどしか離れていないのに、すでにその声は懐かしかった。

ついさっきまでは直接聞いていた声を久しぶりに電話越しに聞いた、というのもその懐かしさに拍車をかける。

「今どこにいるのさ」

「空港だよ。さっき飛行機が着いたの」 そう言ってアヤは嬉しそうな声で続けた。「メールありがとうね。アドレスがぐっちゃぐちゃで最初誰かわからなかったけど、中身見てコウジってわかったからすごく嬉しかったよ」

「よかった、わかってもらえて」

「ホントに早速iPhoneに変えてくれたんだね」

「もちろん。約束したし、早くアヤと揃えたかったから」そして僕は申し訳ない気持ちを込めて声のトーンを落とした。「でもゴメン。正真正銘のお揃いじゃなくて、僕のはiPhone 4なんだ。アヤと同じのはもう売ってないって」

「えー、いいなー。アヤのより新しいやつだら？」

「ゴメンな」

「いいですよーだ」 きっと電話の向こうでアヤは悪戯っぽいあの笑顔なのだろう。「でもホントに嬉しかったよ。ちゃんとしたアドレス設定する前にアヤに最初にメールくれたんでしょ？」

「もちろん」僕は給油ノズルを握ったまま胸を張った。「やっぱり初めてはアヤがいいからね。アヤがこうして電話くれたから、電話着信もアヤが初めてだよ」

「やったね！」アヤは声を弾ませる。「話変わるけど、今どこにいるの？」

「まだ千歳だよ。さっき携帯変えたばかりで、いま釧路に戻るためにガソリン入れてるところ」

「え！まだ千歳だったの？」驚きの声をあげるアヤ。そしてすぐに申し訳なさそうな声に変わる。「なんかゴメンね…。アヤは空港出たらもうすぐ家に着いちゃう」

「気にしないで」そんなアヤに思わず笑ってしまう。「早くおうちに帰ってゆっくりしな」

「なんだよー、そんなにアヤを早く帰したいんかー」

「そういうわけじゃないけど、アヤも慣れない飛行機の旅に疲れてるだろ？」

「疲れてないって言ったら嘘になるね」アヤもおかしそうに笑った。しかしすぐに再び申し訳なさそうな声に変わる。「それに、今あんまり長く話せないの。今はまだ到着ロビーにいて預けた荷物を待ってる状態なんだけど、その隙にまたトイレで話してるの。荷物が来ちゃったらすぐに出ていかないと旦那さんに怪しまれちゃう」

「それは…仕方ないね」

「うん、ゴメンね」

「いいんだ、気にすんな」

僕はできるだけ穏やかに言ったつもりだった。

そのことに不平不満を言ったって仕方ないことはわかっているし、言ったところでアヤの心の負担になることは明らかだ。

しかしアヤは不安に思っただろう。

「怒ってる…？」

「怒ってないよ、大丈夫だから」

「ホントに？」

「うん」アヤには見えていないことはわかっているのだが、思わず笑顔で言った。「ホントに」
「顔が見えないってさ」アヤがさみしそうに応える。「どんな顔して話してるかわからないから不安になるね…。変だね、顔も知らなかった時期があったのにね」

「そうだね」

僕にもアヤがどんな顔をして話しているかわからない。

離れているということはこういうことなのだ。

寂しそうにしている、アヤが不安を感じていても、自分の手で安心させてあげることができない。

自分の言葉と、アヤ自身の気持ちの切り替えに委ねなくてはならない部分が多すぎる。

「申し訳なかったんだけど」そう前置きして、僕はぼつりと話しだした。「結局アヤが乗った飛行機、見れなかったんだ。デッキが閉鎖されてて」

「やっぱりそうだったんだ」アヤはくすくす笑いながら答える。「アヤも飛行機の窓からすっごいコウジのこと探したんだけど、誰もいないからもしかして、って思ってたよ」

「で、あきらめて車に戻った時、ちょうどアヤが乗った飛行機が飛び立つ音だけが駐車場に聞こえて来て」僕はよほどのことを告白するかのように言葉を一度区切る。「その音で泣いた」

「また泣いちゃったの？ホントに泣き虫さんだね」

「ほっとけ」

「でもね…」何かをかみしめるようにしみじみ言うアヤ。「アヤもね、飛行機の中で泣いちゃ

った。飛行機が飛び立つ瞬間、ぶわっ、て。タオルで必死に隠したけど、隣のおじさんに見られてたかも」

「アヤも人のこと言えないね」

そうして、ふたりでどれだけ泣いたかという話題で盛り上がる。

思えば変な話だ。

「あ」アヤが急に声を上げた。「手荷物...来ちゃったみたい」

今日二回目のタイムリミットだ。

「じゃあ、もう `行く、ね」

その瞬間、先ほどの新千歳空港での別れがフラッシュバックする。

「うん、 `行って、らっしゃい。僕ももう釧路に `行く、から」

「運転、ホントに気をつけてね」

「ありがとう。釧路に着いたらまたメールするよ」

「わかった。じゃあまたあとでね、コウジ」

そして電話は切断された。

9

釧路での日々は、驚くほどに元通りであった。

違ったことと言えば、アヤと離れて釧路にもどってすぐ妻とディズニーランドに出かけたくらいだ。

本当は行きたくなかったのだが、アヤと知り合う三か月ほど前から予約を入れていたので仕方ない。ディズニーランド自体には興味はなかったが、会えることはなくとも少しでもアヤのそばに行くことができるという思いだけで僕は飛行機に乗った。

もちろん、そんなこと妻に感じ取られるわけにはいかない。

表面上、ディズニーランド楽しんでいるというフリをすることだけに意識を注いでいた。

その間も、少しでも妻が離れればアヤへの連絡は欠かさない。

日中、アヤの夫は仕事に出かけているはずなので、僕はともかくアヤはいつでも連絡が取れる状態にあったから。

しかしアヤと話している時に妻がそばまで来ていたことに気づかなかったあの時だけは本当に焦った。

僕が `アヤ、と話していることには気づかなかったようだが、念のために「仕事の電話だった」とだけ付け加えた。

その日の夜、妻に「喫煙所に行ってくる」と言って泊まっている部屋を出た。このディズニーランド提携のホテルは全室禁煙らしく、喫煙所は一回のロビーのそばにしかない。

エレベーターを降り、喫煙所に着くと僕はすぐにアヤに電話をかけた。

直前にアヤから来たメールによると、夫はまだ帰ってきていないらしい。

ワンコールの後にアヤが電話に出る。

「電話取るの早いな」一本目の煙草に火をつける前だった。「お待たせ」

「だってさっきメールもらってからずっと待ってたもん...」

心なしか、アヤの声は沈んでいる。

「どうした、なんか元気ないね」

「元気なわけないやないかーい」そして拗ねた声に変わる。「だって奥さんとディズニーランド楽しんでたんでしょ...」

「そういうことか...」

僕はなんだか申し訳ない気分になる。

ほぼ不可抗力とは言え、アヤにとってはいい気分ではないだろう。

もしも逆の立場だったら、僕は嫉妬に狂っていたに違いない。

「ゴメンね...」

「どうせ奥さんとアトラクション乗ってる時は、アヤのことなんて忘れてたんだろうねー！」

「そんなことないよ」僕は全力で否定した。「何しててもアヤのこと考えてたよ！いつか...アヤと来ることがあればどんなアトラクションに乗ろうかとか、そんなことばかり考えてた」

「ホントに...？」それに対しておずおずと問いかけるアヤ。「ホントにアヤのこと考えてくれてた...？」

「うん」まるで幼子に言い聞かせるように僕は穏やかに言う。「アヤのことしか考えられないよ」

「よかった...。信じてるからね、コウジ」

「大丈夫だよ、信じてて」

それから僕たちは共に過ごした五日間の思い出話を交わした。

そのどれもがまるで昨日のことのよう思い出され、ほんの数日前のことなのにすでに懐かしい。

思い出を共有するとはこういうことなのだ。

同じ話題で盛り上がり、笑いあう。それがどれだけ幸せなことか。

「そだそだ、そう言えば一緒に作った歌の歌詞できたよー」

「ホント？早いね」

僕とアヤは初めてふたりで一つの物を作り上げようとしていた。

僕が作った曲に、アヤが歌詞とイラストをつける。そしてそれを僕がネット上にアップしようという計画である。

「どんな歌詞になったの？」

「えっとね」アヤは電話の向こうで大仰にコホンと咳払いをして続けた。「コウジと知り合って、会いに行く決めてからの期待と不安、それと実際に会って思ったことをそのまま歌詞にしてみました」

「へー」それを聞いた僕の心は跳ね上がりそうなほど歓喜に震えた。「早く見てみたいな」

「携帯に送ってみる？」

「うんうん、そうして」

「じゃあ、やってみるね」

そう言ってアヤは電話の向こうでパソコンをいじり出す。

すぐにアヤのパソコンからの着信があったのだが、アヤが送ってきた添付ファイル形式では僕の方で見ることができなかった。

「読めないな...」

「そっかー、じゃあ別の方法で何とか送ってみるよ。あ...」

不意にアヤの言葉が濁る。

何事かとアヤに尋ねると、夫からのキャッチがアヤの携帯に入ったようだった。

「ゴメンね、もう帰ってくるみたい...」

「そっか、わかったよ」僕は煙草の煙を大きく吐いた。「こっちもあんまり喫煙所にこもっていると何か言われるかもしれないしね」

「じゃあ...他の方法でコウジの携帯に送れたら送るね。でも、なかなかチャンスが無かったら遅くなるかも」

「いいよ、僕もなかなか見れないかもしれないし」

「お互い大変だね」そう言ってアヤは自嘲気味に笑った。「じゃあ、またあとでメールでね」

「うん、じゃあね」

アヤとの電話が終わると、僕はすぐに部屋に戻った。

妻はテレビをつけたまま、ベッドでディズニーランドの地図を眺めている。

「遅かったね」

念願だったディズニーランドにいたことがよほど嬉しかったのか、すこぶる上機嫌だ。

「ああ、部屋で吸えない分、吸い溜めしておかないとね」

そう言って僕は部屋のベランダに出た。

目の前には夜の東京湾が広がっている。

遠くに見えるのは大都会東京の灯りだろうか。時々頭上を飛び交う飛行機は羽田空港から飛び立つ飛行機だろうか。

そう言えば、昼間に景色を眺めていたら、遥かに富士山のうっすらとしていてそれでも確かな存在感を持った姿がかすかに見えた。

あの麓にアヤがいるのだ。

その日、だいぶ遅くなってアヤからの着信があった。

大体いつも通りの時間だ。

いつもアヤは夫が寝静まってから僕にメールを送ってくるのだ。

メールを開封すると、今度は確かにアヤが書いた歌詞が見ることができた。

ふたりで考えたその歌のタイトル。

僕には耐えがたいことがいくつかある。

そのうちの 하나가、妻に対して「保護者」であり続けること。

先日のディズニールンドをきっかけに英気を養って生活態度を改めてくれれば、などという微かな期待は見事に打ち砕かれた。

妻に対して何の期待もしてはいなかったのだが、「同居」している以上は「同居人」として、妻としての最低限の役割を果たしてほしかった。

しかし相変わらず平穩の上に胡坐をかいているような状態だった。

僕はますます自分のものであるはずの家から逃げるようになった。

できるだけ仕事を遅く終えるようになっていったし、早く終わった時でも近所の喫茶店で数時間過ごしてから帰るようになった。

僕が爆発するのは時間の問題であった。

アヤと離れてからおよそ一か月後のことである。

そして僕は妻との別居に踏み切った。

金銭的な問題から一か月という期限付きではあるが、一人で借りたマンスリーマンションは非常に居心地がいい。

「いいなー、一人暮らし」電話からこぼれるほどに大きく、アヤは羨望の声を上げた。「奥さんやアヤがいないからって、他の女の人連れ込みじゃだめだよ！」

「するか、そんなこと！」

「そんなことしたら」脅すように言うアヤ。「即お別れだからねー」

「わかってるし、アヤ以外に連れ込みたい人なんていないし」

「信じてるよー」そう言って、アヤははっと思い出したように言った。「元の家には全然帰ってないの？」

「ああ、帰るわけないよ」言ってから、妻が僕に先日メールで伝えてきたことを思い出す。「でも来週あたりにあいつの地元で友達の結婚式があるって言ってたから、いない間にちょっと荷物を取りに行こうかな」

「え？」アヤは驚きの声をあげる。「奥さん、その間釧路からいなくなるの？」

「そうなるね」

「そっか...」

そう言ってしばらくアヤは無言になった。

何やら思考を巡らせているらしい。

そして意を決して口を開く。

「ねえ...」

「ん？どうした、アヤ」

「その間、アヤそっちに行ってもいい？」

「...へ？」

自分でも間抜けな声を上げたと思う。それほどまでに彼女の発した言葉の意味を僕はつかみ損ねていた。

「だから、アヤが釧路に行ってコウジの部屋に泊まってもいい？」

「もし...そうしてくれるなら僕は仕事休めないからそっちに行けない分嬉しいけど...、お金大丈夫？」

アヤの住む街から釧路まで来ようとする前回と同様に飛行機を利用することになるが、その往復の航空チケット代はバカにならない。

アヤは夫との暮らしの中で財布の紐を握っている立場らしいので、金銭の出し入れに苦労することはないだろう。しかし限界はある。

「大丈夫、とは正直言えない...」そして一息ついてアヤは続けた。「でもコウジの部屋に泊まればホテル代いらなし、それに...厚かましいかもしれないけど、そっちにいる間にかかるお金だけでもコウジが出してくれれば助かるよ」

アヤが出す飛行機代に比べれば、それは天秤にかけていいのかと思うくらい微々たるものだったが、アヤに会えるのなら四の五の言っていられない。

「いいよそれくらい。アヤに会えるなら」

「ホントに？厚かましい女だとか思ってない？」

「全然！」

「よかった...」電話越しでもわかるくらいに、アヤはほっと溜息をつく。「じゃあ...さっそく飛行機予約しちゃうからね」

そうして僕たちは再会の約束を交わした。

あの新千歳空港での別れからほぼ一か月。

半年後、なんて言っていたのが嘘のようだった。

そして僕は一週間後、車を走らせていた。

今度は新千歳空港へではなく、釧路空港へ。